

1. まえがき
2. COC+参画機関の取り組み及び実績報告
(1) 事業全体の取組
(2) 奈良女子大学編
① 教育（地方創生を担う人材育成）について
② 就職（企業との関わり）について
③ 成果の社会的還元（地域貢献）について
④ 今後の取り組みについて
(3) 奈良工業高等専門学校編
① 教育（地方創生を担う人材育成）について
② 就職（企業との関わり）について
③ 成果の社会的還元（地域貢献）について
④ 今後の取り組みについて
(4) 奈良県立大学編
① 教育（地方創生を担う人材育成）について
② 就職（企業との関わり）について
③ 成果の社会的還元（地域貢献）について
④ 今後の取り組みについて
3. COC+協働機関（企業・自治体）から見た本事業の取り組みに対する評価
(1) 奈良女子大学編
(2) 奈良工業高等専門学校

はじめに

奈良女子大学やまと共創郷育センター長 藤原 素子

平成 27 年度に、文科省の「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」において採択されました本取組『共創郷育:「やまと」再構築プロジェクト』は 2 年目の活動を終わりました。奈良女子大学、奈良工業高等専門学校、そして今年度より参画した奈良県立大学の三校による協働の取組は、昨年度行った事業実施のための環境整備と基盤づくりの上に、それぞれの大学、学校の特色と強みを活かした事業として展開しました。

本事業の目的は、大学等の高等教育機関と地方公共団体、企業による産学官連携によって、地方創生に寄与する人材を育成することです。この目的を達成するために、本事業では「教育支援活動」と「就職支援活動」の二本の柱を立てています。「教育支援活動」では、それぞれの大学、学校において地域志向型教育を拡充し、実施しました。地方公共団体や企業からも講師を派遣いただき、授業を通して奈良県の魅力を伝え、奈良や地域に対する志向性を高めました。また、これまでにすでに連携活動を行ってきた県南部の町村との協働事業を活性化するために、昨年度の野迫川村に続いて、今年度は下市町にサテライトとしてのアクティビティセンターを開所しました。授業や地域のイベントに際して、アクティビティセンターで学生、生徒と地元住民が交流することにより、奈良県が抱えている問題を共有し、問題解決に向けての提案を行ってきました。一方、「就職支援活動」では、県内の企業についての情報を、セミナーやワークショップなどのさまざまなイベントを通して提供しました。

学生、生徒の意識は、まだまだ奈良県や地域に向きにくいのが現状ですが、今年度の取組を活かしながら、三校の連携をさらに密にして進めることはもとより、地方公共団体、企業等の皆様との連携パイプを太くし、関わっていただいている方々の心に響く事業として成長していきたいと考えております。

この報告書をご覧いただいた皆さまから、忌憚のないご意見をいただければ幸甚です。

平成 29 年 3 月

2. COC + 参画機関の取り組み及び 実績報告

事業全体の取組概要

本事業は平成 27 年度文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」奈良女子大学、奈良工業高等専門学校による協働の取り組み『共創郷育：「やまと」再構築プロジェクト』が採択され、大学等高等教育機関と地方公共団体、企業とが連携し、地域を試行した教育並びに社会貢献を推進し、地方創生に寄与する人材の育成を進めることを目的としています。

奈良県におけるCOC+実施校は奈良女子大学、奈良高等専門学校及び奈良県立大学で平成 27 年 12 月 1 日に発足した組織「やまと共創郷育センター」を中心に次のような取り組みを行ってきました。

1. 若年層の地元定着に向けた取組

奈良県を知り、奈良県を好きになる教育プログラムの提供を通じて奈良県で働く、奈良県で暮らすことを志向する学生の数を増やしていきます。また、県内でも特に人口流出、高齢化の進行が顕著な下市町、十津川村、野迫川村にはサテライト施設を開設し、地元の方との協働のもと、学生ならではの視点から地域活性化、地域振興に向けた取り組みを推進します。職業選択という人生の一大事に対しては先輩や同級生の持つ体験や知識も非常に重要であり、既存のキャリア・サポートに加え、就職について学生同士で相談し合える相互扶助システム（ピア・キャリア・サポート）の構築を進めてきました。

2. 雇用創出に向けた取組

奈良県の課題として、若年層が働きやすい職場、働きたいと思える職場が少ない、ということが挙げられます。行政と企業との協働のもと、県内企業情報の学生への提供、業界研究会等の出会いの場の提供、インターンシップの実施等を通じて学生と行政・企業との交流を深め、就職という形でのマッチングを推進します。さらに雇用が少ない、という課題に対しては、行政・企業との協働のもと、企業誘致や新産業創出を通じた雇用の創出を推進してきました。

3. 役割分担

- (1) 参加校：各校の特色を活かし、相互に補完し合いながら COC+事業全体を推進してきました。
- (2) 参加自治体：地域ニーズの提供を通じて、学生の学びの場を提供してくれました
- (3) 参加企業：業界研究会・就職説明会への参加、インターンシップの機会の提供を行ってきました。

4. 構築される教育プログラムの特徴

奈良を知り、奈良を好きになるきっかけとなる「地方創生理解科目」、参加自治体に赴いての合宿も取り入れながら地域の課題解決に実践的に取り組む「プロジェクト科目」（PBL 型教育）を整備してきました。従前より推進してきた奈良で学ぶことをより広く、より深く学生に提供し、奈良に対する志向性を高めてきました。

奈良女子大学編

□ 教育（地方創生を担う人材育成）について

1. 「地域志向科目」について

COC+事業の目的に沿った人材育成のために必要な学修を実施する科目として「地域志向科目」を開講しました。地域志向科目は、社会の未来を切り拓こうとする人材の育成を目指して、地域を知り、地域の課題を発見し、解決策を提案し実践に取り組む科目として開設されています。

2. 「地域志向科目」の実施

平成28年度地域志向科目として開講したのは次の29科目です。

区分	科目名	授業概要	担当教員
教養教育科目	パサージュ 1A	奈良を学ぶ、奈良で学ぶ：本学に進学した理由には色々あると思います。しかし、歴史遺産の宝庫、奈良で学び、女子教育の最高峰、女子高等師範学校の伝統を持つ奈良女で学ぶメリットを最大限に活用する4年間を送ってほしいと考えます。本学の環境を生かした歴史・文学・地理の視点・考え方を体験的に学んでいただきます。奈良女へ進学して良かったと思える授業を目指します。	内田 忠賢
教養教育科目	パサージュ 1B	奈良を学ぶ、奈良で学ぶ：本学に進学した理由には色々あると思います。しかし、歴史遺産の宝庫、奈良で学び、女子教育の最高峰、女子高等師範学校の伝統を持つ奈良女で学ぶメリットを最大限に活用する4年間を送ってほしいと考えます。本学の環境を生かした歴史・文学・地理の視点・考え方を体験的に学んでいただきます。奈良女へ進学して良かったと思える授業を目指します。	内田 忠賢
教養教育科目	パサージュ 20A	下市町へ行こう！：奈良県の中山間地域を見る。本学の共生科学研究センターの協力も得ながら、受講者に、「地域の現状を実感してもらおう」というのが一番のテーマです。社会問題として注目されている地方の維持・再生とも関係した「中山間地域」について、奈良県を事例として、その現状と課題について考えてみたいと思います。みなさんは奈良にキャンパスのある奈良女子大学で学んでいるので、この授業を通して、広い意味での奈良をもっと知って欲しいとも思っています。	高田 将志 吉田 容子
教養教育科目	なら学 (*1)	皆さんが暮らす（通う）土地となった奈良。その奈良について、いろんな角度から紹介し、講じます。この授業は、「奈良」をキーワードにして、奈良女子大学の多様な学びに触れ・知る「入門」となる授業をリレー講義形式でおこないます。	寺岡 伸悟 他
教養教育科目	環太平洋 くろしお 文化論	奈良県は、環太平洋黒潮海廊と古代大和盆地を南北に縦貫する幹線の十字路に位置し、環太平洋黒潮海廊である紀ノ川・吉野川・櫛田川ルートは古代日本の産業・文化幹線であった。この授業では、日本の国と文化が生まれた場としての奈良を紀伊半島と不可分の地としてとらえなおし、その地政学的位置、世界とのつながり、国内交通、中心性を帯びる理由、流通・経済・文化・宗教的背景など、多面的視点から考えていく。	小路田 泰直 他

区分	科目名	授業概要	担当教員
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナルB(11)	「奈良の食をさぐる」：近年、地域で生産した食材を地域で消費する「地産地消」運動が、地域活性化とも関連して盛んになりつつある。奈良県においても大和野菜などの農産物を始め様々な食材が生産されているが、知名度はまだ高くない。本科目では、奈良の食プロジェクトの活動を通じ、学生が主体となり、地産地消や地域活性化の取り組みに参画することを通して、奈良の食と地域活性化について理解を深める課題解決型授業を行う。	高村 仁知
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナルB(17)	「奈良の食を知る」：近年、地域で生産した食材を地域で消費する地産地消運動が、地域活性化とも関連して盛んになりつつある。奈良県においても大和野菜などの農産物を始め様々な食材が生産されているが、知名度はまだ高くない。本科目では、奈良の食プロジェクトの活動を通じ、学生が主体となり、地産地消や地域活性化の取り組みに参画する。これにより、奈良の食に関する理解と関心を高めるとともに、地産地消や地域活性化の取り組みを理解する課題解決型授業を行う。	高村 仁知
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナルB(41)	ウォーキングは、比較的軽度の強度で長時間持続出来る運動であり、体内脂肪を燃焼させ、肥満の防止・治療となる。また、高血圧症に対し血圧低下の作用を有する。あるいは、軽度の鬱に対して、抗鬱作用があることが知られている。ウォーキングは、運動靴と軽装の準備のみで行うことができ、比較的日常生活に取り入れやすい運動である。本実習では、実際に奈良女子大学付近を歩きながら、ウォーキングの運動生理学と実際について実習する。これにより、各自の健康のためのウォーキングを体験実習するだけでなく、他の人にウォーキングについて助言可能になる。	三木 健寿
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナルB(42)	ウォーキングは、比較的軽度の強度で長時間持続出来る運動であり、体内脂肪を燃焼させ、肥満の防止・治療となる。また、高血圧症に対し血圧低下の作用を有する。あるいは、軽度の鬱に対して、抗鬱作用があることが知られている。ウォーキングは、運動靴と軽装の準備のみで行うことができ、比較的日常生活に取り入れやすい運動である。本実習では、実際に奈良女子大学付近を歩きながら、ウォーキングの運動生理学と実際について実習する。これにより、各自の健康のためのウォーキングを体験実習するだけでなく、他の人にウォーキングについて助言可能になる。	三木 健寿
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナルB(46)	海外にある交流協定大学からの留学生を主な対象として実施するサマープログラム（7月：英語プログラム、8月：日本語プログラム）において、運営補助および学生交流企画の立案・実行をする。	横山 茂雄 雲島 知恵 松永 光代
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナルB(52)	この科目は COC+関連科目である。奈良東南部地域の課題のひとつである林業について総合的に理解し、暮らしの中の木	室崎 千重

	(*2)	の活用について学ぶ。奈良の木を用いたモノ作りを通して素材としての木を理解し、木のある暮らしの実践を考え提案する。奈良の木を用いたお箸とスツール製作および、奈良県・奈良の木ブランド課が実施する「奈良の木の匠養成塾」に参加する。	他
--	------	--	---

区分	科目名	授業概要	担当教員
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナルB(53)	この科目は COC+関連科目である。奈良東南部地域の課題のひとつである林業について総合的に理解し、奈良の木の暮らしの中での活用について学ぶ。奈良の木を用いたモノ作りを通して素材としての木を理解し、木のある暮らしで使うモノを考え提案する。奈良十津川村にて1泊2日で行う間伐材伐採体験や地域の暮らしの体験を通じて、林業や地域への理解を深める。奈良の木を用いて、新たな木のある暮らしに繋がる商品、プロジェクトを考え、具体的な提案を行う。	室崎 千重 他
キャリア教育 科目	キャリアデザイン・ ゼミナルC(4) (*3)	奈良女子大学の学生であれば、実家への帰省の際や就職活動の面接の場などで「奈良ってどんな場所ですか」と質問されるケースが多くあると思います。「鹿がいる町」「お寺や神社が多い町」と無難な回答をするのも悪くないですが、もう少しスマートな回答ができると好印象を残せることでしょう。本講義では、奈良県が誇る「日本一」の産業をリレー講義形式で紹介します。意外と奈良県内にも「日本一」の産業がたくさんある、ということに驚くことでしょう。一般教養として、就職に向けた業界研究の一環として、全学部の学生に受講を推奨します。「日本一」の看板を守る業界トップの方のお話が聞ける絶好のチャンスです。	藤原 素子
文学部 専門教育 科目	なら学概論B	この授業は、奈良に4年間住む(通う)ことになった皆さんに、さらに奈良の魅力や特徴を知ってもらうために、1、奈良県の地域ごとの特徴、様々な文化的特徴、奈良県の歴史の概要、さらに観光など現代の奈良の魅力発掘・発信について解説し、時にゲストも交えて、奈良県について広い知識とイメージをもてるようにする。2、いま各地で地元学など、町や村の魅力発掘発信が盛んに行われている。そうした地域づくりの観点から奈良を事例に考え、そのスキルを実践し学ぶ。	寺岡 伸悟
文学部 専門教育 科目	歴史地理学 概論	地理的事象を主たる研究対象とする地理学にあつて、歴史地理学は空間軸に時間軸を付加して地域・景観へアプローチする。まず、歴史地理学の本質と方法について概説し、ついで、奈良盆地を主たるフィールドとして地割と村落景観および古代都市、特に都城の形態に関して、具体的な事例を通して解説を加える。これらを通じて古代を中心として地表空間の組織化およびその景観的表象の歴史の変遷を明らかにするとともに歴史地理学についての理解を深める。	出田 和久
文学部 専門教育 科目	文化人類学 特殊研究	稲作と農耕儀礼、神事芸能との関係性について、大和盆地の農耕儀礼に焦点をあてて、地域的特性と歴史的な展開過程を解明します。後期開講の授業では、秋祭りから寺院の修正会・修二会等の年初の除災行事と春先の農業の予祝儀礼である御田植祭をとりあげます。	武藤 康弘

文学部 専門教育 科目	なら学 フィールドワーク 実習	一般の方に、奈良の地域文化資源や魅力を伝える(冊子等の)コンテンツの作成を「想定」しながら、文献資料検索などで基礎的知識や観点を獲得し、そこで得た視点で、実際に奈良をフィールドワークし、学外のコンテンツ作成の専門家と共同で、統一した枠組みのなかで奈良の情報や魅力を表現する成果物の制作の過程を学ぶ。	寺岡 伸悟
-------------------	-----------------------	---	-------

区分	科目名	授業概要	担当教員
文学部 専門教育 科目	歴史学実習	フィールドワーク調査を実際に行うなかで、歴史的感性を養い、過去を復元する能力の習得をめざす。2泊3日程度のフィールドワークも実施し、調査報告書を作成する。 なお、受講予定者は、前期に実施する「歴史学実習予備調査」の情報に注意しておくこと。	西谷地 晴美 他
文学部 専門教育 科目	コミュニティ・ リサーチ	地域コミュニティの課題把握法 日本の地域コミュニティは、少子高齢化の進展にともなって深刻な危機に直面している。その様相は都市と地方で異なっているうえに、学際的に対応すべき多面性も呈している。その一方で、地域コミュニティの抱える課題を住民自身がリサーチし、将来のビジョンを形成して、具体的なアクションへつなげていくような動きも活発化している。この授業では、そうした地域リサーチの方法と実践を習得する。	水垣 源太郎 寺岡 伸悟
文学部 専門教育 科目	コミュニティ・ アクション	地域コミュニティの課題解決に向けた活動実践 日本の地域コミュニティは、少子高齢化の進展にともなって深刻な危機に直面している。その様相は都市と地方で異なっているうえに、学際的に対応すべき多面性も呈している。その一方で、地域コミュニティの抱える課題を住民自身がリサーチし、将来のビジョンを形成して、具体的なアクションへつなげていくような動きも活発化している。この授業では、前期のコミュニティ・リサーチを踏まえ、そうした地域課題に対するアクションの方法と実践を習得する。	寺岡 伸悟 水垣 源太郎
文学部 専門教育 科目	文化メディア 学実習 B	取材実習。奈良県内のフィールドワークおよび調査報告書の作成。今年度は、生駒市の宝山寺門前町を取材します。この門前町は宗教集落、観光集落、歓楽街など多様な顔を持つ、大都市近郊のとても興味深いフィールドです。前期開講「現代民俗論演習」と連動する内容なので、そちらの科目も必ず履修すること。	内田 忠賢
文学部 専門教育 科目	なら学演習	奈良に関連するものとして、寺社の儀礼や、伝統的町並みとその活用、伝統工芸や食文化、地域づくり等のテーマをあらかじめ提示します。学生各自が、その中から個別のテーマを選んで、研究発表をして全員で討議します。また、実地のフィールドワークも予定しています。奈良を中心にしてテーマ設定をしていますが、必ずしも奈良に限定するものではなく、学生が希望するテーマ、他地域と奈良の比較という観点も可能です。	武藤 康弘 寺岡 伸悟
文学部 専門教育	地域探究 実践演習	現在、社会問題として注目されている地方の維持・再生とも関係した「中山間地域」について、本学の共生科学研究セン	高田 将志

科目		ターの協力も得ながら、その現状と課題について考える。前半は、奈良県吉野郡下市町を事例として取り上げる。後半は、奈良県南部の十津川村を訪問し、2011年紀伊半島大水害のその後の状況などを調査する。2つの事例の「中山間地域」にみられる共通点や相違点なども考えつつ、奈良県に位置する奈良女子大学で学んでいる皆さんに、広い意味での奈良を色々よく知ってもらいたいと考えている。	吉田 容子
----	--	---	-------

区分	科目名	授業概要	担当教員
文学部 専門教育 科目	地域社会の 課題演習	私たちの社会は、常に大きく変化している。例えば、経済のグローバル化の影響は、外国人労働者やその家族の居住するエスニック・コミュニティを生み出したり、外国人観光客の増加で、観光地や商業地のなかには賑わいを取り戻しているところがある。一方で、少子化や高齢化の進展は、地方における過疎化を加速させ、限界集落を生み出している。本授業では、私たちの生活の拠りどころである「地域社会」が現在どのような問題に直面しているのかを、受講生と一緒に、諸地域の事例を収集しながら見ていく。 *本授業では、地域社会の現状や直面している問題について、受講生が主体的に情報収集を行って問題提起を行う。また、授業時間外の現地見学・調査（奈良県内・日帰り）や、ゲストスピーカーの講演を予定している。	吉田 容子
文学部 専門教育 科目	現代民俗論 演習	奈良県内の伝統地域、伝統社会、伝統文化の変容を学びます。今回は、大都市近郊の宗教集落、生駒市の宝山寺門前町について深く学びます。この門前町は宗教集落であると同時に、観光地、歓楽街の顔を持つ、とても興味深い地域です。授業では、宗教集落、門前町に関する諸研究、宝山寺門前町に関する調査報告などを精読します。前期開講「文化メディア学実習B」と連動する内容ですので、そちらの科目も必ず履修すること。	内田 忠賢
理学部 専門科目	森林生物学 野外実習	奈良県は面積の77%を森林が占める全国有数の森林県である。また、ニホンジカが高密度で生息する山林が随所にある。この実習では奈良県の山林における植生観察を通じて奈良県の山林を構成する主要な樹種の分布と特徴を学ばせるとともに、シカによる食害の実態を観察し食害防止の取り組みなどについて学習することを通じて環境保全の在り方について考えさせる。	酒井 敦 他
理学部 専門科目	河川生物学 野外実習	河川生態系の構造と機能について理解を深めるために、本学自然環境研究施設（東吉村）に宿泊し、以下の実習を行う。 (1)環境観測、とくに水質の経時的変化：溶存酸素、pH、炭酸濃度、水温の観測 (2)生物調査：水生昆虫類の種類相（採集と同定）に基づく生息場所と水質の評価 (3)水生生物を使つての生理学的実験 (4)魚類の個体数推定	佐藤 宏明 他
生活環境 学部 専門科目	地域居住学	地域居住学では、まちづくりの視点から、様々な社会問題を考え、対応策を検討する。取り上げる題材は、できる限り現時点で社会的に注目されているものとする。この授業を通じ	中山 徹

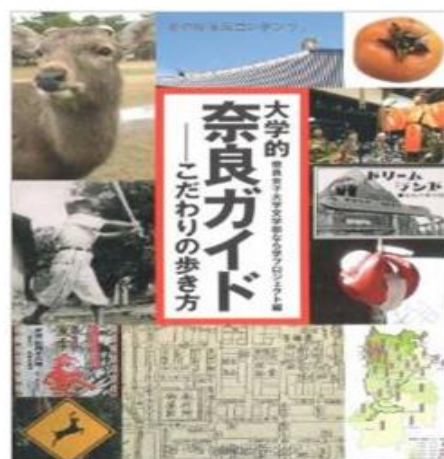
		て、まちづくりに関する基礎的な知識を獲得し、それを基にした理論的思考を身につける。	
生活環境 学部 専門科目	福祉 住環境学	社会の高齢化の急速な進行により、高齢者や障害者のための住環境整備は、現在の大きな課題である。授業では、高齢者および障害者の視点から、住まい、地域、施設にいたる住環境整備の重要性や、理論的背景、具体的な手法等について、体系的に講義する。福祉住環境コーディネーター検定試験の受験者にとっても、基礎講座的な意味をもつ	室崎 千重

3. 「地域志向科目」の事例紹介

地域志向科目29科目のうち、地方創生理解科目の「なら学」、プロジェクト科目の「キャリアデザイン・ゼミナルB(52)(奈良の木造形学習)」ならびに「キャリアデザイン・ゼミナルC(4)(日本の奈良を知る)」の3科目についてその内容を紹介いたします。

(1) 「なら学」(教養教育科目) (*1)

奈良を知り、関心をもたせるための科目で新入学生を中心に全学生に広く受講を推奨しています。学生生活の第1歩を踏み出す地となった「奈良」。「奈良」をキーワードにした奈良女子大学教授陣によるリレー講義形式で奈良について多面的な知的関心や学問的に考える能力を養うことを目的として実施しています。



「大学の奈良ガイド」(なら学プロジェクト編, 2009年)

「奈良の概要」	寺岡伸悟
「奈良の祭」	武藤康弘
「都城論」	舘野和巳
「万葉論」	西村さとみ
「東大寺論」	西谷地晴美
「奈良公園」	佐藤宏明
「奈良の自然地理」	浅田晴久
「世界遺産建築」	上野邦一
「奈良の仏教美術入門」	加須屋誠
「奈良の地域文化と産業」	寺岡伸悟
「奈良のアートとまちづくり」	山崎明子
「吉野論」	水垣源太郎
「近代奈良と娯楽文化」	内田忠賢
「地図と奈良」	西村雄一郎

授業の感想

様々な視点から奈良を知り、学ぶことができました。

奈良の観光地の歴史を芸術や地理学などいろいろな面から学べたので良かったです。

古代奈良の歴史から現代奈良の特色まで幅広く情報を手に入れることができました。また、奈良の特産品などは自分の周りの人との話題となって楽しかった。

毎回違った視点から奈良を見ることができ、新しい知識が増え、奈良についての理解が深まりました。

奈良は鹿や神社・仏閣だけではないということを学べた。

奈良市だけでなく奈良南部の話や奈良の歴史を学ぶことができました。

奈良の産業やアート産業を学んで奈良の魅力に対する理解が深まり、奈良の外部に発信していくべきコンテンツをもっと知りたいと思うようになりました。

奈良に進学し、奈良のことを少し詳しくなっていたと思っていたが、私の知っているのは、奈良市にどんなものがあるのかなどといった程度の知識だった。鹿による奈良の宣伝効果と被害、吉野林業、奈良の地理などただ生活しているだけでは気づけないことをこの授業で学べた。

(2) 「キャリアデザイン・ゼミナールB (52) (奈良の木造形学習)」キャリア教育科目 (*2)

林業体験や製材所見学を通して奈良南部東部地域の課題のひとつである林業について総合的に理解し、暮らしの中の木の活用について学ぶ科目です。奈良の木を用いた箸とスツール製作などモノ作りを通して素材としての木を理解し、木のある暮らしの実践を考え提案しています。また、奈良県・奈良の木ブランド課が実施する「奈良の木の匠養成塾」に参加させていただき、地域課題に取り組み、地域の課題を解決する能力を身に付ける実践的な教育科目です。

年間授業内容

4月23日	・奈良の木の針葉樹と広葉樹を使用したお箸製作
5月14日	・奈良の木でスツール製作
6月18日	・講義「日本・奈良県の林業・森林」 ・製材所見学
6月26日	・講義「木材の魅力と奈良県産材の特徴」「木造住宅の防耐火設計」 「吉野材の特徴と性質・川上サプリの活動について」
7月2日	・林地見学 ・製材所見学

	・木造体育館建設現場見学
7月10日	・講義「不揃いの木を組む」「モノゴトをデザインする～人・モノ・空間の関わりについて～」「吉野材を使った魅力的な住宅使用例」
10月22～ 23日	・十津川村の林業を学ぶ：木造小学校の建設現場見学 間伐体験・皆伐現場見学、木工加工場の見学と十津川木材での木工 ・木のある暮らしで使うモノの提案発表
11月12日	・奈良の木を用いたモノづくり 構想
11月26日	・奈良の木を用いたモノづくり 構想、製作
12月10日	・奈良の木を用いたモノづくり 製作
1月14日	・奈良の木を用いたモノづくり 合評会



【写真 奈良の木の匠養成塾の様子】

(授業の感想)

座学を受けるまで、私は吉野の木について何も知らなかった。しかし、この講義を受けて、吉野の木の素晴らしさを理解できるようになっていったと思う。特に吉野林業は、他の地域と異なるところがあると知って驚いた。その一つに密植がある。吉野材は一般的な植栽に比べ、木が狭い間隔で植えられている。それは木の幹が綺麗な円筒形になるようにするためだと聞いて、なるほどと思った。少なめに植えたら、その分太い幹の木材ができると思うが、木の上の部分と下の部分で太さが違うものが出てしまい、木材として切り出す時に無駄な部分が出てきてしまうかもしれない。そういう面で吉野材は優れていると思った。また、吉野材が、年輪が細かいことや節が少ないことを知って、とても品質の良い木材なのだとよく分かった。このような木材を生産するためには何度も間伐や枝打ちを行い、手入れをしっかりとしなければならないので、かなり手間がかかるのだと思った。木造住宅の防耐火設計の話も印象に残っている。木は燃えるので木造

住宅で火に強いなんてありえないと私は今まで思っていた。しかしこの話を聞いて、その考えは一変した。木材は燃えるが、ゆっくり燃えるのだと知ったからである。動画で、木材でできたパネルを火が出ているところに被せてどのようにパネルが燃えるかをみる実験を見て、火が直接触れていない面に全く変化がなくて、とても驚いた。そばで立っている作業員の人たちも全く暑そうにしていないので、木材はゆっくり燃え、熱を伝えにくいということがよく理解できた。確かに、このゆっくり燃えるという点は防耐火設計の建築物を作る上で長所となるなどと思った。また、火源があっても、周りに可燃物がなかったり、空間ができていれば火事は広がらないということも分かった。このようなことに加えて、避難路を確実にする工夫などを考えて設計すれば、木造住宅でも防耐火基準をクリアした建築物を作れるのだと理解できた。

小川さんによる「不揃いの木を組む」の講義もとても印象的であった。小川さんは職人の暮らしを実際の経験をもとに話してくださった。まさに現場で生きる人の生の声だった。小川さんは宮大工の仕事をしていて、法隆寺を修復するには法隆寺を作れる人ではないとダメだと言っていて確かにそうだと感じた。伝統ある建物を後世まで、その美しい姿を保ったまま残していくには高い技術やその修復にける強い気持ちを持った人ではないとできないことだと思った。また、宮大工になるために弟子入りをして今まで学んできたものは授業で習うこととは全く違うのだということもよく分かった。私たちは何もかもを教えてもらって生きてきたが、親方を見て自分で考えて行動をしてきた小川さんの話を聞くと、自分は受け身になりすぎていたと思った。意思を強く持って一つのことを続けられる芯の強い人間になりたいと思った。

吉野には「枝打ち」という文化があることを初めて知った。節の少ない製材をたくさん市場に出せることは、外見重視の利用者が多く需要が大きいと思うので、売る側、そして買う側の両方に喜ばしいことだと思った。ただひたすら枝打ちをするのではなく、木が呼吸と光合成ができるように、柱の長さ分を考慮した枝打ちを行うという点から、木を大切にする思いが伝わってきた。建築に関わる上で「材を大切に使う」という基本的なことを教えてもらった。木の乾燥機の存在も初めて知った。ここでも、木の細胞のことまで考えた温度設定をされていて、「木は生き物」というお話からも、木材に寄り添った事業をなされていることが伝わってきた。木材を、効率よくかつ綺麗に乾燥するための丁度いい温度を見つけるまでの過程を思うと、製材になるまでの過程に、奥深さを感じた。吉田製材さんで、加工前の木を実際に触らせてもらった時に、木材がかなり水分を含んでいることがわかり、加工後の製材との違いを実感した。乾燥の必要性と乾燥効率を上げるための乾燥機の存在意義を知ることになった。乾燥機の燃料に化石燃料ではなく、作業過程で出た端材を利用して、空気汚染とごみ問題に影響を及ぼさないという、環境への配慮がなされていたことから、より多くの側面から事業を支えることを学んだ。また、櫻井さんで、集成材を間近で見るとその美しさに目を奪われた。集成材は四角形のイメージが強かったが、丸柱もつくれるのだと分かった。ムク材よりも強く、減圧乾燥機のおかげで背割りのない集成材は、需要の大きさから、もっと広まるべきだと思った。「よし坊」とともに吉野材がもっと広まっていくことを願ううえで、魅力を知る私たちが吉野材の拡大を支えていかないといけないとも思った。

乾燥において、吉野の木材を和歌山まで川に流して運んだことや、水中貯木というものがある

ことを聞いた時、木を水につけたら含水率が大きくなるために乾燥に時間がかかって大変ではないのかと思った。しかし、実際は逆で、乾燥が楽になるのだと知って驚いた。昔からそんなメカニズムがあることを知っていたのかは分からないけれど、知恵の素晴らしさを感じた。また、スギの木の中心は赤く、ヒノキの木の中心は白という基本的なことから、ヤング率や含水率の計測する機械があることも初めて知った。1度の講義にしか参加することができなかったが、1度だけでも得ることが多かった。後期に奈良の木を使って実際に自分たちで物を作る際に、また、これからの自分の建築に関わる姿勢として、建物や家具のもととなる材に気を配ること、大切にすることをしっかり根底に持ち、材を生かしていきたい。

製材所の見学では、過酷な労働環境の中、たくさんの工程を経て吉野材が誕生するのだということを知った。普段は見ることのできない場所だったので貴重な機会だった。徳田銘木さんに見学に行ったときは、木材の使用について新たな考え方を教えてもらった。枝分かれが激しい木やまっすぐでないといった規格外の木を製品化している。階段の手すりにしたり、柱にそのまま使って洗濯物かけたり、幼稚園で園児がのぼったり。使い方がおもしろいし、自然の形をそのままデザインに生かしているのだから、家に一本あるだけで存在感がすごい。子供のうちから人工的なものばかりでなくありのままの自然に触れられるのはいいことだと思う。そんな風に木のぬくもりに触れて育った人は、一生木のよさを忘れないのではないだろうか。山林を見学したときは、厳しい現状を目の当たりにしてたくさんのことを考えさせられた。きちんと管理されている部分と、されていない部分。木の根がむき出しになっていて危険な状態の場所もあった。この状況を打破するには、とにかく木を使ってもらうことが一番だと思う。日本で家を建てるのだから、外国産よりも国内産のものを使ったほうが湿気や四季の気候の変化に対応できるはずである。熊本駅の駅舎や五條市の体育館のように、公共の建物に木を使ってもらうことで、国内産の木のよさをたくさんの人に感じてもらえるのは一つの良い方法だと感じた。

座学ではたくさんの貴重なお話を聞くことができた。特に、宮大工さんの話が聞けるのは良い機会だった。宮大工は大きな木を使うから木のくせを直せない。だから生かす。私は高校生のとき、小川さんのお師匠である西岡常一さんの考えが書かれた本を読んだことがあり、そこにも木の良さや適材適所の話などが載っていた。木を巧みに使う技術は受け継がれていかなければならないと感じた。インテリアをデザインするときは、生活のあらゆる知識が必要になるのだと感じた。たとえば印象的だったのがハンガーである。使っていないときはハンガーっぽくなく、インテリアになる。でもしっかり服の形をきれいに保つことができる。この場合だと、衣服に関する知識が必要になる。ものをデザインするときは、それを使う人への深い理解が必要で、そこにどんな問題が隠れているのかをしっかりと見つけて改善できるようなものをつくる、という松本さんの考え方にはとても共感した。奈良の木の匠養成塾を受講するまで、私は奈良の林業について全く考えたことがなかった。しかし、4回の講座を通してその現状を知った今、奈良の木のよさをもっと日本中の人に知ってもらいたいという気持ちを強く抱いている。木であっても、ものによっては腐りにくかったり、うまく使えば火事に強くなったりするというのは目からうろこだった。

後期からはいよいよ奈良の木を用いてもものづくりを考えていくが、たくさんの方から奈良の木

の利用についてのアイデアのきっかけをいただけたので、それも参考にしながら、手で触れて香りをかいで、全身で奈良の木のよさを感じてもらえるものを作りたい。

(3)「キャリアデザイン・ゼミナールC(4) (日本一の奈良を知る)」（キャリア教育科目）（*3）

本講義では、奈良県が誇る「日本一」の産業を外部講師によるリレー講義形式で紹介しています。

奈良で働く魅力や暮らす魅力を語っていただく授業で、就職に向けた業界研究の一環として、全学部の学生に受講を推奨しています。

学習目的、目標は以下の通りです。

- ・奈良県に関する様々な知識を獲得、理解し、自分の言葉で表現できるようにする。
- ・奈良県に関する関心を深め、自身の将来を考えるきっかけとする。
- ・「日本一」の実績を守る業界トップの方のお話を、直接聞くことにより、自分の将来を考えるきっかけとする。

(例)キャリア教育科目:「日本一の奈良を知る」

講義コード 0153004

キャリアデザイン・ゼミナールC(4) 「日本一の奈良を知る」

「奈良ってどんな県ですか?」
 奈良に魅了された学生、はたまた就職活動の経験を通じて、奈良が学生や若人にとってどのような魅力や可能性を秘めているのか、その魅力を伝えることで、学生が自分自身の将来について考えるきっかけを作ります。本講義では、奈良が「日本一」の産業を誇る理由、奈良が誇る産業、企業、企業に働く、暮らすの魅力について語っていただきます。就職して、業界研究の一環として、奈良が学生や若人にとっての学生に有益な講義です。是非受講してください。

第1回目 ガイダンス
 ●9月30日(金) E107教室 担任 やまがみ 副担任センター長 藤原 美子
 ●13時~13時45分・15時15分~16時
 (17名以上出席可)

第2回目
 「キャリア-経済発展のついで(日本一)」
 スター株式会社
 代表取締役 渡辺 祥一 氏
 ●10月2日(月) 10時40分~12時10分
 N202教室

第3回目
 「産業遺産(日本一)」
 生駒郡土山町 竹原堂生堂 堂主
 久保 尚徳(号 吉次) 氏
 ●10月12日(水) 13時~14時30分
 N202教室

第4回目
 「90+7生産量(日本一)」
 三宅製菓工業株式会社
 西川 豊利 氏 坂下 一行 氏
 ●10月19日(水) 13時~14時30分
 N202教室

講義コード 0153004

キャリアデザイン・ゼミナールC(4) 「日本一の奈良を知る」

第5回目
 「蜜餞(日本一)」
 株式会社高井工業株式会社
 代表取締役社長 近野 健也 氏
 ●10月26日(水) 13時~14時30分
 N202教室

第6回目
 「産地(日本一)」
 奈良県森林センター
 所長 伊藤 寛文 氏
 ●11月9日(水) 14時40分~16時10分
 N202教室

第7回目
 「製粉(日本一)」
 下本町
 吉野村製粉工業株式会社 榎
 原孝博 代表取締役社長 榎
 原 孝博 氏
 ●11月30日(水) 13時~14時30分
 N202教室

第8回目
 「生産量(日本一)」
 大和郡山形町 山形町 山形町 山形町
 山形町 山形町 山形町 山形町
 山形町 山形町 山形町 山形町
 ●12月14日(水) 13時~14時30分
 N202教室

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナルC(4)
「日本一の奈良を知る」 第2回目「キャラクター柄弁当箱のシェア日本一」

「キャラクター弁当箱シェア日本一」と題して開かれました。スケーター株式会社代表取締役鴻池 良一氏をお迎えして、日本一になるまでの道のりについてお話していただきました。

目標を持ち達成するまでには戦略と戦術を考えることが大切であること、「ナンバーワン」を達成した次は「オンリーワン」を目指しているという大変貴重なお話をお聴きしました。

また、各部署管理職の社員の方々からは、これから社会人となる学生にとってイメージしやすい具体的な仕事内容やその魅力についてお話していただきました。参加した100人を超える学生達は熱心に聞きっていました。



(授業の感想)

キャラクター弁当箱のシェア日本一の会社がまさか奈良にあるということには驚いた。様々な部署の人達の話聞いていてこの会社には男女の差など関係なく働きやすい環境が整っているということが伝わってきた。今まで就職するなら大手企業への憧れが強かったが、働く環境の良さや長く勤められる会社であるかどうかを見極めて選ぶことも大切なのだなと感じた。

私は今回の講義で初めて「スケーター」という会社の存在を知りました。思い返してみると、私達の生活の中でお弁当や水筒といったキャラクター商品はよく目にすることが出来ます。そういった中でシェア60%の数値はすごいものだと思います。会社の方のお話を聞いて、女性の方が活躍できることやアットホームな会社の雰囲気にとってもひかれました。そういった土壌が国内で広く活躍を行うパワーの源になっているように思います。今回のお話で、就業についてとても前向きなイメージを持つことができました。本日はありがとうございました。

机の上に置いてあった商品を見て、お店で見たことのある商品が数多くありましたが、これら商品を奈良に本社のあるスケーター株式会社がつくっていることを初めて知りました。常に前向きでチャレンジ精神をもって、多様なニーズの変化にも柔軟に熱心に対応する。会社の体制に非常に感動しました。また、各部署の方の話からそれぞれの部署で会社全体をより大きく、より良くしていこうと日々奮闘されており、これからどんな商品をつくれるのだろうと楽しみです。本日はありがとうございました。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4)
「日本一の奈良を知る」 第3回目「茶釜生産量日本一」

生駒商工会議所会頭 竹茗堂左文 堂主 久保 昌城(号左文)氏を講師としてお迎えし実施されました。講師からは茶釜の歴史では裏千家、武者小路千家で茶釜の形が違うこと、竹の種類は様々であるが繊維が固く密度が濃い太平洋側の山の竹が最も適していること、茶釜の種類は「ぼてぼて茶釜」「ぶくぶく茶釜」「ばたばた茶釜」等があること等々の説明がありました。

また、茶道人口はピーク時の1/3に減少しており、時代のニーズに合わせて、手軽にお茶を楽しめる商品の開発の必要性や敷居の高さを払拭し、もういちどお茶のブームを起こしたい、そのためには行動をおこさないと何もはじまらないと熱弁を振るわれました。

今回、授業を受けた学生は講師の切望にも似た話を熱心に聞き入っていました。受講学生は順番に展示物を見てまわり、今まで見たことのない実物を間近で見ることができ有意義な時間を過ごしました。



(授業の感想)

奈良県が茶釜の生産量日本一ということで、その技術が残った背景やどのような竹が茶道に向いているのかを知ることができ、勉強になりました。竹の種類によってどの流派でどのように使われているのか、茶釜の制作には内職の方が欠かせないことなど、貴重なお話を聞くことができました。奈良で生産量が多いものや、有名なものと聞かれても、なかなか答えられなかったのですが、授業を受ける毎に奈良県の知らない一面を学べてとても興味深かったです。

今回は「茶釜生産量日本一」ということで茶釜について学びました。私自身、茶道とは無縁の人生を歩んでおり、何も知識がない状態でしたが、実際に本物の茶釜とそれが出来るまでを見ると本当に繊細でかつその中に職人さんにしかできない技がみえて興味をもちました、昔の全盛期には花嫁修業のひとつとして多くの女性にたしなまれてきた茶道も、現在はその3分の1の人口になってしまったらしいので、それを衰退させないためには、より多くの人々が気軽に茶道をできる環境を生み出すことが大事です。久保さんをはじめとする竹茗堂左文さんは初心者にも使いやすいよう、長めのものを作ったり、ジャパンEXPOでフランスに広めたり、今までにない新たな方法で茶釜の魅力を伝えてすごいと思った。有意義な時間をありがとうございました。

奈良県が茶釜生産量日本一でないと、なかなか聞くことのできない茶釜、お茶に関する話を聞いて貴重な経験でした。1日に2人で10個作れないぐらいというお話を聞いて、それでも生産量日本一を保っているということは、継続的な信念と努力がないとできないと思うの

で、本当に凄いと感じました。最後の「行動を起こさなければ何も始まらない」という言葉がとても胸に響きました。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナルC(4) 「日本一の奈良を知る」 第4回目「グローブ生産量日本一」

三宅町商工会 寺澤 潤一氏から、聖徳太子に由来する「太子道の集い」、生誕800年を迎える三宅町出身の僧侶忍性に関する事など三宅町の魅力について話がありました。吉川清商店 吉川 誉将氏からは、皮を裁断していた職人が、スポーツメーカーミズノから依頼されたことがグローブづくりのはじまりとされていることなど三宅町とグローブづくりの歴史、素材選びから仕上げまでグローブが出来るまでの作業工程について話があり、後継者問題等、グローブ業界の課題について触れられ、三宅町のグローブづくりの歴史を広く伝えていくことや海外生産している大手メーカーに負けない、「made in japan」ブランドを確立していきたいとの熱意がこもった話に参加学生は感動していました。有限会社ティー・エーシーインターナショナル代表取締役 置本 貴司氏から、若手グローブ作り職人さんとの出会いを通して、三宅町だからできることはないかと考え、グローブ作りの技術を生かしたオリジナルブランドを立ち上げたこと、現在、高品質のレザーを用いた靴を中心にオリジナル商品を販売中で、アイデアを生かし、世界へ向けて展開していきたいと意欲的な取り組みついでの話がありました。



(授業の感想)

グローブをはじめとしたスポーツ用品は、私にとってはブランドのものの方が価値があると思っていました。それはやっぱり、今回のような商工会や職人さんたちのことを何も知らなかったからなんだなと思いました。しかし、今回実際に作ったり関わったりしている人の話を聞いて見方が変わりました。グローブの製造工程もたくさんの工程があって、その中には手作業も必要でこれぞ職人というかんじだなと思いました。グローブに約30ものパーツがあることや、子牛の革が最適だということも初めて知れてとてもおもしろかったです。また、グローブ作りの技術力を他の商品に生かすというアイデアも素晴らしいなと思いました。1つの小さなアイデアが色んな人に伝わってたくさんの人と一緒に1つのものを作り上げる、そんな仕事を私も将来やってみたいです。とてもあこがれます。今回のお話しを聞いて、グローブへの関心が高まったとともに、自分も普段からアイデアを形にするようにしていきたいと思いました。

地場産業という観点から企業について知ることができて面白かったです。三宅町についての説明からしていただけたので、グローブ生産に関して町おこしと密着していることがよく感じられました。スポーツ用品産業にも興味があり、今日講義に参加させていただきましたが、町をおこしていくという仕事にもとても興味がわきました。三宅町のグローブ業界でも他の伝統産業でも聞くような後継者問題や町の外に若者がでてしまうことなど、どう町ぐる

みで支援していくのかということにも興味がありますし、やってみたい！考えてみたい！とも思いました。私は、野球はしていませんが、スポーツはたくさんしてきたので、スポーツに関連する仕事に惹かれます。少しそのような仕事の内側が見られ面白かったです。

たくさんの情報をとこところにちりばめながらお話ししていただいたので、最後まで楽しんで学ぶことができました。野球は好きだが三宅町という名前もスポーツ用品特にグローブ作りが盛んであるということも知らなかった。なんでもネットで調べてしまうIT世代の若者なので、ネットで検索して面白いものがあればぜひ訪ねてみたいと思う。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4)
「日本一の奈良を知る」 第5回目「業務用卵焼き機シェア日本一」

株式会社品川工業所庄野明社長をお招きして、「為己不希財」、
「為客不辭責財」を堅持し、実行してきたこと、社章(3つのQ)の成
り立ち、社訓が社章を基に考案されている等の紹介がありました。

1910年の創業後、全国菓子大博覧会において、製菓機器が一等
金牌を受賞したこと、モダンミキサー(餅(モ)や団子(ダン)製造用ミ
キサー)の開発、万能攪拌機の組み立て、工場の新築が分岐点と
なり、調理の工業用製造装置の開発を中心に発展。高速混練造粒
機「トリプルマスター」で農林水産大臣賞を受賞、第一回奈良県ビジ
ネス大賞最優秀賞を受賞するなどの輝かしい実績や、本社工場を
新築し大型テスト室・事務所フロアを一新したこと等が話されまし
た。製品紹介では、フラット型炒め機「AQ-F型」による炒飯と焼きそ
ばや卵焼き機(ロールタイプ)を使った卵焼きの調理過程の紹介が
あり、「奈良から世界へ」躍進していく品川工業所の現状と未来像に
ついて話され、最後に、次の100年を目指し、舞台裏から世界の生
活を支える企業として品川工業所は革新・成長を続けていると淡々
と語られる社長の人柄や身の回りの生活用品が品川工業所の開
発製品であることを知り、学生は大きな感銘を受けていました。



(授業の感想)

メーカーの商品はすべて機械まで一つの会社で作っているイメージだったので、おいしいお菓子やご飯の製作に製造装置を開発している会社も関わっていることを知りました。炒飯や焼きそばを一瞬で作ってしまう機械や大量生産する商品を作る機械の技術は見ていておもしろいので工場見学など見に行きたくなりました。たまご焼きの機械はロールする過程は人間がまくのも難しいと思うので機械の動きで再現しているのはすごいと思いました。前に並べてあった商品もほとんど見たことがあったので、品川工業所の機械で作られたものをかなり食べていると思います。「奈良から世界へ」という話では海外に機械を輸出して技術を伝え、「たまご焼き」のような日本の味が世界に広がることは素晴らしいと思います。日本の食を支えている方の話を聞けてよかったです。ありがとうございました。

食品加工機械のような工業機械を作る企業は、普段会社の名前を見ることはないのですが、この品川工業所の機械を使っている企業が多いのにとっても驚きました。セブンイレブン

のシュークリームやパックサラダ、カルビーのお菓子などはとても身近です。日本を支える企業のひとつだなあと思ったのと同時に、奈良の企業であることにとても感動しました。

品川工業所さんでは卵焼きのような食品だけでなく、製菓や医薬品などさまざまな分野において作られていることを知りました。スーパーやコンビニなどでよく見かける商品もここで製造されていたり、その機械によって作られていることを知り興味深い内容でした。私たちの日頃食べている食品などがこのような機械で作られているのだな、と製造過程を知るとは食文化を考えるうえで大切な視点の一つだと気づくことができました。焼きそばや炒飯を作っている過程で使われている機械も工場見学をしているような気分でした。今回の講義をきっかけとして改めて食について考えてみたいと感じました。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4) 「日本一の奈良を知る」 第6回目「集成材出荷額日本一」

奈良県森林技術センター伊藤貴文所長から、集成材産地としては奈良県南部地域に限られた地域産業としては日本唯一であるとの話があり、実際の木片等を使ってそれぞれの木の特性(樹液のにおい、シロアリに対する耐性等の性質)、育成の仕方による違い、桐の木をプレスした木の方が冷たく感じること、プレスした木に樹脂を塗ることにより鉄のような木材を製作することができることや木片の膨張率の違い(フラスコの中の木による工作物を取り出すことができない)等について、丁寧に説明がありました。また、パワーポイントを使って木質材料の種類ごとのエレメントに関すること、合成材の繊維方向による特徴、集成材の利点として製材よりも集成材の方が任意の寸法の部材を使用するので無駄が少ないこと、均一に乾燥した部材を接着して製作するので施工後に変形が少ないこと、無節の製材を製造できること、任意の強度の部材の製造が可能であることや任意の曲率半径の湾曲部材が作れること等の話がありました。次いで、吉野の美林に関わる話の中で、吉野は林業の発祥の地であること、長い年月をかけて大木を育成する方法、年輪緻密な材を作る工夫や吉野杉の強度について、また、吉野林業に密接に関係する樽丸生産の成り立ち(味噌の需要が増加したことによる)、樽と桶の違い、“撞木”生産のシェアの100%は奈良県産のものであること、「板」(木が反る)と「柱」(木がまっすぐ)の漢字の意味等の知らなかった話に受講学生達は興味津々な面持ちで聞き入っていました。



(授業の感想)

おもしろかったです。初めて知ることが多くて興味深かったし奈良の吉野杉が昔からすぐれていて、人々が努力してきたことも分かってよかったです。集成材の有効性についても具体的に説明して下さいました。ありがとうございました。

実際に木材に触れてみると、金属製品などと比べて、やわらかくあたたかいような印象でした。また木材には香りもあって、非常に落ち着くものでした。オイルの香りは5つともそれぞれに違って、さわやかなものから深い香りまでさまざまな香りがあることに気づきました。木材の性質を利用して工夫をこらした製品を手にしてみて、改めて木のあたたかみに触れ、木材の素晴らしさ、魅力に気づくことができました。身近にある木材を大切にしていきたいと思いました。

集成材というものの存在は、CLTとセットでなんとなく知っている程度でした。今回の講義で、集成材の優れた点が良くわかりましたし、奈良県中部～南部に根付いた産業であることを初めて知ることができました。また、生活の中に溶け込んでいる木材にも、本当にいろんな種類があり、いろいろな工夫がなされているんだなあと感じました。日本の山林を守るためにも国産の木材を活用していくおとはこれから本当に重要なので、魅力的な製品がますます増えてほしいと、心から思います。CLTについてももう少しお話聞きたかったです

木材の特徴について、実際に手で触れたりしながら講義を聞くことができたので、木材製品についてさらに興味を持つことができました。また、奈良県は林業が盛んなことは知っていましたが、吉野林業が無節材を生産していることや集成材の利点、どこに集成材が使われているか、集成材の特徴などについては知らなかったもので、勉強になりました。吉野の木々の特徴についても知る機会はありませんと思うので、奈良県の林業について詳しく知ることができて良かったと思います。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4) 「日本一の奈良を知る」 第7回目「割り箸生産量日本一」

割り箸・箸袋製造卸「兵庫商店」代表兵庫保行氏、箸の販売店の峠喜重朗商店代表取締役の峠喜志嗣氏をお招きして実施されました。兵庫氏から、割り箸づくりルーツ、下市町が割り箸生産に欠かせない杉の生育に適した気候であること、割り箸は桶や樽丸作りの際に捨てられる白身(木材の白い部分)を利用して生産されていたこと(現在は桶等の生産が減少したため利用されていない)、杉の割り箸はのこぎりを使い、桧の割り箸は刃物を使用して生産されていること、割り箸の種類やその種類によって販売価格が異なること(一膳3～8円、高い物で100円)、また、割り箸の生産は数年前まで森林破壊に繋がっていると話題になったが、そうではなく捨てるはずの切れ端を利用しており(割り箸の木材利用率は0.1%程度)、洗剤を使う必要がなく川や海を汚さないし、捨てられた割り箸は土に帰るので究極のリサイクル商品であるとの話をされました。次に峠氏から、割り箸の生産は竹が利用されていたが、江戸時代にはいと木製の割り箸が作られるようになったこと、和食が無形の世界遺産に登録されたことにより、割り箸が世界に普及したこと、国内産の割り箸はJAL、シンガポール航空やエールフランス航空の機内食に利用されていること、全世界の日本食店は9万店(2015年)に増加しており割り箸の重要は伸びていること、割り箸の生産国は中国、日本、韓国、ベトナム等となっていると話されました。また三宝の9割が下市町で生産されているとの話もあり下市町や割り箸等についての見識を深める有意義な授業となりました。



(授業の感想)

「割り箸はエコ、究極のリサイクル商品」と聞いて、はじめは驚きましたが、お話を聴いて納得できました。下市町も田舎でありながらその良さがたくさん見られそうだと行ってみたいになりました。300年前にも割り箸が売られていたことなど、とても奈良の歴史が感じられて興味深かったです。

割り箸について今まで使い捨てするのはもったいない、なるべく自分の物を使おうという

意識をもっていました。実は廃材を利用していることが印象的でした。日本の食文化が世界に広まっている超勢とともに吉野の割り箸と吉野の自然、歴史なども広まると素敵だと思います。また、下市町は割り箸だけでなく神具などの生産や柿、ハーブなど自然に密着してうまく活用する取り組みがなされていて学生のうちに一度訪れてみたいです。ゆるキャラと伝統工芸、文化などを一緒にPRする取組も興味深いので、今度機会があったらコミュニティアクションに参加してみたいです。

割りばしの歴史が思ったより古いことに驚きました。また、割り箸というと森林破壊というイメージが一般的にはあったと思いますが、実は木材の使われない部分を利用したエコなものであるという認識がもっと広がって、エコな割り箸を積極的に使うようになったらいいと思います。また、下市町という名前は聞いたことはありましたが、どこにあるのか、どんなところかということあまり知らなかったもので、パンフレットがいただけで良かったです。

私は最近まで割り箸は環境によくないものだと思っていました。しかし、今回の講義で割り箸は柱などを作った残りをを用いて作っているということが分かりました。それを聞いて、割り箸は木を有効活用した環境に優しいものなのだなと思いました。さらに、300年も前から売られていたことでとても驚きました。また、下市町では箸の他にも柿などのフルーツや、人気が高まってきているピザハウスなど、興味のそそられるものも多くあることも分かったので、ぜひ一度遊びに行ってみたいと思いました。

やまと共創郷育センターが開講する授業科目キャリアデザイン・ゼミナールC(4)

「日本一の奈良を知る」 第8回目「金魚販売量日本一」

大和郡山市地域振興課観光戦略室長 植田早祐美様、同産業水産課農業・金魚係長 宮本和幸様をお招きして実施されました。宮本様から金魚の歴史(約2000年前で、中国南部で突然変異(赤色)した野生のフナが発見され、選別淘汰の末、今日の金魚に至ったこと、大和郡山市における金魚養殖の由来は、1724年に柳澤吉里侯が大和郡山へ入部のときに始まり、明治維新後は職録を失った藩士や農家の副業として盛んになったこと)、金魚の販売量(平成5年をピークに減少の一途を辿っており、その要因としては養殖業者の高齢化や需要の減少など)、改善策として金魚産業の活性化のために「金魚品評会」、「優良企業養殖コンクール」、「金魚養殖の体験学習」や「金魚マイスター養成塾」等を実施しているとの話がありました。植田様からは金魚で町おこしと題して「全国金魚すくい選手権」の紹介を女性向け漫画雑誌に掲載の「すくってごらん」の描写を通してお話しされました。大会にはつばがある帽子を被ることが禁止されている理由、金魚を上手にすくうコツや大会は独特のルールにより行われており、今年度の大会にはスタッフとして2名の奈良女生の協力があったことなどでした。「平和のシンボル、金魚が泳ぐ城下町」にある郡山城跡に関わるイベントなどの話がありました。受講学生の多くは大和郡山市の金魚が有名であることは知っているようでしたが、講師から掘り下げられた金魚や郡山城等の話を初めて聴き大和郡山市に関する見識を深めることになり有意義な授業となりました。



(授業の感想)

お祭りでは必ず「金魚すくい」があり身近な魚なので、奈良県の大和郡山市が販売量日本一というのに驚きました。海なし県なのに魚の養殖で日本一なのが面白いと思いました。金

魚の入った電話ボックスや金魚のオブジェなど実際に見てみたいです。大和郡山のイオンの金魚のオブジェは見たことがありました。下宿でアパートがペット禁止なので魚も飼えない(?)ですが、金魚に癒されてみたいのでいつか飼いたいと思いました。養殖の過程で「選別」をするということでしたが、尾が悪かったり色があまり出ていない金魚も、金魚すくいなどで利用されると聞いて安心しました。「竹のす」や「通し」などあまり耳にしない道具を使うので興味がわきました。金魚すくい大会の全国大会があったり、漫画に大和郡山市が取り上げられていたり知らないことがたくさんあったので、奈良県のことを色々知れて良かったです。ありがとうございました。

金魚の種類豊富さに驚きました。帽子のつばが禁止である理由が面白いなと思いました。何か一つのことの特化して町おこしをPRするのはリスクもあると思うのですが、むしろ全国のマニアックな人々を観光に呼び寄せることができると良いと思いました。

「まちおこし」についてとても興味があります。金魚すくい選手権大会については「テレビチャンピオン」で観て知っていました。大和郡山というと金魚！みたいなイメージがあります。まちおこしをするというときにどのようにこのイメージを使うのかとか今日大和郡山におけるまちおこし活動を知れておもしろかったです。金魚のおうちデザインコンテストという取り組みもおもしろいなと思います。そのような戦略を考えて活性化させていくというお仕事はやりがいもありそうだなと感じます。電話ボックスを金魚の家にしちゃうとことか、どうやったらそんな案を思いついて、実行に移せるんだろう、、、そういうことを考えるのは大変だと思うけど楽しそう！と思いました。今日お話を聞いて漫画も面白そうと思いましたし、行ってみたい！と純粹に思いました。実際に金魚電話ボックスや机に金魚が泳ぐカフェ、50円で金魚すくいのできる道場など全然知らなかったのですが面白そうなものがたくさんだなと思いました。

4. 学生向けセミナーの実施

奈良女子大学やまと共創郷育センターでは、「地域志向科目」の実施の他、広く学生向けに「奈良」をさらに身近に感じていただくことや、多様な働き方を学ぶため、学生向けセミナーを4回実施いたしました。

やまと共創郷育センター第1回セミナーの開催 「奈良で輝く女性たち」

平成28年6月28日(火)

奈良県及び株式会社ウーマンライフ新聞社様のご協力を得て、やまと共創郷育センター第1回セミナー「奈良で輝く女性たち」を開催いたしました。

セミナーの前半では、奈良県こども・女性局女性活躍推進課長 金剛真紀 様より女性の活躍に関する奈良県の現状と「奈良県女性の輝き・活躍促進計画」の考え方について、さらに奈良県が進めておられる「女性翻訳者の養成・活躍支援」事業についてご紹介いただいた後、奈良県女性センター所長 上中 三恵 様より奈良県女性センターの取り組みについてご紹介いただきました。

セミナーの後半では、実際に奈良県で活躍している女性の先輩として株式会社ウーマンライフ新聞社取締役編集長 河本 敏江 様に女性の感性を生かした『女性を楽しむフリーペーパー作り』についてご紹介いただきました。



学生の感想

- ・女性支援に興味があったから。
- ・女性の社会進出と活躍に興味があるから
- ・奈良の女性の活躍について興味があったからです。
- ・女性が男性と同じ立場で働くことがよいと考えていたので、女性らしさを生かして働かれています

お話が新鮮でした。

- ・女性センターの催しを知れてよかった。ぜひ時間を調整して行ってみたいと思う。
- ・将来の視野を広げるために様々な方のお話を聞きたいと思っており、また、自分自身もフリーペ

ーパー団体に入っていて、河本さんの話に興味があったため。

- ・私自身も、地域で生き生きと働けるようになりたいと思っているので、今回のお話が、今後の自分の将来の参考になればと思い受講しました。

やまと共創郷育センター第2回セミナーの開催 「奈良の世界遺産」

平成28年7月26日(火)

奈良県及び奈良市観光協会様のご協力を得てやまと共創郷育センター第2回セミナー「奈良の世界遺産」を開催いたしました。

セミナーの前半では、奈良県地域振興部文化資源活用課 小池香津江様より奈良県の世界遺産とその活用事例についてご紹介いただきました。セミナーの後半では、公益社団法人奈良市観光協会専務理事 鷺見哲男様より「モノ」の観光から「コト・ヒト」の観光へという奈良市観光協会の事業展開についてご説明いただきました。参加者からは観光産業に対して興味が沸いたとの意見が多く寄せられました。



学生の感想

- ・観光のやろうとしていることがわかりやすかったです。
- ・「奈良ってどんなところですか？」と聞かれたらきちんと答えられるようになりたいと思いました。
- ・今まで観光業界にはまったく興味がなかったですが、すごく興味が湧きました。私たち学生のことを考えた話をしてくださったので為になったし、自分について考えることもできたので良かったです。
- ・奈良の観光がいかんじてできているか、点と点が結ばなければならないという内容が印象深かったです。
- ・奈良の世界遺産について知っているようで知らないことがたくさんありました。
- ・もっと奈良のことについて大学時代に知りたいなと思いました。
- ・スペイン人、イタリア人が奈良にたくさん旅行きているのにびっくりしました。
- ・JR奈良から興福寺へ向かう道が『平成→昭和→大正→…』ってなっているのを初めて気づきました。
- ・「モノ→ヒト・コト」の中身や重要性などがよくわかりました。奈良県全体にとっても大切なことだと思いました。

やまと共創郷育センター第3回セミナーの開催 「未来の働くスタイル」

平成28年10月 5日(水)

奈良県内で活躍されているWomen's Future Center 代表 栗本 恭子 氏をお招きしてやまと共創郷育センター第3回セミナー「未来の働くスタイル」を開催いたしました。

第一部は、栗本代表から女性の働くスタイルの変化に対応した女性の働き方について講演が行われました。

第二部は、Future sessionというワークショップを通して、参加者一人ひとりが未来思考で女性の働き方について考えました。

全体を通して講演を聞き、また参加者同士が意見を出しあって刺激し合い、将来の女性(自分)の働き方や自身の人生設計について、考える良い機会となりました。

参加者から終了後、採ったアンケート結果によると大変満足であったとの意見が多く寄せられ、有意義なセミナーであったことが伺われました。



学生の感想

- ・想像していたより少し抽象的なワークだったのですが、自分が想像していなかったような“やるべきこと”を発見することができました。ありがとうございました。
- ・普段、同世代の人としか関わりがないので広い世代でいろんな立場の人たちと意見を交換でき
て、有意義な時間だった。
- ・まだ働くということがぼんやりとしか考えられていないので、これを機に人生設計をしっかりと
考えていこうと思いました。貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。
- ・取り組みや、様々な人の意見等を聞くことができてよかったです。ありがとうございました。
- ・グループワークを通して、自分の今後について考えることができ、具体的に何をすれば良いのか少し見えてきました。
- ・将来、働くことも子育てもあきらめたくなくて、それって難しいことなのかなと思っていた
けれど、女性の活躍の場は思っている以上に用意されているのだなと思いました。
- ・栗本先生がご経験された苦勞、特に子育てはもう少し具体的にお聞きしたかったです。どの
様
にして、苦勞を乗り越えられて来たのかアドバイスになると思いましたので…。

やまと共創郷育センター第4回セミナーの開催 「奈良クラブの活動とその歩み-奈良にリーグクラブを-」

平成28年10月27日(木)

奈良クラブGMの矢部次郎氏を講師として、やまと共創郷育センター第4回セミナー「奈良クラブの活動とその歩み-奈良にリーグクラブを-」を開催いたしました。

講師の矢部次郎氏から、サッカーに関わる世界の人口、サッカークラブの収益(放映権による収入等)やサッカーを取り巻く環境についてのお話がありました。奈良県のサッカーの状況に関して、奈良県はリーグに加盟していない9県の中の1県であること、自身はプロサッカー選手(名古屋グランパス)であったこと、故郷の奈良県に愛着を持っていることもあり、奈良県にリーグに加盟できるプロのサッカークラブを創設したいとの思いで奈良クラブを設立したこと等々の話がありました。

また、サッカーは技術より人間性であるとの理念に基づき、低学年から立ち振る舞いや身だしなみの教育を推奨していること、奈良クラブを通じて選手として町の為に活躍する人材を育成することや周りを元気にすることを理想に掲げクラブ運営に取り組んでいるとの話がありました。

参加学生達は今まであまり目に触れることや聞いたことのない講師の話に聞き入っていました。



学生の感想

- ・サッカーの話だと思っていましたが、スポーツを通じた人材育成、地域の盛り上げなどの話が主だったため、スポーツに興味はなかったんですけど面白かったです。
- ・奈良クラブのこと、スポーツの力を矢部さんだからできる話をたくさんきかせてもらってすごく良い経験になりました。話もわかりやすく、奈良クラブのことを楽しく知ることができました。「勝ち負けよりも大切なものがある」というコンセプトの意味が深く分かって面白かったです。
- ・正直、奈良クラブのことはあまり知らなかったのですが、ただサッカーをするだけでなく、人と町とこんなにも大きくかかわっているということに驚きました。スポーツの力の大きさを知ることができ、とても勉強になりました。
- ・サッカーについてよく知らなかったので、初めて聞くことも多くていろいろ知れて良かった

です。地域に密着型のスポーツクラブとして、これからも、みんなが楽しめる！そんなクラブで頑

張ってもらいたいと思います。

- ・私も静岡出身のため地元ではサッカーが盛んでクラスに必ず5人はサッカークラブに入っている同級生がいました。いつも近鉄奈良駅の近くで奈良クラブのビラを配っている姿を拝見しているので、今回のお話はとても興味深かったです。頑張ってください。
- ・スポーツの力によって町の誇り、子供たちの憧れとなるクラブ作り、地域創造にかける熱い思いを感じました。

5. 地域活動拠点・下市アクティビティセンターの開所

「奈良女子大学下市アクティビティセンター」開所式 平成28年7月16日(土)

奈良女子大学は下市町農村環境改善センターに「奈良女子大学下市アクティビティセンター」を開所し、開所式を実施しました。

奈良女子大学と下市町は包括的連携協定を締結するとともに「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」においては事業協働機関として地方創生に向けて協働しているところですが、「奈良女子大学下市アクティビティセンター」はCOC+事業で学生が下市町を訪問した際の活動拠点として、また、教職員・学生と下市町の方とが交流を深めるコミュニティスペースとして利用すべく開所したサテライト施設です。

今後、学生や町民の意見を反映しながら、観光振興、社会ネットワークの構築といった同町の地域創生に寄与できる事業を展開していきます。センター内には同町の木工舎で製作された木製机・長椅子も配置され、学生が同町の地場産業に触れながら学ぶことができる環境ともなっています。



6. 活動報告事例

- (1) 地域居住学における野迫川村での活動報告：担当教員 中山 徹
- (2) 住環境学基礎実習における十津川村での活動報告：担当教員 室崎 千重
- (3) 中山間地域における活動報告：担当教員 高田 将志
- (4) 地域コミュニティにおける活動報告：担当教員 水垣 源太郎
- (5) 歴史学実習における活動報告：担当教員 西谷地 晴美 他

(1) 地域居住学における野迫川村での活動報告

平成 28 年度・地域居住学

地域居住学(住環境学科専門科目)で野迫川村を訪問し(フィールドワーク)、それを踏まえてワークショップを開催した。その概要と参加者の感想文である。フィールドワークは 11 月 19 日、20 日に実施した。

1. フィールドワークの概要

11 月 19 日(土)

■ 北股集落見学

北股集落近くの野迫川村役場にて、北股区長さんから当時の様子や災害の被災状況について 30 分程お話を伺った。その後、現地に移動し北股地区の被災現場を見学し、区長さんから再度話を伺った。学生から出された質問にもお答え頂いた。

■ 大股集落見学

大股集落内を大股区長さんに案内して頂く。大股集落で取り組んでいるアマゴの養殖場を見学した。また、集落内を通る小辺路を実際に歩き、集落の歴史についても区長さんから話を伺った。

■ 狩猟について講義

野迫川ホテルにて地元猟友会長曾我部さんより、地元の狩猟について、獣被害等についてお話を伺った。猟師が減少している現状とそれに伴う森林保全の現状など、村の状況について現況を把握した。

12 月 20 日(日)

■ 池津川集落見学

池津川集落を見学し、池津川区長のお話を伺った。この集落は野迫川村の中でも幹線道路から入ったところに位置し、人口減少、高齢化が特に進んでいる。その状況を伺った。また、閉校した池津川小学校、区長さんのご自宅を見学した。

2. ワークショップの概要

11 月 22 日(火)

■ ワークショップ

11 月 19、20 日の野迫川村でのフィールドワークで学んだことを踏まえ、大学で 12 月 22 日にワークショップを行なった。議題は、①野迫川村の良いところ、②野迫川村で改善した方がいいと思う点、③学生が野迫川村で貢献できると思うことの 3 点である。

これら 3 点について、学生が 6 班に分かれてグループディスカッションを行った。班内で話し合った結果を授業の最後でプレゼンし、各々の考えを全体で共有することで、野迫川村に対しての考えをさらに深めた。

3. 参加した学生の感想(抜粋)

■ 住環境学科 2 回生

①野迫川村で良いところ

都市に住んでいるとほとんど触れることのできない大自然に圧倒するというか、心を打たれる感覚を野迫川村に訪れることで久しぶりに経験した。奈良市内も緑が多いところだとは思いますが、野迫川村の厳しくも美しい自然の風景には心を洗われるような、なんとも言えない感動を覚えた。夜の静けさや川の音など、都市の喧騒の中で暮らしていると聞こえない自然の音を野迫川村では聞くことができた。ほっと一息つき、そばで自然を感じることができるのが野迫川村の良い点だと思う。

アマゴの養殖など、この土地の特色もみられるのも良いと感じた。実際にアマゴの養殖を見学し、アマゴを卵から成体にするまでこんなに手間と時間をかけて養殖していたのを知ったとともに、災害で被害をうけても今まで手をかけて続けているのに驚いた。

奈良女子大の狩猟サークルが野迫川村で活動をおこなっているのを知り、そのような学生への地域の伝承や若い世代との交流があるのも長所だと思う。また、話や案内をしてくださった村の人々が親切であたたかいのも印象的でよかったと感じた。

②野迫川村で改善した方がいいところ

ワークショップを通して野迫川村がよりよくなる改善点の様々な意見が出た。クマが出る、交通の便が悪い、少子高齢化などが主にあげられた。

猟友会の人の話にもあったように、人口林の割合が高く広葉樹が少ないのでクマの餌がなく人間が住む場所にクマが出没するようになったのが問題となっている。前の世代の人が植樹をおこなったことが年月を経て裏目に出たらしく、クマにとっても人間にとっても深刻な問題ですすぐには解決できないが、人間とクマの関係を考えるきっかけになったと思う。野迫川村に行く前はクマが出る村というイメージが一番強かった。クマの出没頻度が増えると、村の人の普段の生活が脅かされる。またクマが出るイメージが強くなると、訪れてみようと思う人もますます観光に来なくなってしまう。クマの問題の原因は深いところにあることを知り、すぐに改善することは難しいが取り組みが迫られているのを感じた。

少子高齢化の問題も改善への取り組みが必要だ。廃校になって使われなくなった校舎がそのままになっているのも改善すべきだと考えた。

③学生が貢献できること

このたび野迫川村を訪れ、様々な良い点の発見をするとともに、野迫川村の改善点も見えてきた。そして自分達学生が野迫川村の良いところや改善した方がよいところに学生として貢献できることを大きく二つ考えた。

一つ目は、学生が野迫川村の良い点・アピールポイントを県内に伝えるという貢献の仕方である。野迫川村を訪れて学んだことでもよい。学生ならではの自由な発想でできる活動があるのではないかと思う。例えば、野迫川村を訪問するツアーを企画し、観光で訪れる人が増えることで村に活気を与える取り組みや、いきなり大きな企画をしなくとも学内で野迫川村のPRポスターなどを作り、学生同士で伝え合うことも野迫川村を知る人が増え関心を高めるのに重要だと考えた。

二つ目は、学生が大学で学んだことや持っている知識や新しい発想を村の改善や発展に活かしてもらい貢献の仕方である。若い世代が少なくなると新しいアイデアが生まれづらくなると村

の人の話にもあった。廃校になった校舎が長年使われることのないまま建物だけ残っていたが、掃除・修理してきれいに使うことのできる状態にし、あらたな使い道を提案する取り組みも小さなことだが学生なりにできることだと思う。この建物の使い道としてはアートプロジェクトを導入してその展示場として利用する意見がでた。アートプロジェクトは地方再生の一つの方法として各地でもおこなわれているという話を近頃聞いたので興味深いアイデアだと考える。

このように、野迫川村の魅力を外に伝える取り組みや、野迫川村を訪れて村の人々と交流し、学びや発見を村や村の外で活かす取り組みが学生として無理なく有効に貢献できることだと考える。

■ 住環境学科 2 回生

①野迫川村の良いところ

野迫川村に行ってみて感じた山村集落の良さで私が取り上げたいことは大きく分けて“自然、人”があります。まず、自然は山村だけあって豊かで景色が良く季節の移り変わりを感じられます。さらに、川の水が透き通り綺麗で空気も澄んでいて環境さえ整えば申し分ない自然環境です。自然環境の豊かさがもたらす安らぎや落ち着きは街中では得られない良さです。また、その自然が育む食べ物もおいしく奈良県ですと暮らしていても知らない部分を知れました。次に、人は各集落やホテルなどで交流して誰もが距離が近く、柔らかい空気で接してくれたため初めて来た私でも気兼ねすることなく二日間を過ごせました。日々の生活の中では皆余裕が無く自分のことに必死な人が多

いからこそ、近頃あまり感じられない人の自然な温かさでした。

②野迫川村で改善した方がいいところ

街中の生活では得られない良いところがたくさんある村ですが、訪れる人、定住する人が少ないのが現状です。そのため自然の手入れも出来ず森が荒れ、自然動物との共生が難しくなっています。また、必要なものを手にいれるための店も無くなってしまいます。これらの原因として考えたのは“交通と産業”です。実際、私は奈良県ですと暮らしていますが、吉野以南は電車も通っていないため気軽に行こうと思える場所ではないし、道も国道は整備されているが、国道を外れば細かったりカーブが多かったり、似たような道が続いたりと車で行くにもある程度の難易度があり、数えるほどしか南部には行きません。しかし、簡単に電車を通したり道の形状を変えたりすることもできません。となると、村、集落までのルートをわかりやすくするという部分を改善すべきだと考えます。実際、バスに乗っていても同じような道で一体どこに自分がいるかわかりませんでした。これはツアー以外の初めて訪れる人には大きな問題点だと思うからです。また、村民の安全のために集落へのルートを複数持てるようにし、万が一に孤立する可能性を下げることなど集落の安全性を高めることも人が集まるには必要だと考えます。

外部から人が来る環境になれば次は中身が必要です。林業が衰退した今、野迫川村には栄える産業がありません。働き口がないのです。ただでさえ奈良県は県外に働きに出る人が多く、野迫川から通勤できる範囲にも働き口はほとんどありません。和歌山方面にでも中心部から離れた場所なので同様です。そのため現地で何か林業に代わる産業を作ることが人を集めることに必要だと考えます。交通と産業が整い、人が増えれば環境面にも手が行き届き観光客を呼ぶことのできる村に近づけると思います。

③学生が貢献できること

私たちに出来ることのまず基本にあることは高齢化が進む村に若者の考えを伝えることです。その中でまず、若者が多く使う SNS で野迫川について“発信”し良さを知ってもらうことが一つです。次に、現地に来てもらうための“企画やアピールポイントについて現地の人に提案”します。そのために必要な施設のために民家のリノベーションなどの住環境だからこそ関われる“環境整備への提案”をすることです。その後、実際に人に来てもらいその結果を踏まえ、さらに必要なことを現地の人と話し合い、自分も再発見した良さについて新たに“発信”します。発信、現地訪問、提案を繰り返し人が集まる村作りの手助けが出来るのではないかと思います。実際には、訪問中バスの中でもツアーについて話しをされていましたが、魅力的だと思うし行ってみたい人はたくさんいると思います。ですが、野迫川についてあまり知らず、関心が薄い人はそのようなツアーがあることを知らないと思います。こういう場面で若者たちが“発信”することが大きな意味があるのではと感じました。

後、若者はスマホを触ることが多いため電波が繋がらないことはマイナスかもしれないが、電子機器から離れて自然の中でゆっくりすることの魅力をかつて私は経験して感じています。若者にそのような体験をしてもらえるようなツアー内容を一緒に作るためにどのような内容だったらいかななどの“提案”ができると思います。“現地訪問”をして自分自身が現地のモノを食べ、使うことで現地の収入にもなります。特別大きなことはできなくても小さなことが村を変える一つの鍵になると思うので、住環境だけでなく大学全体で村に関わっていただけらなと思います。

今回、初めて野迫川村を訪れましたが、思っていた以上に良い場所だと感じると同時に問題が深刻だとも感じました。これから少子化が進み日本で多くの集落が消滅すると言われていています。都会では得られない日本らしい良さをもつ集落をひとつでも多く残すことが日本という国を残すには必要だと思います。人間はせわしなく前に進むことに夢中になっていますが、私は今あるもので十分だと思います。今あるものを維持し生かしていけるような暮らしを提案して いけるようになりたいと豊かな自然や不便な中にもある温かさや魅力を通して感じました。

平成 28 年度・住環境学基礎実習

授業の目的

平成 28 年度後期の住環境学基礎実習(中山担当)では、奈良女子大学野迫川村交流センターで「奈良女塾」に取り組んだ。この授業を受講している学生が現地の関係者と相談しながら進めることで、地域創生に寄与すると同時に、学生が山村地域の実情を学べるようにした。

2. 野迫川村「奈良女塾」の取り組み

(1)目的

野迫川村には、進学を考えている子どもたちのための学習塾がない。中には村外の遠く離れた塾に通っている子どももいるが、これには親の送り迎えが必須で、全ての子どもたちが通える訳ではない。また、村内には高校がないため、中学生は卒業後に村を離れる。そのため、小中学生には、彼らにとって身近な大人である高校生や大学生とふれあう機会がない。そこで、子どもたちの学習のサポート、大学生とのふれあい、またこれらを通して子どもたちが将来について考えるきっかけになるようなプログラムを奈良女塾として計画した。平成 27 年 3 月に第一回を実施

し、平成 28 年 8 月に第二回、平成 29 年 3 月に第三回を実施した。

(2)内容

奈良女塾の具体的な内容は、① 勉強、② パソコン教室、③ レクリエーション、④ 未来講座である。

①勉強

ワークを用いて各学年の総復習を行う。大学生がわからないところを個人的にフォローする。高校受験を控えた新中学 3 年生には、各自の苦手科目など柔軟に対応する。

②パソコン教室

Illustrator、PowerPoint、AutoCAD のソフトを用いて、パソコンを通じて自己表現やものづくりの楽しさを子どもたちに伝える。

③レクリエーション

スポーツやクッキングを通して、大学生を含め、学年を超えての交流を深める。普段は少人数でしか活動できない子どもたちに、大人数で取り組める機会を作る。

④未来講座

大学生が子どもたちに自らの経験を語り、将来の高校生活や大学生活、そして自分の未来を考えるきっかけになるようにする。

(3)参加者

塾の参加対象者は野迫川村小学校、中学校に在籍している児童、生徒である。

野迫川小学校・中学校の保護者の皆様へ

春休み野迫川奈良女塾のご案内

奈良女子大学

野迫川村の小中学生のみなさんを対象に、奈良女子大学の学生で春休みに塾を開催します。楽しいレクリエーションもありますので、ぜひご参加ください。

日時：平成 29 年 3 月 27 日～3 月 30 日（4 日間）
8:00～17:00（一部日程のみの参加も可能）

参加費 **無料**
（※お弁当の用意だけお願いします）

場所：旧野迫川中学校
対象：野迫川村の小中学生

内容

午前	●学習 学年別のワークに取り組み、一年間の総復習ができるようにします。わからないところを大学生が教えます。
午後	●パソコン教室 パソコンのソフトを使ってイラストを描いたり、キーボードの操作等を教えます。 ●レクリエーション みんなで楽しくスポーツやクッキングをします。 ●未来講座 高校生活や大学生活はどんなものなのか、大学生が自分の経験をお話しし、子供たちに自分の未来を想い描いてもらいます

そのほか様々なメニューを検討中です。

詳しいスケジュールや申し込み方法は後日、改めてお知らせします。

多数のご参加お待ちしております。

連絡先：奈良女子大学 生活環境学部
E-mail : oaa_kurobo@cc.nara-wu.ac.jp

(2) 住環境学基礎実習における十津川村での活動報告

平成 28 年度の住環境学基礎実習（室崎担当）では、昨年度に引き続き十津川村の谷瀬地区に通い、村の方と一緒に今後の移住・定住を見据えた村づくりに取り組みました。十津川村には、自然豊かな観光資源や濃密なコミュニティなど、都市部では失われてしまった豊かさが多く残っています。

今年度は、このような十津川村の魅力を学生目線で発信するための方法の検討や情報収集を目的として現地での活動を行いました。初めて十津川村に訪問する学部生と一緒に谷瀬のつり橋や瀨峡、玉置神社などの主要な観光名所を見学し、今後より観光客が訪れるようになるための情報発信の内容・方法を考え、話し合いました。また、十津川村での暮らしを移住者目線で体験してもらい、率直な体験の感想を通して、今後の村づくりへの課題を学生目線から考えました。谷瀬地区の村づくり活動では、ゆっくり散歩道の看板を学生の意見を活かして改良案を考え、レーザー加工機を用いて新たな看板プレートづくりを行いました。

昨年度に引き続き、2 月には谷瀬地区で育てた酒米をつかった純米酒「谷瀬」の酒仕込みをお手伝いします。春には美味しい新酒が完成する予定です。

この授業の対象は学部 3 回生で、TA として修士の学生も参加しました。

■ 活動の日時・内容

10 月 9,10 日	・十津川村谷瀬地区にて、村の暮らし体験宿泊 ・十津川村魅力発見と情報発信に関する意見交換
10 月～3 月	・十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板プレートの製作
2 月 12～18 (予定)	・美吉野醸造で十津川村谷瀬地区の酒米をつかった純米酒「谷瀬」仕込み
3 月 27,28 日 (予定)	・十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板設置完成



谷瀬集落内散策

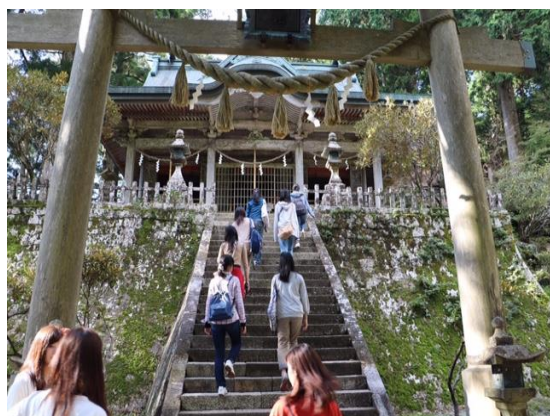


十津川村暮らし体験の様子

◇十津川村の暮らし体験宿泊を1泊2日で行いました。初日は、十津川村谷瀬地区での暮らし体験と集落内観光体験を、谷瀬地区に来る観光客や移住希望者の目線で行い、意見交換を行いました。暮らし体験では農作業を行い、集落内観光体験では、集落の主要観光地である谷瀬のつり橋や集落内の古民家“こやすば”に足を運び、その場所の魅力や人を呼び込むための課題を収集し、宿にて参加学生が集まり意見を出しあいました。

◇翌日は、十津川村全地域の観光活性化に向け、村の魅力発見と情報発信を目的として、村内に点在する観光資源を訪問して観光体験を行い、実際に観光客が足を運ぶためにはどうすればよいのか等を検討しました。

◇挙げられた意見・提案：十津川村の魅力は、豊かな自然環境もさることながら、「人」であることが挙げられました。だからこそ、情報発信の内容は、住んでいる「人」が持つ地域情報が良いという意見や、観光スポットの情報だけではなく、十津川村の豆知識など読んでいて楽しいと思える内容が掲載されたパンフレットやチラシがよいという意見、十津川村の主要観光名所は点在しているが、全部回ろうとしている人も多くみられたので、スタンプラリーなどを行ったらよいのでは、など多くのアイデアが生まれま



参加学生の感想

十津川村での暮らしの体験は常に新たな発見があります。集落の方は訪れるたびに農作業の仕方やコツ、集落の伝統などを教えてください、これらは長年の経験や勘がなければ知りえないことで、インターネットで調べても出てきません。初めて十津川村を訪れた学生とともに意見交換をすることで、今以上に十津川村の魅力は「人」であることを再認識できました。だからこそ、あたたかな人のつながりがよくわかるような十津川の魅力発信をできるように努めたいと思いました。

初めての谷瀬、初めての宿泊で、分からないことだらけでしたが、いろんなことを知り、また楽しむことのできた二日間でした。谷瀬の方々、初めて訪れた私たちも笑顔で迎えてくれ、すごく嬉しかったです。自然溢れる山村の景色を見たり、十津川村の名産を知ったり、普段体験す

ることのない畑仕事をしたり、とても勉強になりました。私たちが知り得た谷瀬の魅力やそこに住まう人々の魅力を、もっとたくさんの人に知ってもらいたいなと思いました。

■ 10月～3月 十津川村谷瀬地区内のゆっくり散歩道の看板プレート製作

◇十津川村谷瀬地区では、谷瀬の吊り橋から集落内をゆっくり歩いて山の上の展望台に至る「ゆっくり散歩道」を整備するなどの村づくり活動が住民主導で行われています。現在は昨年度のワークショップを元に、看板の改良に取り組んでいます。看板の大きさ、数、記載内容を学生で検討し、段ボールでモックアップをつくりながら検討を重ねました。看板の材料は十津川材を使用し、学生の手で製作することにしました。

◇大学で試作した看板モックアップを、集落の寄合に持って行き、集落の方の意見を聞きながら相談を重ねた結果、看板は2種類に作ることに決まりました。一つは、道しるべの役割をする看板で、十津川産の木材にレーザーカッターで直接案内の文字を印字することで長期で使えるものを目指しました。もう一つは、村の魅力を伝える手書きイラストの看板です。

◇附属中等教育学校の技術室にて木材へのレーザー加工を行い、3月末までに現地での



看板作成の様子



木材へのレーザー加工の様子

参加学生の感想

ゆっくり散歩道沿いにある看板の位置や記載内容をひとつひとつ検討し直し、観光客が道に迷わず、より楽しく歩いてもらえる看板を目指しました。最初は全て木材にする予定でしたが、手描きの看板もあたたかみがあるから残したいという集落の方からの意見は、自分たちの手でゆっくり散歩道をつくることから始められた集落の方たちの思い入れが感じられました。

木材へのレーザー加工は想像以上に時間が手間や時間がかかり大変でしたが、これからも長期間そこに立ち続け、道案内をしてくれる良いものが完成しました。設置して集落の方やたくさんの観光客の方に見てもらおうのが楽しみです。

ゆっくり散歩道の案内看板を作り直しました。観光客の方からも多く見られる散歩道の看板を作ると聞き、集落の顔の一部を任せてもらえることに驚きました。最初は不安もありましたが、どんな看板だったら見やすいだろう、村の魅力が伝わるだろうと考えるのはとても楽しい時間で

した。

十津川の杉材と私たちのデザインが合わせ、可愛く実用的な仕上がりになったと思います。お披露目する日が楽しみです。

(3) 中山間地域における活動報告

2016年5月14日、私は『パサージュ 20A：下市町へ移行』授業のTAとして、下市町への巡検を行った。以下では、主に現地での交流活動の内容と実践状況を紹介する。

下市町は、奈良県の南半分を占める吉野郡の北西に位置し、吉野川（和歌山県では紀ノ川）の南側で、里山の魅力に出会える町である。大きく分けると山岳地帯と丘陵地帯になる。月ヶ瀬梅林、賀名生梅林と並ぶ奈良県三大梅林のひとつ、広橋梅林がここにあった。参加者は事前準備を怠らず、参考文献を読む上で、先生から配布された地形図に下市町の町界をうつし、果樹林などの土地利用を色で塗り分けていた。

巡検当日は近鉄電車で下市口駅まで移動、その後バスに乗り、時間がかかったものの、天候にも恵まれ、最高の巡検日となった。一日目は、下市町役場地域づくり推進課の方から、町の地域おこし情報や、割り箸産業について紹介していただいた。人と経済のつながり、地元産業、観光と移住の問題など、短時間ではあったが幅広く状況がわかった。割り箸発祥の地として名高い下市町は、今、建割り箸職人の高齢化が進んでいる。参加者は作業現場を見学しながら、職人たちから聞き取り調査を行った。

夜の宿泊は、1999年に廃校になった旧広橋小学校をリフォームしたコミュニティー施設、「よしの広橋スマイルヴィレッジ」であった。学生たちは、当日の色々な見聞を整理したり、交流したり、翌日の自然観察巡検の準備を行った。

二日目は、中央構造線断層帯や果樹林などの見学・観察を行った。教室での学習とは違い、まわりの景色を見て、現地の土地を歩き、先生から変動地形や地質などの説明を受けた。特に、旧吉野川が堆積させた礫層と下市町の土地利用との関係が、より深く理解できたと思う。

巡検に行く前はどれも同じような山にしか見えなくても、帰りにはヒノキとスギの区別や果樹林の特徴がわかるようになった。疲れたが、この充実した2日間は、学生たちには、かなり貴重な体験になったことと思う。



写真左：下市町の割り箸工場 写真右：中央構造線断層帯砕屑帯付近の堆積岩

(4) 地域コミュニティにおける活動報告

下市町での活動報告農林塾に参加する都市住民の意識とその背景

◇授業の概要

平成 28 年度文学部専門科目 (COC+科目)「コミュニティ・リサーチ」の授業は、奈良県下市町の協力を得て、下記の 4 回実施された。

- 第 1 回 (4/16) 講義：地域社会の諸問題、地域参加型アクション・リサーチ「らくらく農法」の紹介、参加型地域社会調査法の概要 (買い物マップ・支え合いマップ・ムラ資源点検・フォーカスグループインタビュー)
- 第 2 回 (5/22) 現地実習：(午前) 巡検 (栃原区柿間引き体験、直売所「道しるべ」見学、講義)、(午後) グループ別調査
 - 【A 班】中山間地域高齢女性グループ・インタビュー (西山区)
 - 【B 班】巡検 (西山区、丹生区、広橋区)
- 第 3 回 (6/11) 現地実習：(午前) 巡検 (平原区ピザづくり体験)、(午後) グループ別フィールドワーク
- 第 4 回 (7/16) 現地活動：奈良女子大学下市アクティビティセンター開所式、下市町奈良女子大学連携公開講座「地域の将来を考えるために」参加、当センターでの今後の活動についてディスカッション

ここでは、第 3 回午後に行われたグループ別フィールドワークのうち、筆者が参加した農林塾インタビューの結果を報告する。

◇インタビュー調査の概要



本調査は、農林業に関心を持つ都市住民の意識とその背景を明らかにするために行ったものである。2016 年 6 月 11 日土曜日、下市町小路地区において開催されている農林塾の現場に伺い、インタビュー調査を実施した。インタビューの対象者は、農林塾の発起人で下市町の地域おこし協力隊員でもある秋谷奈美氏および農林塾参加者であり、質問の形式としては半構造化面接を用いた。対象者についての事前情報がほとんどなかったことを踏まえ、質問項目は適宜変更・追加している。ただ、参加者に対してのインタビューの内容は、どの対象者の場合でも、この農林塾に参加するに至った経緯や理由、下市について感じる事、今後やっていきたいことが主である。なお、対象者一人一人の状況を丁寧に読み取る目的と、プライバシー保護の観点から、質問者 3 名に対し、インタビュー対象者 1 名という個人面接の形をとり、他の参加者

とは少し離れた場所でインタビューを行った。インタビューは質問者が用意した質問にある程度答えてもらった上で、話題がおおよそ出尽くした頃を目安に終了したが、インタビュー時間は概ね 15 分程度である。インタビュー対象者には、授業レポートとして公表することについて、インタビュー時に了承を得た。

また、今回は、時間に限りがあったことと、秋谷氏と参加者の皆さんのご厚意で突然のインタビューを快諾してくださったという背景から、インタビューの手法の厳格性よりも、質問者と対象者のコミュニケーションを重視して、聞き取りしている傾向があることを注記しておきたい。そのため、インタビュー対象者の年齢や職業など基礎的な個人情報については、対象者が自ら話した場合を除いては無理に聞くことはしておらず、正確な情報としては不十分などところがある。

◇農林塾の様子について：秋谷氏へのインタビューと見学を通して



参加者にインタビューするにあたり、この農林塾の情報や活動の様子について知っておくため、活動の一部を見学させていただくとともに、発起人の秋谷氏からお話を伺った。ここでは、そこからわかったことをまとめておきたい。

まず、この農林塾は月二回（第二・第四土曜日）開講しており、受講料は一回につき 8000 円である。対象者は町外・県外の都市部の就業者を想定しているため、仕事や家庭に負担の少ない週末月二回としているそうである。また、一回につき 8000 円という受講費は秋谷氏も「決して安くはない」と話すが、無料型の農業体験にしてしまうと途中から参加しない人が出てきたり、あまり真剣でない参加者も集まってしまったりするため、この少し高めの料金設定にすることで、真剣に農業について学びたいという参加者のみを集め、活動の質を上げているそうである。実際、活動の様子を見ていても、見るからに「農家」というような様子ではない参加者たちが真剣なまなざしで講師の説明を聞き、時にはかなり踏み込んだ栽培方法についての質問も積極的に行っていた。秋谷氏によると参加者の多くは普段は神戸や大阪、京都など町外・県外でサラリーマンや OL として働いている人がほとんどで、年齢層としては 40 代から 50 代までの人が多いという。女性の参加者よりは男性の参加者の方が多いということであるが、どの人も「ある程度経験を積み、社会を知りながら人生に何が必要かわかってきて農業に行きついた」という点で共通しているという。けれども、すぐに農家になろうというわけではなく、従来仕事を継続しつつ、家庭の状況を踏まえながら、少しずつ農業の知識を身に付けようとしている人がほとんどだということ、仕事や家庭の事情で欠席した場合でも学習を続けられるように、毎回の活動はビデオで記録し、後で視聴できるようにしているということだった。

また、この農林塾を開設するにあたり、地元住民の理解と協力が必要不可欠であったことについてもお話があった。農林塾が行われている土地や利用する水は地元の人に借りているようで、

トイレに関しても近所で借りるということだった。このように農林塾の開催場所は民家に囲まれた集落内にあり、参加者は地元住民以外であるので、参加者の声や目線が地元住民の生活の支障にならないように寒冷紗を周りにめぐらせてブラインド代わりにするなどの配慮も行っているという。秋谷氏によると、農林塾開設から1年半かけて地元の人々の信頼を得て、みんなでここまでやってきたということだった。家一軒分以上はあると思われる畑では、ナスやトウモロコシ、スイカ、トマト、レタス、カボチャ、オクラ、サツマイモ、ジャガイモ、ニンニク、イチゴといった様々な季節の野菜や果物が栽培されており、参加者（この日は10名弱）、秋谷氏、講師が時には冗談を言って笑い合いながら、和気あいあいとした雰囲気、けれども汗を垂らしながら真剣に農業について学んでいたのが印象的だった。

◇農林塾参加者へのインタビュー

農林塾でのインタビュー調査を行う班では、秋谷氏からの説明と見学の後、二つのチームに分かれてそれぞれ調査を行った。筆者らのチームでは、3名（男性1名、女性2名）の参加者にインタビューを行った。

まず、一人目は、4、50代の男性で、普段は県外でサラリーマンとして働いているという。この方も、ある程度都市部で働いて社会のことがわかってくると農業がしなくなったために、この農林塾に通い始めたという。通うには決して近い場所ではないが、週末に近くでやっている場所はないため、ここにしたいという。子どもがまだ成人しておらず、土地もないため、すぐ移住というわけにはいかないが、かなり本気で移住して農業をすることを考えているということだった。話の内容以外から読み取れたこととしては、とてもイキイキとした表情で話してくださったこと、社会人としてある程度経験を積んだ者として、筆者らにアドバイスをくれるような感じで話してくださったことなどがある。インタビュー一人目でのこの男性には立ち話という感じでお話を聞いてしまったため、後の2名ほど十分にお話を聞くことができなかつたのが悔やまれるが、様々な経験をしてきて、たくさんのことを考えてきたからこそ、農業と真剣に向き合っているということとはよくわかった。

次に、お話を伺ったのは、30代の女性である。この女性は兵庫県西宮市在住でふだんは会社員をされており、JRを2時間半ほど乗り継いでここまで来ているという。通ってくるのは確かに大変だが、有機農法や林業に関心があるため、そういったものを含めトータル的に学ぶことができる点が決め手となってこの農林塾を選んだそうである。西宮市付近でも農業体験の場はあるがなかなか林業までやってくれるところはないということだった。この農林塾を知ったきっかけは、JRの駅に置いてある『奈良』という無料の広報パンフレットで、もともと奈良が好きなために刊行ごとにこのパンフレットは手に取っていたが、偶然その中でこの農林塾の小さな広告を見つけ、是非参加してみたいと思って問い合わせしたとのことだった。参加し始めたのは一期の終盤であったため、この4月から二期生として一から学び始めているところである。

この女性は農業に興味を持つまで、両親が野菜を（家庭菜園のような形で）栽培していても専ら食べるばかりで、何か育てようとしてもすぐに枯らしてしまう状態だったという。「自分には作るのは無理なんだ」と諦めかけていたが、ある程度年齢を経てきて、また社会の動きから、「やっぱり循環社会なんだ」と思い至り、農業に関心を抱いたそうだ。また、以前からやってみたく

思いながら学業や仕事のために挑戦できなかった織物を趣味として始めることができ、その後草木染にも関心が広がった。この草木染は無駄が出ない、まさに循環型の作業であり、この織物の趣味を通して改めて農業への関心が強くなったという。ただ、この時点では「畑をすれば農業やってるんだ」と思っていたが、この農林塾に来てみて、どうやらそれは「違うんだ」と気づいたそうである。それはどういうことかという、農業とは畑だけではなく、雨や山とのつながり、さらには生き物とも関わっているということに気づいたということである。そして、現在はいきなり兼業農家ということは考えていないが、とりあえず自分が食べるものは一部でも自分で作れるようになりたいと思っているそうである。仕事が忙しくてコンビニの食事になることや、今後の健康に危機感を持つようになり、食への興味が出てきたのと、社会でもそのような環境や自然を見直す風潮が出てきていることが影響したと話されていた。この方にとって、農林塾は仕事とは視点の異なる活動であるだけでなく、「ある種の緊張感」があるものだと話していた。それは食べ物を作るからというのと、きちんと育てるためには毎日状態を確認しなければならないからである。今はこの農林塾で学んだことを活かしつつ、自宅のベランダのプランターでオクラ、大和真菜、紐唐辛子、ゴーヤ、ナーベラ（沖縄の野菜）、紫蘇などを育てているそうである。大和野菜に関心がある彼女は後々奈良で大和野菜を育てて、京野菜に比べるとマイナーな大和野菜や奈良をもっと広めていくのが夢であると話してくださった。尚、奈良が好きなのはもともと奈良出身であるためであり、故郷についてもっと知りたいという気持ちがあるからでもある。また、下市については、電車で下市に来ると開けた感じで、畑も山も川もあって自然の宝庫で、ありがたい、気持ちのいい場所だと表現されていた。さらに、吉野地域の歴史についても触れ、出身地である奈良市との違いを感じ、憧れがあるということだった。ただ、そうした魅力ある下市に後々住めたらいいという気持ちもあるものの、専業農家ではなく仕事と両立するのが理想であり、そこをどのように折り合いをつけていくかが問題だと考えているようだった。最後に、今期の目標として有機や自然農法、林業とのつながりについて広く学んでいきたいと教えてくださった。この女性も終始とてもイキイキと自分の思いや夢について語ってくれ、インタビューの終盤には質問者にも野菜を育てた経験はないかなど尋ねる熱心さで、真剣に農業と今後の人生の過ごし方を考えていることを強く感じた。

最後、三人目の女性は20代の女性で、他の参加者との関係性を見ても、最も若い参加者のように思われた。この女性は普段は事務職をされており、京都から近鉄で2時間ほどかけて下市まで来ているようで、やはり先ほどの女性同様、遠いと感じている様子だった。この農林塾に参加するまでの経緯については、この方はもともと山や自然が好きで山登りをしていたのだが、それが広がって兵庫県で畑のボランティアをしていた。けれども、ボランティアだと求められた作業をして部分的に関わるだけであり、体系的に理論を学ぶという形ではなかったため、もう少し学びたいと思っていた。そのような中で、そのボランティア先で知り合った鳥取の梨農家の手伝いもするようになり、果樹を育てることの楽しさを知った。そこで、果樹の栽培について詳しく知りたくなり、柿と梅の栽培について学ぶことができるこの農林塾に参加することを決めたという。今後は、まだはっきりとしたビジョンはないし、様々な体験を経る中で価値観が変わってくることもあるだろうが、とりあえずは「最初からこれをやらなくちゃ」と決めるのではなく、やりたいことには挑戦し、桃やブドウなど他の果物についても学んでみたいと考えているそうである。

尚、果樹栽培に惹かれた理由の一つは、腰を曲げずに上を向いて作業をすることが多い点で、その背景には過去にジャガイモの栽培をしたときの土寄せの作業が腰を曲げて大変だったという経験があるそうである。質問者側から、下市の柿農家が後継者不足や高齢化で困っているということと話すと、「年齢が上がると大変になるのかな」と少し不安も感じている様子だった。

農林塾には5月から参加されているということだが、農林塾との出会いは1月に大阪で開催された農業フェアで、そこで今後の農業との関わり方について相談したところ、この農林塾を紹介されたのだそうである。その背景には、果樹は収穫できるようになるまで時間がかかることと、土地はあってもなかなか資金がないということで、京都では果樹というと丹波のブドウくらいしかないという問題があったそうである。このように果樹栽培は野菜以上に困難が多いため、正直なところ、現在でも果樹栽培で独立就農したいかという迷いがあるという。資金面や計画性の問題を考えると起業くらいの覚悟が必要なことであり、今後も果樹栽培に関わっていきたいという気持ちはあるものの、それがプライベートなのか、仕事なのかという点ではまだ考えあぐねているという複雑な心情を話してくださった。

下市の印象については、意外なことに「人が多い」という返答をもらった。それはなぜかというと、この方がボランティアに行かれている兵庫や鳥取と比べると、まだ下市は駅から近く、民家も密集しているので、都会ではないが比較的集落としてまとまっているので、そう感じることだった。また、鳥取の場合は、京都から片道3時間から4時間ほどかかるということで、現地での活動を考えると二泊三日でないと行けず、日帰りできるという点でも下市はまだ良いということだった。

この方は様々な場所で農業に関わっているようで、篠山でも他のボランティアと交流したり、時には神戸大学の学生とも関わったりすることもあるという。最後に価値観の変化について具体的にはどのような例があるか、もう少し踏み込んで質問したところ、フルーツは嗜好品なので、農業をやる人でフルーツをやりたいと思っている人は少ないのではないかと最初は思っていたが、やる側になってみると農業は毎日やることもあるので、需要があるかというよりも（その作物が）自分に合うかというマッチングを考えて、作物を選ぶようになったということを挙げられた。さらに、この作物選びに関しては、他にも、「やりたいから」ではなく、生計のためにはこの作物を育てなければならないという人もいることや、これ失敗したから次はこれといろいろな作物に挑戦する人など、ただ食べる側にいるだけではわからなかった様々な決め方があることを知り、考えの幅が広がったように感じるということだった。他にも、農業に関わる前までは何とも思わなかったジャムや丹波の黒豆の煮物、コンビニのカットフルーツなどについて、外見に傷があるものでも加工することによって、無駄なく利用したものであることを知り、「上手いな」と感じたことなどを教えてくださった。この方は、若い頃から農業に関心があり、実際はかなり積極的に行動を起こされているということもあり、お話からは農業に関するボランティアやフェアなど様々な取り組みが各地で行われていることがわかった。その一方で、果樹栽培という農業の中でも比較的難易度の高い分野に関心があることによる困難についても知ることもできた。インタビューの様子からはまだ迷いのある複雑な心情も垣間見えたが、穏やかな口調からは念願の果樹栽培について学ぶ機会が得られたことの充実感や果樹への強い意志が伝わってきた。

◇考察

今回は、この小路地区の農林塾について大まかに知ることと3名の参加者へインタビューを行うことしかできなかったが、それぞれ様々な経験や考えを経たことで遥々遠方の都市部からこの農林塾に集まってきたことがわかった。そして、秋谷氏が望んだように、どの人も真剣に農業について学ぼうとしている様子で、インタビューをした3名を含め、今後も農業に関わっていきたいという人がほとんどであるということが読み取れた。ただ、そうした農業や自然への憧れや意欲を強く抱いている一方で、現在の仕事を完全に辞め、田舎へ移住して農家となるには、少なからず抵抗感があるようである。その背景には、農業の経済的な難しさや土地の確保の問題、さらに家族の生活など現実的な問題があることに加え、「農業は経済的あるいは肉体的に厳しい」という認識に起因する心理面での不安があるのではないかと考える。確かに社会では昨今、有機野菜が人気になったり、農業体験の機会が増えたりして農業への再注目や自然の再評価という風潮があるが、農業に関連する現実的な課題が解決していない以上、なかなか就農にはつながり得ないという厳しい現実があることがインタビューからも読み取れた。

また、参加者たちのように人生やこれまでの生活を見つめ直した結果、農業に関心を抱き行動を起こそうとしても、電車で2~3時間行かなければ十分に学べる場所がないという現状はやはり問題である。さらに、この小路地区の農林塾の成功に関しては秋谷氏の存在が大きいと考える。上記のとおり、小路地区の地域住民への配慮や参加者へのきめ細やかな対応があったからこそ、農林塾をすることが可能になったのだし、地元の広報誌や都市部での農業フェアを活用したPR方法の有効性も忘れてはならない。こうしたことはなかなか過疎化・高齢化が進む地域の住民や自治体だけでは実現できないと考える。活動風景を見ていると、おそらく地元の農家の方と思われる講師と都市部からやってきた働き盛りの参加者たちの間に秋谷氏が立って上手く関係を築くきっかけを作っているように見えた。秋谷氏の人間的魅力が成し得ていることも多いだろうが、地域おこし協力隊の人と人をつなぐという役割はやはり極めて重要であると考えられる。

今回は農業や地域活性化について重要な結論が出せるほどの調査はできなかったが、農林塾の見学と3名の参加者へのインタビューは農業が抱える現実的な難しさとその打開策は何かを考える上で非常に参考になった。そして、コミュニティ・リサーチの観点からは、地域おこし協力隊を地域活性化のキーパーソンとしてとらえ、彼ら・彼女らが加わることで、地域やそのコミュニティにどのような変化が起き、どのような成果を招くのか、今後さらに詳しく見ていきたいと考えている。





(5) 歴史学実習における活動報告

■歴史学実習概要

歴史学実習（文学部専門教育科目）は、人文社会学科歴史学コースが提供する授業である。従来は、奈良近辺で日帰りフィールドワークを2回行い、さらに受講生の希望による2泊3日の遠方地フィールドワーク（博多・長崎・鹿児島など）を実施して、年度末に受講生が手分けして報告書を仕上げ、という内容だった。また、各フィールドワークでは、あらかじめ受講生が現地説明のための資料を分担作成し、現地では参加者全員がそのコピー集を持ちながら歩き回り、受講生が現地説明をしていく、というやり方をとっている。

COC+事業の開始に伴い、小路田泰直副学長の求めに応じて、フィールドワーク対象地を奈良県及び紀伊半島を中心とする太平洋沿岸に絞り込んだ歴史学実習を実施している。昨年度の実習は2泊3日で十津川村と熊野のフィールドワークを行ったが、今年度は2泊3日で紀伊半島を一周するコースを辿った。

■事前準備

教員側がコースを設定して、受講生8名が以下の項目の資料を分担作成して、A4両面印刷27枚の資料集を作成した。

■資料集項目

鬮鶏神社、熊野水軍、三段壁洞窟、潮岬、トルコ軍艦遭難慰霊碑、熊野三山、補陀洛山寺、熊野詣、熊野古道、熊野灘、熊野の神話、神武東征伝説、花の窟神社、尾鷲神社、天狗倉山と修験道、志摩国、伊雑宮、伊勢神宮、お伊勢参り、御塩殿神社、松坂

■行程表と参加者

行程表

<p>16日(水) 9:00近鉄奈良駅出発 田辺市鬮鶏神社 白浜町三段壁洞窟 串本町潮岬 紀伊大島 トルコ軍艦遭難慰霊碑 17:00那智勝浦町到着</p>	<p>17日(木) 9:00出発 那智勝浦町補陀洛山寺 熊野那智大社 新宮市熊野速玉大社 熊野市花の窟神社、大泊 尾鷲市尾鷲神社 17:00志摩市到着</p>	<p>18日(金) 9:00出発 志摩市磯部町伊雑宮 伊勢市二見町御塩殿 伊勢神宮 松坂市本居宣長ノ宮 (計画するも見送り) 17:00奈良市到着</p>
--	--	--

参加者（計17名）



上段左より那智大社、
御塩殿神社、伊勢神宮
下段左より
潮岬神社、伊雑宮



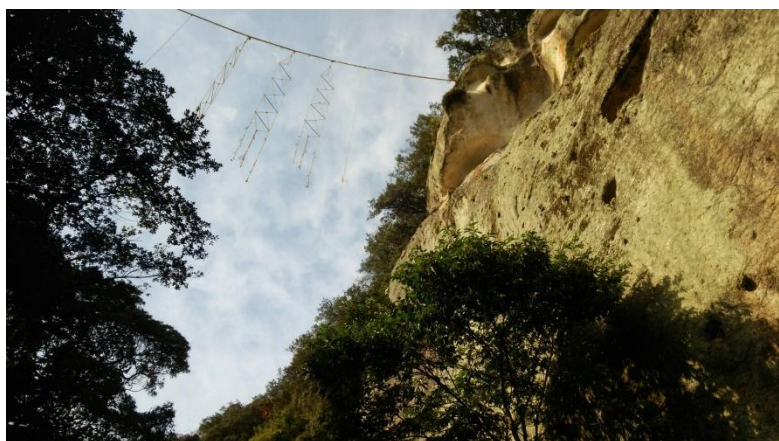
■歴史学実習体験報告

2016年度の歴史学実習は和歌山・三重の沿岸の史跡を巡り「黒潮の道」を実感するもので、熊野水軍の伝説が残る鬮鷄神社、三段壁洞窟にはじまり、トルコ軍艦遭難の地や、花の窟神社、大泊など、さまざまな史跡から太平洋を眺め、存分に潮風を浴びる3日間だった。



実習は事前調査、訪問、事後調査の流れで行われた。実際に現地を訪ね、歩き、見ていくなかで事前に関心を持っていた場所とは違う箇所に興味を移したのか、事前学習の担当箇所とは全く違うテーマで事後レポートを仕上げる者も多く、文献を読むだけでは得られない興味・関心というのが実地において初めて花開くこともあるのだと思われた。私の場合は、沿岸部ということで事前学習の折より漠然と、地震による津波の影響が気にかかっていたのだが、現地を移動するなかでその気がかりが明確なものへと変わっていった。

今回の実習で我々が通った和歌山県田辺市から三重県伊勢市にかけての沿岸部は東南海地震に



おける津波の被害地域である。しかし、私たちは移動中のバスの車窓からも、ホテルの部屋の窓からも海を眺めることが可能であった。もし今、東南海地震が起これば、そこには必ず津波が押し寄せるのにも関わらず、人々はそこで津波のことなど気にもとめず生活している。人だけならば緊急時のみ避難することも考えられるが、どうして避難させられ

ない神仏までも津波に流されかねないその地へすえてしまうのはどういうわけなのか。このような思いのもと、奈良に戻ってから疑問を解消するべく史料にあたった。

日頃、この奈良盆地のなかで暮らしていると考えることの少ない海を巡る様々なことが、3日間の実習のなかでは思考の中心となっていたのを感じる。海は外界との隔たりではなく、開けた「道」なのだという先生方の認識も、海を間近にしてはじめて腑に落ちたような気がした。それ

でも私の関心が「海の道」よりは津波の方へと向かっていったように、同じ場所を訪れても感じ取ることというのは皆違っていたに違いない。実際に紀伊半島を巡った3日間だけでなく、事前事後学習を含め、この実習で得られたものは、今後、それぞれが研究を進めていくうえで生きてくるだろう。

■歴史学実習体験報告

歴史学コースでは、2016年11月16日から18日にかけて、和歌山県、三重県の海岸沿いの地域を中心にフィールドワークを行った。紀伊半島といえば、修験道の修業が行われるような山がちな地形や、黒潮のような早い潮流といった厳しい地理的条件が思い起こされるであろう。このことが自然豊かで神秘的な印象をもたらす一方で、同時に過疎の一因ともなっている。実際に、今回の実習での史蹟から史蹟へのバス移動も、長時間に及ぶものであった。このような点から紀伊半島は交通の発展から取り残されてきたように見える。

こうした状況の中、どのようにして紀伊半島に人を呼び込み活性化させていくかという問題について、紀伊半島の歴史の中にその解決の糸口を見つけることができる。例えば今回の実習で訪れた熊野市大泊は、鹿児島県坊津に匹敵する規模をもつ湾港であり、長く語り継がれたその名前が示すように交通の要衝であったと考えられる。また熊野灘は早い潮が流れる交通の難所であるというイメージが強いが、実習で目にした熊野灘は、天候に恵まれたこともあるだろうが非常に穏やかな風いだ海であったことに驚かされた。こうした点は文献からのみでは判別できないことであり、実際に目にするによって初めて間違った認識を正すことができる。また紀伊半島には伊勢神宮や熊野三山などの有名な寺社が存在するが、それだけではなく現代人にとって交通の不便なように思われる地域にも、大きな寺社が数多く建立され現代まで守り継がれている。例えば花の窟神社や尾鷲神社などである。また補陀洛山寺の裏山では、中世から近世に溯ると推定される石塔を見ることができる。このことは、それらの寺社が歴史上重要な地位を占めていたこと、そしてそうした有力な寺社の繁栄を受け入れる基盤を紀伊半島が保持していたことを示している。

こうした点が今回の実習によって明らかになり、歴史における紀伊半島は、現代におけるイメージとは逆に、交通の要衝であり非常に繁栄した地域だったと結論づけることができる。我々が、紀伊半島を交通の不便な地だと考えてしまうのは、近代以降の鉄道の開発が平野部のように容易



に進まなかったことが大きく影響しているだろう。すなわち、近代以降に構築された熊野像を前近代にまでさかのぼって当てはめてしまっているのである。まずはこのような先入観を払拭する必要があるだろう。

我々のさらなる課題は、交通の要衝であった前近代の熊野と、交通の発展に取り残された近代の熊野とをいかに結びつけるかということである。すなわち前近代においてなぜ紀伊半島は発展しえたの

かを探究し、そしてそこに現代において紀伊半島を活性化させてゆくためのヒントを見つけねばならない。いうまでもなく紀伊半島の史蹟は、観光資源として高い価値を持っている。しかしそれらの史蹟を、現代と無関係な過去のものとなすだけでは、紀伊半島のもつ可能性を十分に活かしたものとは言えないだろう。紀伊半島の史蹟が示す歴史上の繁栄と、現代における課題とのギャップを埋める、比較史的視座に基づいた建設的議論こそが、紀伊半島の活性化に不可欠と思われる。

□ 就職(企業との関わり)について

1. 学生向け意識調査の実施

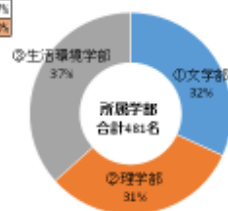
やまと共創郷育センターにおいて、平成 29 年 2 月に 1 回生を対象に、「奈良県内で就職することに対する意識調査」を行い、学生の奈良県での就職に関する意識の実態を把握することに努めました。意識結果については以下の通りです。

奈良県内で就職することに対する意識調査(学部学生対象)

平成29年2月アンケート調査結果

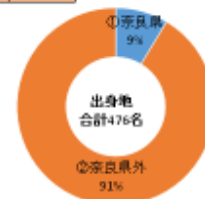
1 あなたの所属学部と出身地を教えてください。

学部	人数	割合
①文学部	153	32%
②理学部	152	31%
③生活環境学部	176	37%
合計	481	100%



1 出身地 (*無回答5名)

出身地	人数	割合
①奈良県	41	9%
②奈良県外	435	91%
合計	476	100%



4 奈良県内で就職することに対して、以下の選択肢の中からご自身の気持ちに一番近い選択肢を選んでください。(*無回答1名)

気持ち	人数	割合1	割合2
①奈良県内で就職したい(A)	10	2%	40%
②奈良県内で就職してもよい(B)	163	38%	
③奈良県外で就職したい(C)	287	60%	
合計	460	100%	100%



県外で就職したいという学生の理由(抜粋)

- ・ 地元に戻って就職したい。
- ・ 奈良県でしたいと思う職がなさそうなのと、したい職が東京などにありそうだから。
- ・ 地元に戻って、地域の地域振興に貢献したいから。
- ・ 最低賃金が低い、交通手段が少ないから。
- ・ 住みには良いが働き続けたいとは正直思わない。
- ・ 県外の方が大手企業が多く、視野が広がるから。
- ・ 奈良にいる必要性を感じない。奈良じゃなくても良い。
- ・ 奈良での就職について全く知らない。
- ・ 奈良県内に私になりたい職業で働ける場所を知らないため。
- ・ 奈良は田舎だから、東京か大阪に行きたい。

- ・奈良県に魅力的な企業がないから。
- ・自分のつきたい職業がなさそう。
- ・収入が安定した企業が奈良県外の方があると思うから。
- ・生まれた時から奈良なので外に出てみたい。
- ・関西圏で就職するなら大阪や京都の方が魅力的。

2. 奈良県内企業限定パンフレットゾーンの開設

やまと共創郷育センターでは、学生に奈良県内企業の魅力に触れてもらう機会向上を目指し、キャリアサポートルーム（就職支援室）に「奈良県内企業限定パンフレットゾーン」を開設しています。

従来からの業種別に企業紹介ゾーンに加えて、県内企業をより身近に感じていただくため県内企業ばかりを有効的に紹介・活用するゾーンです。

このゾーンには、県内企業から寄せられた会社案内、募集要項が集められおり、やまと共創郷育センターで随時受け付けしています。

県内企業パンフレットゾーンの拡大や奈良県内企業の紹介方法についても今後一層の充実を図り、「あなたとナラ働こう」、「奈良をリードする躍動企業」として、学生と県内企業とのマッチング機能を持たせるよう取り組んでいきます。



3. 奈良県内企業魅力発見セミナーの開催

県内企業魅力発見セミナー (平成28年11月19日実施)

- 本学学生を中心とする奈良県立大学、奈良工業高等専門学校との合同セミナーです。
- 参加企業別のブース(1企業1テーブル)を設けます。各企業の担当者と少人数で接することができるチャンスです！OGが来てくれる企業もたくさんあります。
- 奈良県は医療・福祉に従事する人の割合が高く、製造業では、繊維・プラスチック・食品加工が盛ん。高い技術をもつオンリーワン企業も多く、業界の動向、方向性、仕事内容、求める人間像等について直接聞くことができ、業界研究と仕事理解の重要な材料となります。

セミナーには来年度以降に就職活動を開始する学生ら120名の参加とCOC+参加企業を含む県・県警などの官公庁や医療、福祉、金融、保険業など様々な業種から23社等の参加がありました。



平成28年11月19日(土)、奈良女子大学やまと共創郷育センターでは奈良工業高等専門学校、奈良県立大学とともに採択された文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の一環として「奈良県内企業魅力発見セミナー」を開催しました。

セミナーには来年度以降に就職活動を開始する学生ら120名の参加とCOC+参加企業を含む県・県警などの官公庁や医療、福祉、金融、保険業など様々な業種から23社等の参加がありました。

セミナー開始に先立ち、N202教室では藤原センター長の司会でガイダンスが行われ今岡学長より、参加学生に対してセミナーの趣旨等についての説明、やまと共創郷育センター支援室からタイムスケジュールや諸注意等についての説明があった後、学生達は3班に分かれて会場である第一体育館に移動しました。

学生の移動中に第一体育館では、今岡学長から参加企業等担当者への挨拶があり、学生が会場に入場後、参加者全員に藤原センター長より、セミナー開始に際しての挨拶がありました。

会場内では参加企業ごとにブースが設けられ、参加学生たちは自身が希望するブースに着席し、企業等担当者からの話を熱心に聴き入っていました。

学生が話を聴ける企業等からの説明回数は最大4回で少ないチャンスを十二分に活用し、3時間半のセミナーは無事終了しました。

長時間にわたるセミナーでしたが、アンケートを提出して退場する学生の目はセミナー開始前よりも輝いて見え、得るものが多かったことを窺わせていました。

参加学生からの感想

色んな企業、官公庁の仕事を知ることができたためになりました。説明時間が長いこともあり、組織内の部署の仕事とか細かいこともわかって良かったです。質問時間もあってわからないこと、知りたいことがわかってよかった。

1回生であるにも関わらず、このような就職活動に近い企画に参加させていただき、とても良い経験になりました。人気の企業はもう少し席を増やしていただけたらと思います。

1回生で就活について、何も知識がなく、初めてセミナーの情報を見たとき興味はありましたが、不安の方が大きく、参加するかどうかわ悩みましたが、参加してみると企業の方が何回生でも関係なく、丁寧にお話してくださったので、少しでも就活のイメージがもてたと思います。

奈良県のさまざまな業種をいっぺんに回るという事で、とても魅力のあるセミナーだと思います。

奈良で働くことは考えていなかったけれど良い企業さんもたくさんあると知り興味がわいた。きちきちとした雰囲気ではなかったので質問もしやすかった。

奈良にこんなにたくさんの企業があるということが分かって良かったです。名前を知らなかった会社でも、話を聞いてみるととても良い会社で興味をもちました。また今回のような会があったら参加したいです。

地元にも魅力のある企業がたくさんあることを再確認できるいい機会になった。(奈良高専)

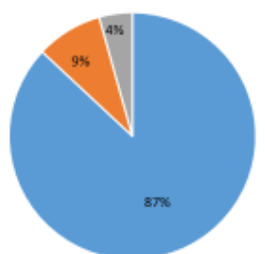
「奈良県内企業魅力発見セミナー」企業アンケート集計

開催日時:2016年11月19日(土)13:00~16:30

開催場所:奈良女子大学 第一体育館

参加社数:23社

①開催時期について



不適当 <理由>

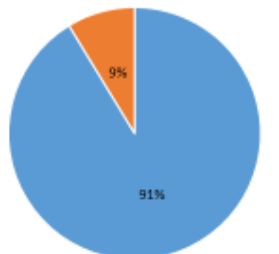
・もう少し遅い方が学生の熱意があがるのでは

その他 <理由>

・分からない

・11月下旬~12月上旬が望ましいと思います。本格的に活動する直前であれば、3回生の参加が増えるのではないかと考えます。

②開催時間について



適当 <理由>

・要点的説明ができるため

・主旨が今までの企業説明会(採用)ではないので戸惑った。

・もう少しローマの時間が短くても良かったです。

その他 <理由>

・45分から30分程度の方が良いと思う

③次回セミナーの参加について



参加 <理由>

・高専生と会えるため

□ 社会的還元（地域貢献）事例について

1. 各種セミナーの実施

奈良女子大学やまと共創郷育センターでは、学生と地域社会との連携（絆）を強化するため各種セミナーを実施しています。平成28年度に実施したセミナーは以下の通りです。

紀伊半島地域連携シンポジウム2016 「地域を学ぶ地域で学ぶ地域を生かす」

平成28年 8月 6日(土)

紀伊半島3県に所在する奈良女子大学・三重大学・和歌山大学より教職員が集い、地域の活性化に知恵を出し合い、地域に学問知を還元することを目標としたシンポジウムです。シンポジウムの中では、中川正三重大学学長補佐(キャリア教育担当)より三重大学が実践しているAI(アプリシエイティブ・インクワイアリー)を取り入れたキャリア教育について、内田忠賢奈良女子大学学長補佐(社会連携担当)より地域住民が自身の身近な生活を自分たちでまとめる都市民俗生活誌の重要性について、吉田道代和歌山大学観光学部教授よりLGBT観光の地域活性化への有効性について紹介いただきました。吉田道代和歌山大学教授の報告の際には、トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム「地域人材コース」奈良市留学支援プログラム「奈良を『開く』人材」グローバル人材育成プロジェクトの一環で奈良市内でホテル等と連携してLGBTウェディングを実施することを計画している学生から事業計画の説明もなされました。当日は、三重県、和歌山県のほか、京都府、大阪府からの参加者もあり、注目度の高さが伺えました。



中川正三重大学学長補佐（キャリア教育担当）による講演の様子



吉田道代和歌山大学観光学部教授による講演の様子

参加者からの感想

これまで授業などで地元でなく他の地域をフィールドとすることがほとんどでしたので、『身の回りの宝探し』、『あるもの探し』という考え方は新鮮でした。この考え方をもちて地元を見直してみようと思います。

自治体にとってLGBTの受入れが都市イメージの向上につながるというのが新発見であった。

いきなりLGBTウェディングが受け入れられるか未知数なので、もう少し市民への認知度を高める方法も同時に考えたほうが良いのではないのでしょうか。

『ないもの探しではなく、あるもの探しをしよう！』というお話がとても印象的でした。

問題解決型が欠点注目、AIが長所注目というところが目から鱗が落ちました。今後何らかな形で実践できるといいなと思いました。

「奈良女子大生と学ぶ！消費生活講座」の開催 平成28年12月3日(土)

奈良女子大学生生活環境学部生活文化学科の学生有志による消費者問題研究会BEACSIによる『奈良女子大生と学ぶ！消費生活講座』が下市町、奈良県消費生活センターの共催・協力のもと下市町観光文化センターにて開催されました。

吉野警察署の多田生活安全課長から最近の消費者被害について話をいただいた後、市民消費者活動団体「あんあん」のメンバーと奈良女子大学生による寸劇・解説やクイズなど交えながら県内で実際に発生している「点検商法」、「悪質商法(電話勧誘・訪問販売・訪問買い取り)」などの消費者問題について学びました。

奈良県消費生活センターからは「困ったときはすぐに188番」へ、奈良女子大学の大塚准教授からは「ヒヤリハット体験などを通じて消費者力を身に付けることが大切」との説明があり、参加者は真剣に聞き入っていました。

参加された約50人の住民からは、寸劇やクイズを楽しみながら様々な消費者問題について「知らなかったことを知れた」、「持っていた知識を確認できた」、「楽しく学べた」と大変好評でした。高齢者が消費者被害に遭わないため、トラブルを未然防止するためには、家族や近所の方など地域のつながりが大切であることの認識を深める良い機会となりました。



参加者からの感想

楽しく拝聴できました。

わからない点がよくわかった。もっとくわしく知らせて欲しい。
いろいろと改めて気づいたことがあった。話し合いもあってよかった。

少子化や人口減少策も今後進めてください。

身近に消費生活センターの職員に接することができた。

テーブル毎に意見を出し合ったこと、皆様の意見をまとめて発表してくださったことが良かった。

幅広い意見が出てたくさんの知識を得ることができました。若い方に私たち年寄りの意見を聞かれて、また考え方もいろいろと変わったことと思います。参考になりました。

「奈良県女性の活躍促進フォーラム」の開催 平成28年12月17日(土)

「奈良県女性の活躍促進フォーラム」(奈良県主催、奈良女子大学やまと共創郷育センター共催)が、本学記念館において、本学学生及び関係者を含め約230名が参加して開催されました。

フォーラムの開催にあたり、奈良県健康福祉部こども・女性局長 福西清美氏及び奈良女子大学副学長(やまと共創郷育センター長) 藤原素子氏から挨拶があった後、第一部として、前厚生労働事務次官 村木厚子氏から「女性の活躍～あなたに贈るメッセージ～」と題した基調講演があり、村木氏の厚生労働省時代の経験などを織り交ぜながら、女性の出産・育児に係る問題や女性の働き方等々について、ユーモアを交えながらお話しがありました。

第2部では、奈良県男女共同参画県民会議会長 音田昌子氏をコーディネーターとして、奈良のママが仕事をつくる会代表 井上京子氏、同志社大学教授 川口章氏及び産業カウンセラー 舟橋正枝氏の3名による「『男女がともに支える暮らしやすい奈良県』を目指して」と題するパネルディスカッションが行われました。パネラーからは、「夫婦の役割分担が大事」「パートナーをほめること」「男女に対する親の価値観を押し付けない」といった意見等が出て、参加者は、女性が活躍しやすい奈良県をつくるために何が大切であるかということを再認識しながら、終始和やかな雰囲気にも包まれたまま閉幕しました。



2. 奈良経済同友会との交流・懇談会

奈良女子大学社会連携センターでは、地元企業との連携をさらに強化するために、平成18年度から奈良経済同友会との交流・懇談会を開催してきました。

平成28年度については、下記の通り実施いたしました。

開催日時 平成29年1月23日(月) 15:00～19:00

場所 奈良女子大学理学部G201教室

参加者 65名

プログラム内容

「奈良女子大学の奈良女子大学のグローバル化に向けた取組みについて」

奈良女子大学生活環境学部中山研究室での取組み紹介

「グローバル人材の育成に向けて—国際交流センターの取組み紹介」

奈良女子大学国際交流センター講師 松永 光代

「奈良女子大学とバングラデシュ・ベトナムとの理系学術交流活動について」

奈良女子大学 研究院自然科学系教授 高須 夫悟

「奈良県における国際交流の現状と課題」

公益社団法人まちづくり国際交流センター理事長 吉田 浩巳 氏

3. 奈良女子大学第14回研究フォーラムの実施

奈良女子大学社会連携センターでは、大学での教育・研究成果を生かしながら、広く社会との連携協力を組織的に取り組んでおります。その一環として、一般の方に本学の教育研究活動を知って頂く機会として、年に一度研究フォーラムを開催しています。平成28年度は、本学教員や学生が地元自治体や地域の方と協働して取り組んだ『地域連携事業』及び『学生NARA活プラン』成果報告会を実施いたしました。

開催日時 平成29年3月9日(木) 13:30～17:00

場所 奈良女子大学コラボレーションZ306教室

参加者 名

プログラム内容

1. 地域連携事業の成果報告

「奈良の食農産業と市民をつなぐ「食文化観光」の実践」

奈良女子大学研究院生活環境科学系助教授 青木 美紗

「消費者市民育成プログラムの開発と実施」

奈良女子大学研究院生活環境科学系准教授 大塚 浩

「地方創生と連動した田原本町商店街活性化事業」

奈良女子大学研究院生活環境科学系教授 中山 徹

「『健康なら21Stepアップ事業』の行政・地域との連携強化プラン」

奈良女子大学研究院生活環境科学系准教授 星野 聡子

2. 学生NARA活プランの成果報告

- 「知った”NARA” 安心プロジェクト～奈良女生による「消費者市民」育成講座」
- 「農業体験・大和野菜普及プロジェクト」
- 「親子の食育プロジェクト」
- 「剣道交流大会支援を通じた奈良県過疎村活性化プラン」

4. COC+事業評議会、COC+事業シンポジウムの開催

- (1) 第2回やまと共創郷育センター事業評議会（平成28年7月14日）
- (2) やまと共創郷育センターシンポジウム2017（平成29年3月18日）

(1) 「第2回やまと共創郷育センターCOC+事業協議会」

平成28年7月14日(木)

平成28年7月14日(木)13時30分より奈良女子大学において第2回やまと共創郷育センターCOC+事業協議会を開催しました。当日は参加自治体、参加企業より多数の出席者がありました。奈良女子大学・奈良工業高等専門学校、奈良県立大学よりこれまでのCOC+事業の取り組みと今後の予定について説明を行った後、出席者全員で意見交換を行いました。平成27年度事業に対する意見や今後の事業実施に対する要望等様々な意見を頂戴しました。頂いたご意見・ご要望については、今後の事業実施に反映させるよう努めて参ります。



(2) 「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)シンポジウム 2017」
共創郷育:「やまと」再構築プロジェクト

平成 29 年 3 月 18 日(土)

平成 29 年 3 月 18 日(土) 奈良女子大学記念館にて奈良女子大学・奈良工業高等専門学校・奈良県立大学の 3 校による「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」シンポジウム 2017 を開催しました。事業協働機関である奈良県、下市町、野迫川村、十津川村の関係者の他、奈良県内の企業関係者、奈良佐保短期大学を含む大学・高専関係者から多数の参加者がありました。

今岡春樹 奈良女子大学長による開会の挨拶、後藤景子 奈良工業高等専門学校長、伊藤忠通 奈良県立大学長の挨拶に続き、来賓の松谷幸和 奈良県副知事より挨拶があり、奈良県の地方創生総合戦略とも関連の深い COC+事業への期待と県内産官学の一層の協働を表明されました。

第 1 部では奈良女子大学 藤原素子副学長兼やまと共創郷育センター長、奈良工業高等専門学校 藤田直幸 COC+事業責任者兼専攻科長電気工学科教授、奈良県立大学 増本貴土地域交流センターCOC/COC+推進室特任准教授から各校の平成 28 年度の COC+事業成果および平成 29 年度事業計画が発表されました。引き続き、第 2 部では自治体・企業および学生による平成 28 年度の COC+活動事例報告・研究報告が発表されました。また、第 3 部では、「奈良の魅力を知り、奈良を支える人材育成の実践的取組」をテーマとして、自治体・企業・教員・学生によるパネルディスカッションが行われ、活発で幅広い意見交換がなされました。

シンポジウムを通じて、参加者間で成果や課題の共有を行うとともに、COC+事業のさらなる発展のために、産官学が一体となり、協働しながらそれぞれの立場で今出来ることに尽力しなければならないとの誓いを新たにしました。

3/18 のシンポジウム

写真 追加

□ 今後の取り組みについて（平成29年度の活動予定）

1. 教育支援活動

（1）地域志向科目の拡充

『地域社会の抱える課題を見つけ働き方を考える』といったより実践的な人材育成を目的とした「なら学+（プラス）を開講いたします。内容は、観光産業への理解を深め、課題を探る（奈良の観光産業の現在と未来）、伝統産業(靴下)への理解を深め、課題を探る（靴下づくりのイノベーション）、伝統産業（製菓）への理解を深め、課題を探る（漢方薬について学ぶ）、伝統産業(林業)への理解を深め、課題を探る（森林の環境と吉野杉の利用拡大）、特産品(柿)への理解を深め、課題を探る（柿四方山ばなし）、女性の起業を考える、地域づくりを考える（高齢化社会・人口減少への対応）等を予定しています。

（2）地方創生にかかる教育セミナーの実施

県内企業経営トップによる実践的な講義による学生と企業の相互理解、県内女性起業家、県内自治体、企業、地域活性化に向けて活動するNPO団体にて活躍している女性等による教育セミナーをお願いし、地域が必要としている人材教育、女性キャリア教育を実施いたします。

（3）地域活動拠点・十津川サテライトの整備

平成27年度の野迫川村、平成28年度の下市町に引き続き、十津川村での学生の学習活動拠点を整備いたします。

2. 就職支援活動

（1）県内インターンシップの拡充

インターンシップは学生にとって、働く姿を見ることで、社会人としての基礎力を養い、地元企業への就職の橋渡しにもなります。学生・県内企業双方にメリットのあるインターンシップのあり方を探りながら、COC+事業参加自治体、参加企業との協力のもと県内企業様向けインターンシップフォーラムの開催を予定しています。内容は、インターンシッププログラムの全体設計（事前準備から終了までの流れ）、インターンシップ受入れ県内企業様からの事例紹介、企業様向けインターンシップ入門セミナーを予定しています。

（2）県内企業見学会の実施

県内企業の魅力や知識を学生に知ってもらうためバス等による県内企業見学会を予定しています。学生に地域産業・地域経済に対する理解、地元企業の魅力を深めさせるとともに、学生と県内企業との距離を高めることを目的としています。

（3）県内企業限定魅力発見セミナーの開催整備

平成28年度に引き続き、学内にて県内企業様に限定した会社説明会を予定しています。自社PRしていただくプレゼンテーションも予定しています。実施予定が固まり次第、ご案内させていただきますので、奈良県内企業への就職を視野に入れている学生との交流の場として是非ともご参加ください。

奈良工業高等専門学校編

① 教育（地方創生を担う人材育成）について

A. 地域創生マインド養成教育プログラムの概要

本校では地域で活躍する人材の育成を目指し、図1の3つの科目群で構成される地域創生マインド養成教育プログラムに取り組んでおります。

- ①地域の現状と課題に対する正しい理解をすることにより、地域に対する友愛・地域創生への使命感を醸成するための『地域創生理解科目』群
- ②地域創生に対して、工学的な知識を使って積極的に関わることで、確かな工学知識に裏打ちされた課題探究・解決能力を養う『地域創生演習科目』群
- ③研究活動を通じて実施した地方創生に対する具体的な成功の体験を活かして、国際的・実践的イノベーション能力を育成する『地域創生実践科目』群

このプログラムは平成29年度の専攻科改組に伴うカリキュラム改訂、平成30年度に予定されている本科のカリキュラム改訂により順次本格実施してまいります。平成28年度はその先行実施期間として、以下のB～Dの科目の中で地域創生授業を実施しました。また、授業時間外の活動もE、Fのように実施し、地域創生に貢献する人材の育成に努めました。

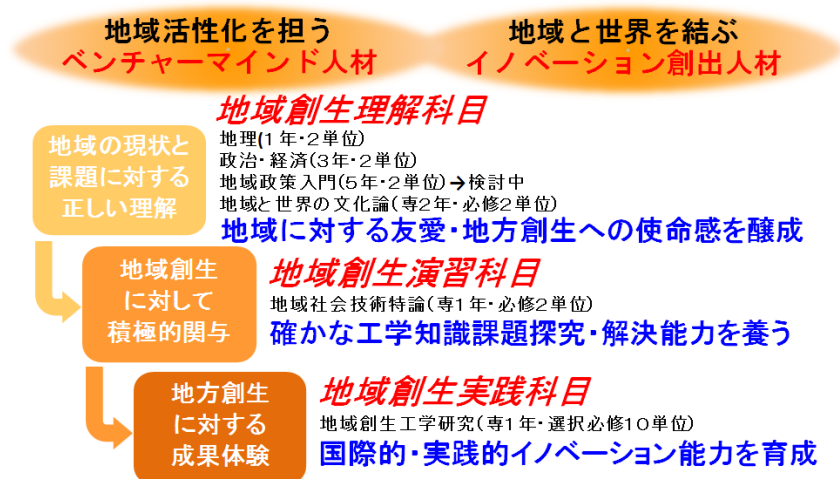


図1 地域創生マインド養成教育プログラムの構成

B. 『社会技術特論』を通じた地域創生教育

B-1. 講義の目的

平成29年開講予定の『地域社会技術特論』（専攻科1年前期）の先行実施として、下記のような講義目的で専攻科2年を対象に平成28年9月30日～平成29年2月3日の間実施しました。

①地方創生への貢献力

地方創生とは何か、また地方創生に対して技術者が果たす役割とその重要性について理解する。

②問題発見能力、課題解決能力

奈良県が抱える地域創生上の問題に対する解決策の作成を通じて、技術者が社会の関わりの中で身につけるべき、課題発見、課題分析、解決策考案、解決策評価という一連の流れを理解し、それを実践する。

B-2. スケジュール

今年度は、下市町の抱える地域の問題を題材として問題解決学習の課題に設定し、表1のように15週のスケジュールで授業を実施しました。まずは、1週目、2週目に下市町の全体像を把握するために、図1のようにマインドマップの作成を行いました。

表1 下市町を題材にした社会技術特論のスケジュール

週数	日程	講義内容
第1週	9/30	ガイダンス、チーム分け、下市町の調査
第2週	10/7	下市町の調査(マインドマップの作成)
学外研修	10/14	学外研修・下市町現地調査
第3週	10/21	問題分析と課題設定(現地調査から見えてきた問題点をチーム内で議論)
第4週	10/28	発想法WS(大阪大学 大学院 ビジネスエンジニアリング専攻 上西啓介教授)
第5週	11/4	問題分析と課題設定2& 中間発表会の準備1
第6週	11/11	中間発表会の準備2
第7週	11/18	特許についての講義(納谷特許事務所 平田裕子弁護士)
第8週	11/25	中間発表会
第9週	12/2	問題解決演習1
第10週	12/9	問題解決演習2
第11週	12/16	問題解決演習3& 最終提案発表会準備1
第12週	1/6	最終提案発表会準備2
第13週	1/13	最終提案発表会
第14週	1/27	個人による授業の振り返りまとめ
第15週	2/3	期末試験と授業のまとめ

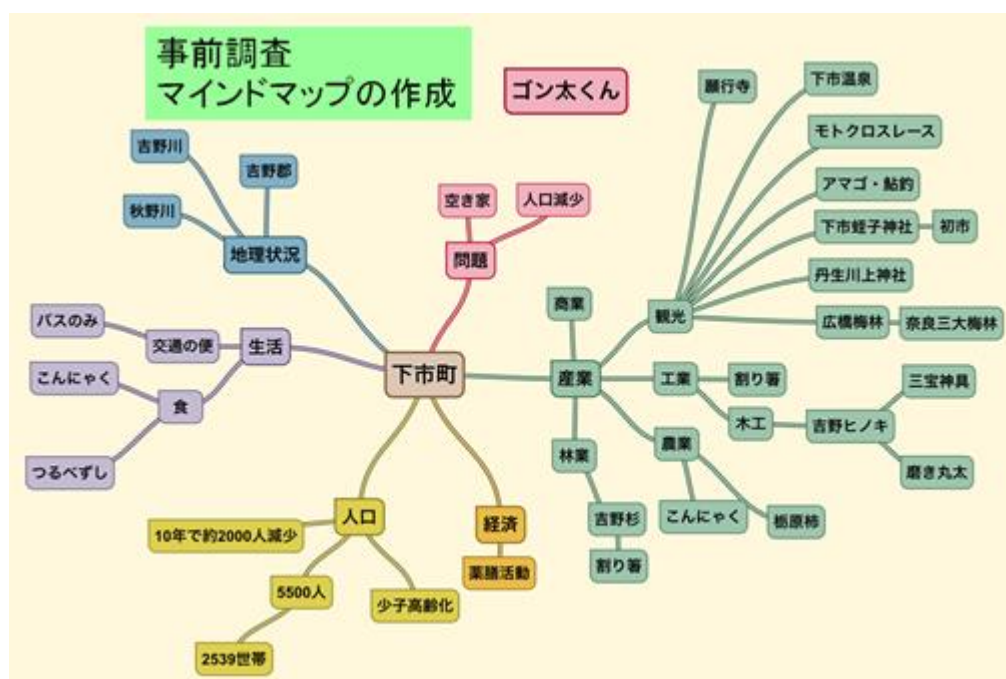


図1 下市町に関するマインドマップで全体を俯瞰

B-3. 現地調査

続いて、10月14日に下市町を訪問し、現地調査を実施致しました。本調査では、下市町役場、並びに農業、林業、商業の現場を訪問し、関係者より生の声をヒアリングすることで、現場の状況に即した問題発見する試みがなされました。午前中は、下市町町役場にて、町が抱える問題について、高齢化における後継者問題や、空き家や休眠農地の問題などについて、説明を頂きました。午後からは、林業・農業・商業班に分かれ、各産業の作業現場を訪問し、関係者より、各現場が抱える問題について説明頂き、学生からは活発な質疑応答がなされました。

農業班では、図2(a)のように菊井農園様を訪問し、柿栽培の現状について見学させて頂きました。午前中の町役場での説目で耳にはしていたものの、猪や鹿によって荒らされた畑の被害状況を実際に見てその深刻さを実感しました。この5年の間に猪の生息数がかなり増加しており、対策に苦慮している様子がわかりました。柿の収穫では、不安定な地面に脚立を立て、何度も上り下りしなくてはならずトラックに積むまでの重労働となる様子を確認しました。

次に堆肥工場を見学させて頂きました。化学物質を使わない農業を推進しており、“おから”を原料として用いた堆肥を生産販売しており、評判は上々とのことであるが、製品になるまで2年かけて発酵させる必要があり、採算性の向上が課題であるという説明がありました。最後に、菊井様が代表を務めるNPO法人による、農村における障害者支援活動内容の一端として、喫茶店における就労支援状況について説明頂きました。具体的ニーズとして、車いすによる接客の際の商品把持の安定化が課題となっているという説明がありました。

林業班では、図2(b)のように吉野銘木様に訪問し、吉野の杉や檜などに対する説明を受けました。特に、吉野の樹木は樹齢が長く、先祖代々手入れの行き届いた森林があるからこそ太く、大きな材木の提供が可能であるため寺社仏閣やお城の高級建築材として利用されているとのことでした。また、伐採した樹木の加工現場や保管の仕方、そしてモデルハウスも見学させていただきました。様々な木材によって適性があり用途によって使い分けることで丈夫で長持ち、あるいは部屋の温かみも変わるなど説明いただきました。技術課題としては、樹木の乾燥を制御するためのシステムや伐採する樹木の内部構造を簡易に測定する技術が求められていることがわかりました。

続いて今も手作り吉野杉を使った「らんちゅう」型の割り箸を作り続けている頃橋銘木店様を訪問させていただきました。手作りでの割り箸づくりにも挑戦させていただきました。現在、流通している割り箸の多くが竹材で、大量生産品であることを教えていただきました。吉野割り箸は高級料亭などでも使われているようで日本の食文化の発展とともに割り箸の技法も種々あるようです。

商業班では、町役場のご担当者様の案内で、札の辻ステーションを訪問しました。ここでは、町の活性化を目指し、県外から募った人材によって10月下旬に下市町で初めてのパン屋がオープンされます。札の辻ステーションは、観光客が車で行きかう幹線道路沿いにあり、この新しい商業施設への集客が期待されることの説明がなされました。また、松村酒造様に立ち寄り、現在は、ネットでの販売が中心ではあるが、町の活性化にはやはり町に人を運び込むことが重要であるとの話を頂きました。その後、図2(c)のように創業明治15年の吉野葛の製造・販売されている吉田屋様が運営される「おばあちゃんのミニ博物館」を訪問し、葛菓子の手作りの製造方法をご説明頂きました。また、学生たちは実際に葛菓子作りを体験しました。



(a) 農業班の獣害被害状況の観察



(b) 林業班の吉野木材の課題ヒアリング



(c) 商業班の和菓子製造体験

図2 社会技術特論における下市町の現地調査

B-4. 中間発表会

下市町役場の方の来校とネット中継によるご参加をいただきながら、中間発表を実施しました。下市町の「あるべき姿」と「現状の姿」とのギャップを現在抱える「問題」と定義し、中間発表では、その問題を解決するための「課題」を発見、設定することを目指しました。「農業」・「林業」・「商業」の各産業が抱える問題の解決をテーマに、産業ごとに2班ずつ合計6班の学生が、7分間の発表を行い、その後3分間の質疑応答を受けました。各班は、マインドマップによる事前調査や現地調査での気づきを踏まえて、問題点を整理したロジックツリーを作成し、その問題に対する課題を想定しました。さらに、グルーピングやペイオフマトリックスの手法を使って、課題の効果を検討し、最終的な課題を設定していきました。下市町役場の皆様からは、農業班に対しては、「鳥獣対策ではイノシシなどが食べない作物の改良等、鳥獣が畑に入らない方法を新たな視点からのアプローチで考えてみてください。」とのコメントをいただきました。林業班に対しては、「エンジニアが林業に興味を持つには、どうしたらよいか教えてください。」とのコメントをいただきました。また、商業班に対して、「人口減少・人不足の解決策として人を増やすことを提案していただきましたが、住民を増やすのか外から来る人を増やすのかターゲットをどちらかに絞って検討していただきたいです。」とのコメントをいただきました。

B-5. 最終提案発表会

これまでの事前調査や現地調査、中間発表会を踏まえ、下市町の各産業が抱える問題に対し解決策の提案を行いました。学生は、この授業を通じて「農業」・「林業」・「商業」を次の世代に伝承することで、例えば、職人の目では、10年かかる目利きの技を科学・工学的技術が担うことで、

地域や日本文化を守ることにつながっていくことを知りました。「地方創生とは何か、また地方創生に対して技術者が果たすべき役割とその重要性とは何か。」を下市町の抱える実際の問題をテーマとして、技術者の立場からの課題解決策の検討に取り組むことで意義深い最終提案発表会となりました。



(a) 学生が作成したペイオフマトリックス

(b) 下市町場へのネット配信の様子

図3 社会技術特論 中間報告会の様子



図4 社会技術特論 最終発表会の様子

B-6. 学生の到達度評価

学生の学習到達度を評価するために、①「地域が抱える問題について分析できる。」②「問題解決のための課題の設定ができる。」③「課題を解決するイノベティブな解決策を提案できる。」④「解決策について自己評価できる。」⑤「地方創生の必要性や重要性について示すことができる。」⑥「技術者が地方創生に対してどんな役割を果たすことができるかを説明できる。」という6つの観点を定め、その能力を評価するための試験を実施した。試験では、実施したワークショップのまとめを問う問題以外に、「学習を通じて発見した地方創生の必要性や重要性について、下市町の実例などを踏まえて、あなたの考えを述べなさい。」や、「地方創生の必要性、重要性の議論を踏まえた上で、あなたが、将来、技術者、研究者になった時に、地方創生に対してどんな役割を果たすべきかを述べなさい。」などの設問を設けた。解答に対して、表2のような評価基準（ルーブリック評価）を定め、学生の学習達成度の評価を行った。

表2 社会技術特論における 学生の能力評価のためのルーブリック表

評価の対象となる能力	優れている	期待するレベル	最低限の到達レベル
地域が抱える問題について分析できる。	右記に加えて、データを挙げて問題点を示している。	下市町のあるべき姿と現状についての分析ができた上で、問題点を明確に示している。	何らかの問題点を示している。
問題解決のための課題の設定ができる。	右記に加えて、課題設定の有効性を論理的に示している。	下市の問題を解決するために必要な適切な課題設定が何かを示している。	何らかの課題設定が示している。
課題を解決するイノベティブな解決策を提案できる。	効果が顕著な解決策を示すことができ、どこにイノベティブな側面があるかを示している。	下市の問題に対する適切で、ある程度の効果が認められる解決策を示している。	何からの解決策を示している。
解決策について自己評価できる。	右記に加えて、改善すべき点やさらに検証すべき点などを挙げる事ができている。	提案した解決策のメリット、デメリットの分析が示している。	解決策についての何らかの評価が行えている。
地方創生の必要性や重要性について示すことができる。	右記に加えて、日本社会全体の問題として、地方創生の必要性や重要性を示している。	下市の実情をデータなどで示しつつ地方創生の必要性、重要性を示している。	地方創生の重要性、必要性について、抽象的には示している。
技術者が地方創生に対してどんな役割を果たすことができるかを説明できる。	右記に加えて、その役割について分析ができている。	技術者の地方創生に対する役割について、具体的に示している。	技術者の地方創生に対する役割について、抽象的には示している。

C. 『COC+政治経済』を通じた地域創生教育

C-1. 講義の概要とスケジュール

一般教科『政治経済』授業の一環として、5学科の3年生を対象に、奈良県の産業・経済に対する理解を深めることと、地元企業の魅力を発見し、地域への愛着を高めることを目的とした8週間の講義を『地域創生理解科目』と位置付けて平成28年10月4日～平成28年11月30日に渡り表3のように実施しました。

第1回目では地元金融機関の奈良中央信用金庫様、第5回目には県内企業5社（フルックスグループ様、広陵化学工業株式会社様、株式会社品川工業所様、奈良精工株式会社様、奈良OAシステム株式会社様）の幹部を特別講師にお招きし、地元の産業や経済、自社が手掛ける事業の業界動向や課題などにつき特別講義を頂きました。それら講義内容を踏まえ、奈良県産業・経済の課題をグループワークで議論し、奈良県を活性化させるためのアイデアについて、SWOT分析手法を使ってテーマを絞り込んだ後、具体的な「事業計画書」に仕上げました。

第7回目にはグループごとに練り上げた「事業計画書」を発表し、各計画書に対し奈良中央信用金庫様から講評と共に採点頂きました。その場で採点結果が発表され、ベスト3のグループが表彰されると教室内は大いに盛り上がりました。

普段、企業の視点ではなかなか思いつかない学生ならではの斬新なアイデアも多々あり、中には「事業化すれば面白いかも」といった高い評価を得た提案もあり、特別講義頂いた5社からは地方創生を担う奈良高専生への期待感が高まりました。学生にとっても地元奈良県の活性化を真剣に考える良い機会となり、地元への関心を高めることができました。

D. 『COC+地理』を通じた地域創生教育

本科1年生を対象とした一般教科の『地理』の授業では、「地域性」を自然・社会の両側面から理解すると共に、各地域が抱える諸問題について考える力を身につけることを目的としています。今回、COC+における地域理解教育の一環として平成29年1月30日～平成29年2月3日の間に、「将来、エンジニアとして地域を見つめるための視点を養うこと」を目的に『COC+地理』を全5回にわたり実施しました。本授業では、奈良県の地形・気候・文化についてグループワークを通じて理解を深め、地域の魅力について発表を行いました。

学生は4～5名のグループに分かれ、テーマとする県内地域をグループごとに決めて、その地域の情報収集及び整理に取り組みました。奈良県の市町村について、基本情報や人口・面積・世帯数などの統計データを活用して、また、歴史や文化・風習などについて調べ、そのエリアの観光、特産品・郷土料理・伝統産業や世界遺産、重要文化財・伝統的建造物などの情報を集め、まちの強みをポスター形式に仕上げました。各グループで発表者2名は常にポスターの設置場所に待機し、教員の合図で順番に交代し、全員が均等に他のグループの学生を前に発表を行いました。発表の目的6～7分の限られた時間内に奈良県地域の魅力をわかりやすく聞き手に伝えることです。

ポスターの内容や構成・レイアウトとプレゼンテーションの発表者の声量やスピードが適切で聞き取りやすいかや質疑に的確に回答しているか等に関する点を対象として評価しました。発表者以外のメンバーは他グループの発表を聞き、評価を行いました。また、各グループ発表に対し投票も行われました。今回の授業を通して、奈良県の市町村について、自らが調べることにより奈良県のことを考え、関心を持ち、そのまちの魅力を聞き手に伝えることで学生自身が地元を強く意識するよい機会となりました。



(a) グループワークの様子



(b) ポスターを使ったグループ発表

図7 地理の授業での地域創生教育の様子

表3 COC+政治経済の授業における地域創生理解教育のスケジュール

週	講義内容
第1回	イントロダクション・特別講義：「奈良経済の課題について」：奈良中央信用金庫様
第2回	奈良県経済の現状を分析しよう ―SWOT分析を体験してみよう―
第3回	奈良県経済の現状を分析しよう（続）―事業のアイデアを考えてみよう―
第4回	事業計画書を作成しよう ―商品・サービスのアイデアを考え事業計画書をつくろう―
第5回	特別講義：奈良県企業様 ―事業計画書をみてもらおう！―
第6回	事業計画書発表準備 ―プレゼンテーションの準備をしよう！―
第7回	グループ発表 ―奈良中央信用金庫様による評価―
第8回	振り返り・アンケート調査

C-2. 奈良中央信用金庫様による特別講義

奈良中央信用金庫様による特別講義は、金融機関の役割や種類、信用金庫と銀行の違い等を説明された上で、奈良県経済の現状と課題について、学生に質問を投げかけながら、分かりやすくレクチャーされました。学生は、奈良県の産業・製造業・地場産業等を全国シェアと比較して、奈良県経済の現状を理解しました。そのうえで、奈良県経済の課題は、奈良県内中小企業の成長と発展、さらに新規事業の創出であることを学びました。そして、課題解決のためには、若者が奈良県に愛着を抱くことと、ベンチャーマインドを持った優秀な技術系人材が活躍することが重要であると認識しました。

C-3. フルックスグループ様による特別講義（平成28年11月2日、電子制御工学科3年生対象）

フルックスグループ様は、時代と共に「内食」から「中食」「外食」へと「変化対応」し、「惣菜のわかる八百屋」として、青果販売・加工、フードサービス事業を幅広く手掛ける地元有名企業です。平成19年にグループ会社が「想いの共有・情報の共有」の為に奈良に集結し、「世界を見続け、足元の商売を大切に」をモットーに、世界を大きく見ながら地元・奈良で地域に密着し、足元を深掘りしながら、いつかはアジアを舞台に商売したい！という熱い思いを交えながら、事業におけるこだわりや業界を取り巻く環境、海外視察先での貴重な体験談などバラエティ豊かに語って頂きました。

C-4. 広陵化学工業株式会社様による特別講義（平成28年11月8日、物質化学工学科3年生対象）

広陵化学工業株式会社様は、1960年代に種々のプラスチックが大量生産されて、衣料や生活環境へ浸透していった時代から50年以上の歴史を持つ奈良県の伝統ある企業様です。同社がこの5

年間で売上高を 72%成長させることができた増収増益の秘密を中西社長の 3 つのお言葉、「新しいことに挑戦しなさい」、「加工高を増やしなさい」、「皆さんの雇用は死守します」を交えながら、講演者ご自身の製造現場を統括する工場長と経営を企画する管理の立場からお話を頂きました。学生は、この特別講義を通して生産性（人の余力、設備の余力、生産スペースの余力を埋めること）と付加価値（高い小回り性とワンストップの利便性など）について説明を受け、中小企業の魅力、製造業の面白さを知りました。

C-5. 株式会社品川工業所様による特別講義（平成 28 年 11 月 8 日、電気工学科 3 年生対象）

株式会社 品川工業所様は、全国に誇れる創業明治 43 年、今年で 107 周年を迎える老舗企業様です。餅つき機械で創業して以来、食品加工機械・製菓機械・化学用機械の開発・製造・販売事業を展開し、多様化・複雑化、高品質化する業界のニーズに対応し、技術とハートで食・未来を拓き続けておられます。社章でもあるサンキュウマークの由来や社訓の「感謝・研究・前進」の精神でお客様に満足を提供することにより、社会への貢献と自らの向上を計ることを品質方針として、幅広い業界に対応した製品装置を紹介して頂きました。学生から「なぜ奈良県に進出したのですか？」という質問に対して、「当時、交通が整備された工業団地が奈良県に出来るという事で進出しました。実際、環境も立地条件も整っています。」とのご回答を頂きました。



(a) 奈良中央信用金庫様



(b) フルクスグループ様



(c) 広陵化学工業株式会社様



(d) 株式会社品川工業所



(e) 奈良精工株式会社様



(f) 奈良OAシステム株式会社様

図 5 政治経済の授業での奈良県内企業様による特別講義の風景

C-6. 奈良精工株式会社様による特別講義（平成 28 年 11 月 10 日、機械工学科 3 年生対象）

奈良精工株式会社様は、1968 年光学機器部品メーカーとして設立されましたが、一分野に固執せず、歯科用インプラント材生産を開始し、奈良県で唯一の第一種医療機器製造販売業許可を取得されました。その後も電車部品・航空機部品の生産等、精密部品加工での技術や経験を活かして、異分野・異業種に積極的にマッチングを図り、奈良県内において技術力の高い企業様です。

中川社長ご自身のエンジニアとしての立場から有用なお話を頂きました。

この特別講義を通して、学生は奈良精工株式会社様のエンジニアとしての基礎技術の蓄積（モノづくりの原点、RWF法、タグチメソッド等）・他社との交流を通じた事業展開（産学官連携による弾発指の手術機器の開発、自社にない生産技術先との連携等）や奈良県における地方創生の現状を学び、中小企業の魅力について知りました。

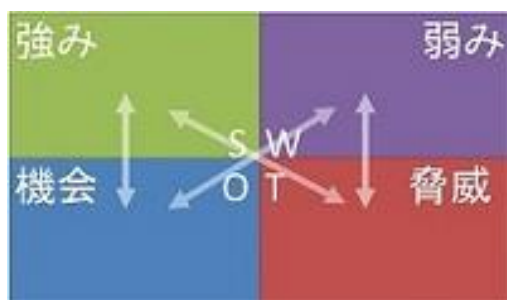
C-7. 奈良OAシステム株式会社様による特別講義（平成28年11月10日、情報工学科3年生対象）

奈良OAシステム株式会社様は、平成元年に「夢は大きく」をコンセプトに設立し、OA機器・複合機・ビジネスフォン・システム開発・中古コピー機販売、WEB制作等のオフィスに関する総合商社で、「信用と信頼」をコンセプトに奈良県に密着したサービスで地域貢献を目指す企業様です。始めに動画による会社紹介があり、事業を行う上での数々の困難を乗り越え、ピンチをチャンスに変えて原点回帰をはかり、未来を見据えて挑戦を続けている一筋縄ではいかない懸命な体験談をお話いただきました。

C-8. SWOT分析とグループ発表

図6のように事業のアイデア（商品・サービス化アイデア）をまとめるために、分類された4つのカテゴリ間の関係についてそれぞれクロス分析を行い、積極的攻勢（プランA）、差別化戦略（プランB）、段階的施策（プランC）、専守防衛（プランD）のそれぞれの策を具体的に考えていくグループワークを行いました。

各グループが7分（発表5分+質疑応答2分）という時間制限でプレゼンテーションを行い、奈良中央信用金庫様、学生、教員それぞれが評価をつけ、想いの共有を図る試みがなされました。奈良県経済の発展と社会貢献の観点から提案内容について“新規性”“実現性”“事業性”からの評価とプレゼンテーションの出来具合を対象として50点満点で採点されました。



(a) SWOT分析に取り組む様子



(b) グループ発表の様子

図6 COC+政治経済の授業での地域創生教育の様子

D. 『COC+地理』を通じた地域創生教育

本科1年生を対象とした一般教科の『地理』の授業では、「地域性」を自然・社会の両側面から理解すると共に、各地域が抱える諸問題について考える力を身につけることを目的としています。今回、COC+における地域理解教育の一環として平成29年1月30日～平成29年2月3日の間に、「将来、エンジニアとして地域を見つめるための視点を養うこと」を目的に『COC+地理』を全5回にわたり実施しました。本授業では、奈良県の地形・気候・文化についてグループワークを通じて理解を深め、地域の魅力について発表を行いました。

学生は4～5名のグループに分かれ、テーマとする県内地域をグループごとに決めて、その地域の情報収集及び整理に取り組みました。奈良県の市町村について、基本情報や人口・面積・世帯数などの統計データを活用して、また、歴史や文化・風習などについて調べ、そのエリアの観光、特産品・郷土料理・伝統産業や世界遺産、重要文化財・伝統的建造物などの情報を集め、まちの強みをポスター形式に仕上げました。各グループで発表者2名は常にポスターの設置場所に待機し、教員の合図で順番に交代し、全員が均等に他のグループの学生を前に発表を行いました。発表の目的は、6～7分の限られた時間内に奈良県地域の魅力をわかりやすく聞き手に伝えることです。

ポスターの内容や構成・レイアウトとプレゼンテーションの発表者の声量やスピードが適切で聞き取りやすいかや質疑に的確に回答しているか等に関する点を対象として評価しました。発表者以外のメンバーは他グループの発表を聞き、評価を行いました。また、各グループ発表に対し投票も行われました。今回の授業を通して、奈良県の市町村について、自らが調べることで奈良県のことを考え、関心を持ち、そのまちの魅力を聞き手に伝えることで学生自身が地元を強く意識するよい機会となりました。



(a) グループワークの様子



(b) ポスターを使ったグループ発表

図7 地理の授業での地域創生教育の様子

E. 正課外の教育活動を通じた地域創生教育

E-1. キャリアデザインセミナーの実施

平成 28 年 10 月 20 日～平成 28 年 12 月 8 日の間に、情報工学科 4 年生を対象に、IT・Web 業界の第一線で活躍されている企業幹部を講師として招き、「社会に出るための心得」について全 3 回の講義を実施しました。第 1 回では「社会に出るための準備をしながら学生生活を送る」、第 2 回では「社会人の基礎力を身につけよう」、第 3 回では「成功する就活」というテーマでそれぞれ講義頂きました。学生を採用する立場の企業幹部の方からの厳しい現実と本音のお話を交えた説得力ある講義を通じ、自身のキャリアデザインをどう思い描いていくのか、あらためて見つめ直す良い機会となりました。

各回の講義終了後には、講師を囲み関係者にて意見交換も行い、講義での反省点や今後の課題等について議論を交わしました。県内企業を中心に本校学生に対し高い期待が寄せられる中、それらの期待に応える人材の育成において、「社会に出るための心得」は根幹の教育であり、キャリアデザイン教育等を通じ地域産業を支える人材育成に本校は今後も取り組んでまいります。



(a) 株式会社メンバーズ 取締役 CFO
常務執行役員 小峰正仁氏による講義

(b) 授業終了後の関係者による意見交換

図 8 キャリアデザインセミナーの実施

E-2. 学生チャレンジプロジェクト 2016 を通じた地域創生教育

本校では、学生が自主的に行う創作活動を支援する『学生チャレンジプロジェクト』制度を設けております。本年度から、「地域創生枠」を新たに設け、地域創生に取り組む活動を支援することにしました。今回は、図 9 のように、県内の知育玩具メーカーである株式会社ヨシリツ様の人気玩具ブロック LaQ を使い、鹿の模型にモーターや歯車を組み合わせた動くブロック動物の制作にチャレンジする『LaQ 鹿!』プロジェクトが採択されました。本プロジェクトは、県内企業の商品を使って、奈良を代表する動物を模した動くおもちゃを創作することで、奈良の魅力を PR しようという地域創生活動の一環でもあります。製作された鹿のロボットは、奈良高専祭（平成 28 年 11 月 5 日～6 日）でも披露され、来校者の関心を集めました。

目的

奈良県発のおもちゃであるLaQを使って、高専生ならではのモノづくりをしたいと思いました。今まで培ってきた技術や知識を駆使すること、そして、作った作品を多くの人に見てもらい、奈良の魅力をアピールしたいです。

LaQ（らきゅー）って何？

LaQとは、正方形と正三角形の“基本パーツ”と、それらをつなげる“ジョイントパーツ”からなるブロックのおもちゃで、奈良県吉野郡に本社のある株式会社ヨシリツが販売しています。

ジョイントパーツの種類は複数あり、それらと平面パーツを組み合わせることで立体的な作品を作ることができます。そのほかにも、タイヤと専用のシャフトパーツがあり、それらを組み合わせることで、タイヤやクルクル回るものも表現することができます。

小さな子供だけでなく大人も楽しむことができるため、世界中で人気のおもちゃです。



参考 LaQ HP www.laq.co.jp/

プロジェクト概要

現在、LaQシリーズにはモーターやゼンマイを搭載して動くような製品はありません。そこで、株式会社ヨシリツ様と協力して“動くLaQ”を作り、地域の子供たちに見て、操作して、遊んでもらう、というのがこのプロジェクトの概要です。

動くLaQには、奈良の象徴であるシカをモデルにした『LaQ鹿』と、LaQの歯車をつなげることで様々な歯車機構に触れる『LaQ歯車キット』を考えています。

そして、高専祭などの行事の際、たくさんの人にLaQ鹿やLaQ歯車キットに触れてもらい、楽しく遊んでもらうことで、『奈良にはこんな面白いものがある』と、奈良の魅力をアピールしようと考えています。



LaQ鹿 試作品



LaQ歯車

図9 学生チャレンジプロジェクト 地域創生枠の取組

F. COC+3 校の地域創生教育における連携についての協議

平成28年7月14日及び平成29年2月9日に奈良女子大学、奈良高専、奈良県立大学の3校の教育プログラム関係者が集まり、今後の3校連携の地域創生教育の実施について、意見交換を行いました。平成29年度以降、各校で実施する地域創生教育の講義に、各校の教員を講師として派遣するとともに、各校の学生に講義を開放して受講可のとすることを決めました。今後は、3校間の単位互換協定の締結を進めていく予定です。

G. 教育研究環境整備

地域創生教育の実践のための基幹教室として、昨年度末に本校講義棟 1 階の大講義室を改修し、図 1 1 のような『地域創生大講義室』（仮称）に生まれ変わりました。平成 28 年度から本格的に地域創生科目の授業に活用されております。また平成 29 年度には、『地域理解資料室』を新たに設置することが決定し、本年度、基本構想を固めました。室内に常時、奈良県内企業を紹介する資料や奈良県の文化・歴史に関する資料等を展示していくことで学生の地方創生への意識を日頃の学生生活の中で涵養していきます。



図 10 整備された地域創生大講義室とそこでの授業風景

また、地域の企業の研究開発活動を支え、学生の雇用先を確保するために設置されている地域共創研究クラスターに、新たに図 11 のような走査電子顕微鏡 (SEM) を設置しました。地域創生工学研究などの講義で活用を図るとともに、地元企業の研究開発に活用いただくことを計画しています。



図 11 地域創生工学研究などで活用する走査電子顕微鏡

② 就職（企業との関わり）について

A. キャリア教育・進路開拓体制の強化

本校の COC+事業の推進は、図 1 のように、COC+実施本部の下に、地域創生研究センター運営委員会と地域創生マインド養成教育プログラム開発委員会を置き、地域の研究活動の振興による学生の雇用先の開拓、地域創生マインドの涵養を行ってきた。平成 28 年度は、新たにキャリア教育・進路開拓担当の本部長補佐を配置し、キャリア教育、進路開拓の強化を図りました。

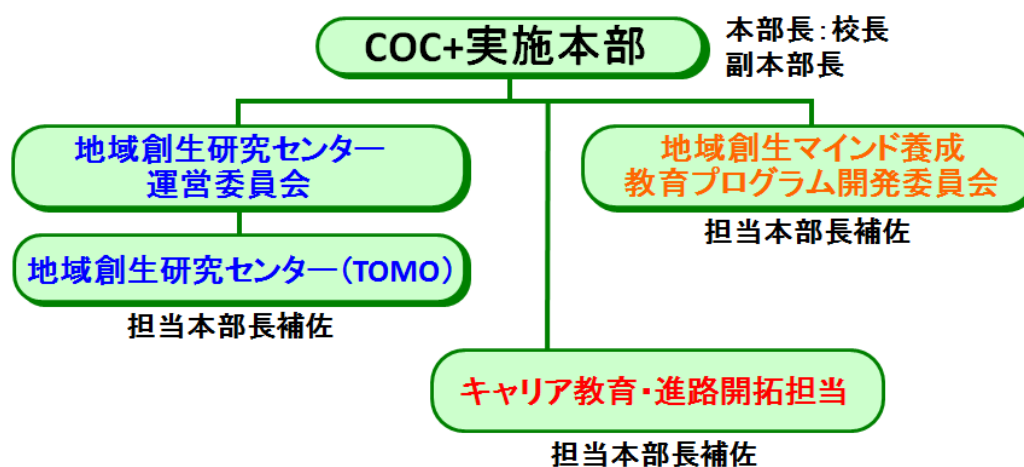


図 1 COC+の実施体制 キャリア教育・進路開拓担当本部長補佐の新設

B. 県内企業・団体等との交流会・イベントの開催

本校では、県内企業や団体との交流やイベント開催を通じて、企業・団体との交流深化、信頼関係強化を図り、本校及び地元企業・団体双方の魅力をPRしていくことで学生の地域への定着を目指しています。

B-1. 奈良高専OB・OGが勤める県内企業&奈良高専 交流会の開催

本校卒業生が就職した奈良県内企業と本校教員との交流会を平成29年2月10日(金)に開催しました。卒業生の活躍状況や企業が求める人材像を企業側からご紹介いただくとともに、本校の学生の就職状況などをご紹介することで、求人・雇用に関する情報・意見交換を行い、県内企業と本校との信頼関係の強化を目的に実施しました。当日は県内企業12社(22名)の参加があり、奈良高専学生への期待感の高さが現れました。冒頭、本校 後藤校長より挨拶があり、本校卒業生のこれまでの採用についてのお礼と共に、本校が研究、教育の両面から社会に貢献できる人材の育成に取り組んでいる旨の紹介がありました。続いて、COC+実施責任者の電気工学科 藤田教授より本校 COC+事業の取り組みについての紹介、学生主事の物質化学工学科 片倉教授より学校紹介及び本校卒業生の進路状況等についての紹介が行われました。

その後、休憩を挟んで参加企業様を2つのグループに分け、それぞれのグループに5学科の就職担当教員が参加し、本校卒業生の各企業での活躍ぶりや今後の人材育成についての期待や要望、求人・雇用に関する課題等につき忌憚のない意見交換が行われました。最後に、産学交流室長 電子制御工学科 早川教授による閉会挨拶のあと、名刺交換を兼ねた自由歓談となり、各企業様と教員の間で気軽な情報交換も行われました。出席された企業様の中には本校卒業生もおられ、在学時の担当教員との懐かしい再会に話が弾む場面もありました。本交流会を通じ、あらためて県内企業様の奈良高専生に対する熱い期待を感じ取ることができ、県内企業様と本校との絆を強めるよい機会となりました。今回得たご意見や情報は今後の進路指導に活かしてまいります。



(a) 本校 後藤校長挨拶



(B) 藤田教授による本校 COC+事業紹介



(c) 片倉教授による学校・進路状況紹介



(d) 企業様と本校教員との意見交換



(e) 早川教授による閉会挨拶



(f) 閉会後の自由歓談

図1 奈良高専OB・OGが勤める県内企業との交流会の様子

B-2. IoTセミナーの開催

平成28年5月27日(金)、県内企業の活性化のために、奈良県産業振興総合センターにて『IoTセミナー』を開催致しました。当日は、奈良県下の企業関係者を中心に申込者数を上回る88名が参加され、会場は参加者のIoTへの強い興味・関心と熱気に包まれました。本校 後藤校長の閉会挨拶のあと、近畿経済産業局 地域経済部 情報政策課 課長 石原康行氏より「IoTの現状と経済産業施策について」と題し講演を頂きました。続いて、本校 電気工学科 土井准教授より「手作りIoTのすすめ」と題し講演が行われ、さらに株式会社KSKアナリティクス 足立 悠氏による「ビッグデータ・IoT時代に利益を生み出す効果的なデータ分析とは？」と題した講演が行われました。

講演終了後、参加者からの質問に講演者が熱心に応答する場面もあり、充実した交流となりました。最後に奈良県産業振興総合センター 生活・産業技術研究部 部長 浅野 誠氏より閉会挨拶を頂きました。その後、名刺交換会が行われ、講師の方々と参加者との活発な意見交換が行われ、会場内は県内企業の活性化に向けた産学連携、企業間連携への熱気に包まれ、地方創生に向けた有意義な場となりました。



(a) 近畿経済産業局 情報政策課 石原課長のご講演



(b) 奈良高専 電気工学科 土井准教授の講演



(c) 株式会社KSKアナリティクス 足立氏のご講演



(e) 奈良県産業振興総合センター 浅野部長 閉会挨拶

図2 IoTセミナーの様子

B-3. 奈良県内企業魅力発見セミナーの開催

地方創生推進事業（COC+）の一環として、平成 28 年 11 月 19 日（土）に奈良女子大学、奈良県立大学との共催で『奈良県内企業魅力発見セミナー』（於：奈良女子大学）を開催し、本校学生が参加しました。このセミナーでは、学生が県内企業を通じ奈良県産業の魅力を知り、地域への愛着を涵養していくことを目的としております。

当日は県内企業・自治体様計 23 機関が出展され、計 100 名を超える参加学生が企業・自治体のブースを回り、事業内容や社会への貢献等についての説明に真剣な眼差しで耳を傾け、会場は学生たちの熱気に包まれました。



図 3 奈良県内企業魅力発見セミナー 会場風景

B-4. 『奈良高専 技術フォーラム&研究室見学会』

本校の 2 年に一度の大イベントである『技術フォーラム&研究室見学会』を平成 29 年 3 月 3 日（金）に開催しました。当日は 100 名を超える企業関係者に参加頂きました。今回は、特に、本校の研究内容だけでなく、本 COC+の取り組みの全体像を紹介すると共に、地域創生研究クラスター（5 分野）の各研究室も見学頂き、本校の COC+事業に対する理解を深めて頂きました。また、奈良県企業 16 社がポスターセッションに参加頂き、出展会場内に設けられた企業コーナーで自社を PRすると共に来場企業との企業間交流も行われました。本校及び県内企業様の取り組みを PR するよい機会となりました。



図 4 『奈良高専 技術フォーラム&研究室見学会』の様子

C. 奈良県との連携による県内雇用促進に向けた取り組み

本校では、奈良県 雇用振興部 雇用政策課、企業立地推進課と連携し、奈良高専卒業生の奈良県企業への再就職支援及び奈良県での新たな雇用創出に向けた企業誘致活動に取り組んでおります。

C-1. 奈良高専卒業生向け奈良県内再就職支援

一度は県外の企業に就職したが、事情があって奈良県内への再就職を希望する本校卒業生や、子育てが一段落し県内での就労復帰を目指す卒業生向けに、奈良県 雇用振興部 雇用政策課と連携し、奈良県への再就職支援紹介ページを立ち上げました。奈良県ホームページ上で奈良高専卒業生向け再就職支援ページを立てて頂き、本校ホームページ上で当支援紹介を行って奈良県の当該ページへリンクを貼り、県内再就職を希望する卒業生が気軽に奈良県の相談窓口を利用できる仕組みを作りました。これにより、県外他企業で社会経験を積んだ即戦力人材の奈良県への再就職を後押ししてまいります。今後、奈良高専卒業生の再就職をご支援いただける県内企業様を募集し、支援企業リストを作成して、それら情報を奈良県とも共有しながら再就職支援体制をさらに強化してまいります。

奈良高専 トップページ



奈良高専ホームページでの再就職支援紹介



奈良県ホームページでの再就職支援紹介ページへリンク ↓↓↓



奈良県HPでの奈良高専卒業生向け再就職支援紹介

図1 再就職支援のためのホームページ連携図

C-2. 奈良県への企業誘致に向けた活動

奈良県 雇用振興部 企業立地推進課の県内企業誘致に協力することで、奈良県内での新たな雇用創出、県内産業の活性化を目指しています。移転を考えている企業にとって移転先での雇用確保は大きな課題となっており、工学系人材の有力輩出校として奈良高専の存在を企業へPRし、雇用確保の懸念払拭に取り組んでおります。これまで、企業立地推進課の誘致活動に同行し、県外3社とアプローチを行ってきた結果、その内の1社につき奈良県への移転方針が固まるなど成果が見え始めております。また、図2のように「奈良県企業立地ガイド」では、表紙に奈良高専の写真が掲載され、本文中にも奈良高専の紹介が掲載されております。



(b)優れた教育機関として掲載図2 奈良県企業立地ガイドでの掲載内容

D. 県内企業の情報収集・協力関係の強化

県内企業の実際の仕事内容を見学することで、その職務の魅力を知ることや、訪問先企業との情報・意見交換を通じて新たな県内雇用先を発掘するため、積極的に県内企業の工場見学を行いました。また、事業協働機関との対談を通じて、協力関係の強化を図りました。

D-1. ヨシリツ株式会社を訪問

奈良県吉野郡大淀町に本社を構える該社は、アイデア商品・知育玩具の企画・開発・製造・販売を手掛ける地元の有名企業です。主力商品である組立ブロック「LaQ」（ラキュー）などで全国的に知られる該社を平成28年4月14日に訪問し、工場内を見学させて頂くと共に該社と奈良高専との交流を深めていくことを確認し合いました。工場内では、作業員の皆さんが専用の装置を駆使し手際よく組立ブロックのパーツの種分け、チェックなど様々な工程作業に従事されている現場を見学しました。また、工程作業における課題や苦労話を伺い、意見交換を行いました。

D-2. 株式会社丸島アクアシステムを訪問

ダム・河川用水門、除塵設備、橋梁・水圧鉄管、水処理設備等を主事業とする該社は大和郡山市に生産拠点（奈良工場）を構えていることもあり、平成 28 年 6 月 6 日に訪問いたしました。大設備が建ち並ぶ奈良工場を見学し、その後の情報・意見交換で、奈良高専学生の雇用獲得を熱望されていることを確認しました。



図 1 丸島アクアシステム工場見学風景

D-3. 上六印刷株式会社を訪問

奈良県生駒市に本社を構える創業 80 年を超える高級美粧パッケージ印刷の有力企業である該社を平成 28 年 7 月 28 日に訪問し、技術系雇用に関する話題を中心に情報・意見交換を行いました。該社は人材育成に関して“現場主義”をモットーに、机上ではなく、実際の現場に立って、設備等に触れ、仕事を肌で感じてもらうながらスキルアップを図っていく教育方針を実践されており、若手の自由な発想を育てる風土も根付いておられます。該社の奈良県内学生の雇用ニーズは強く、特に設計、化学系技術者をはじめ、奈良高専学生にマッチする人材も強く求められておられることが分かりました。

D-4. 事業協働機関との対談

本校では、本プロジェクトの事業協働機関の幹部の方々と本校校長との対談を順次実施し、COC+事業の重要なパートナーである事業協働機関との信頼関係強化を図っております。平成 27 年度には、6 社の皆様との対談を実施し交流を深めました。今年度は、株式会社南都銀行様（平成 28 年 7 月 29 日 対談）、三晃精機株式会社様（平成 28 年 8 月 2 日 2 度目の対談）との間で対談を実施し、今後も連携して COC+活動に取り組んでいく旨確認しました。来年度も引き続き、事業協働機関との交流を深めてまいります。



(a)株式会社南都銀行様との対談 紹介ページ



(b)三晃精機株式会社様との対談 紹介ページ

図2 事業協働機関との対談紹介ホームページ

③ 成果の社会的還元（地域貢献事例）について

A. 地域共創研究クラスターの取り組み

本校では奈良県の重要課題である「地域産業の支援・創出」「農林業の振興」「医療・福祉の充実」「防災危機管理」などのニーズに学内の研究シーズを結集して取り組む学内横断的研究体制として、図1のように地域創生研究センターを設置し、その下に5分野の『地域共創研究クラスター』を設け、奈良県の課題に取り組んでおります。各クラスターでは、以下に示すような取り組みを実施してきました。

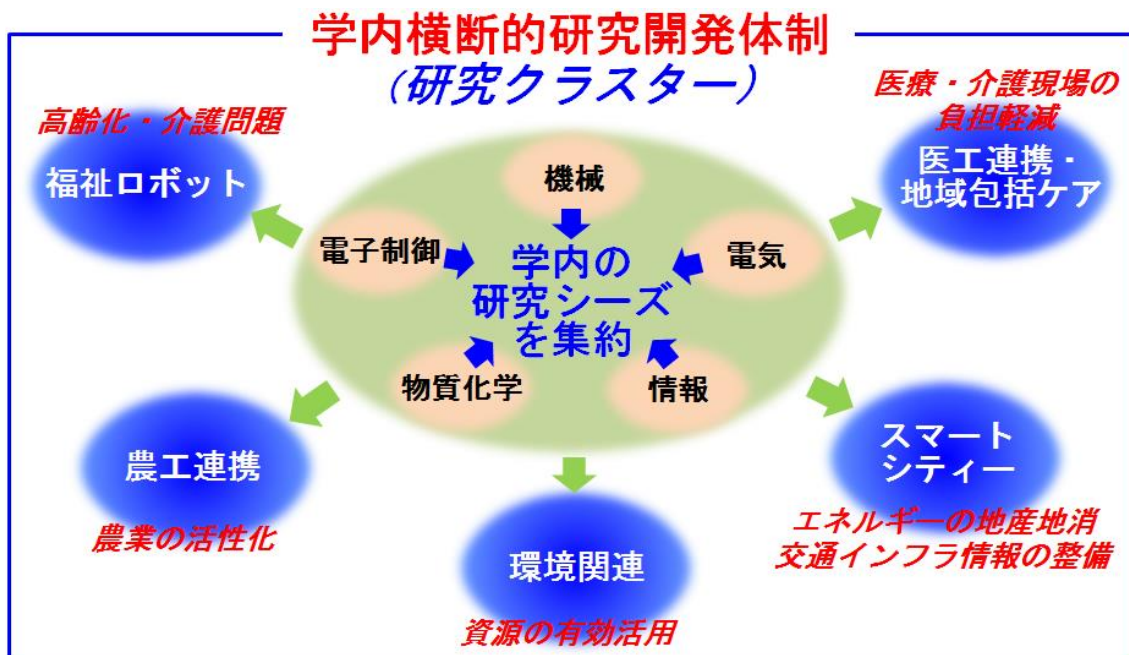


図1 地域創生研究クラスターによる地域への貢献体制

A-1. 福祉ロボットクラスターの活動

[1] 介護ロボットひびきの開発

奈良県天理市にある社会福祉法人 天寿会との共同研究により開発している介護ロボット“ひびき”の実用化に向けた取り組みとして、本年度は下記の検討を行いました。

(1) 機構の改良

股関節が硬直している被介護者の方のために、被介護者の身体が斜めの状態で移乗動作を行う人体サポート部を製作しました。本人体サポート部により、開脚する必要がなく、移乗動作時の体圧を胸部、脇腹部方向へ分散することで身体への負担軽減が可能となります。また、人体把持部は3自由度で調節可能です。

しかし、人体サポートの動作限界位置がベッドの端までしかないため、移乗者は端座位の状態から少し前かがみになって移乗する形になります。そこで、人体サポート部の土台部分を改良することで動作限界位置をベッド側にずらしました。そのことにより、前に寄りかからずに移乗が可能になりました。また、開発した人体サポート部に対応したカバーを新たに製作しました。介護ロボット“ひびき”の全体図を図2に示します。

(2) 生体計測実験および表面筋電位計測実験

開発した人体サポート部の有効性を明らかにするため、各身体部位角度測定実験、表面筋電位計測実験及び接触圧計測実験を行いました。ここで、①改良した人体把持部の土台部分の有効性を示すため、表面筋電位計測実験、②移乗動作の自動化をするにあたって、移乗者の一番負担の少ない傾き角度を明らかにするため、接触圧計測実験を行います。

移乗者の表面筋電位を Biometrics 社製の SX230 を用いて計測します。計測箇所は大胸筋、広背筋の2箇所であり、人体把持部を初期状態から傾斜させ、初期状態に戻す動作を行う際の筋電位を計測します。得られた筋電図は全波整流および平滑化(ローパスフィルタ)を行い、筋電位の評価方法として、%MVC を用います。そして、被験者の最大筋量に対する割合を表示します。大胸筋における実験結果を図3に示します。旧の平均値は1.28%、最大値は7.49%であり、新の平均値は0.869%、最大値は4.34%でした。この結果より改良した人体把持部の方が平均値、最大値ともに旧型よりも小さかったことが分かりました。よって、改良した人体把持部の方が移乗者にとって負担が少ないことが分かります。

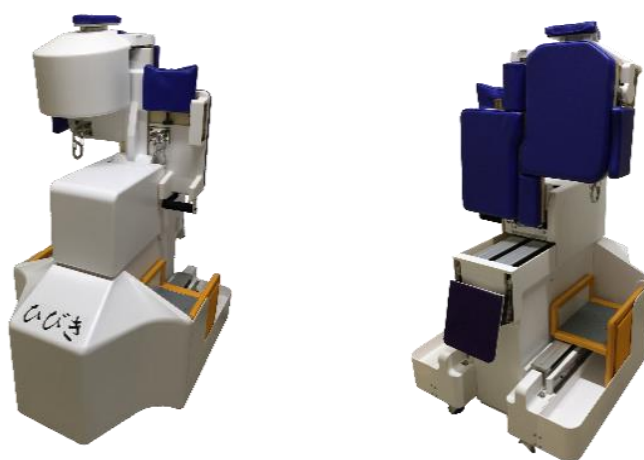


図2 福祉ロボットクラスターで製作している介護移乗機

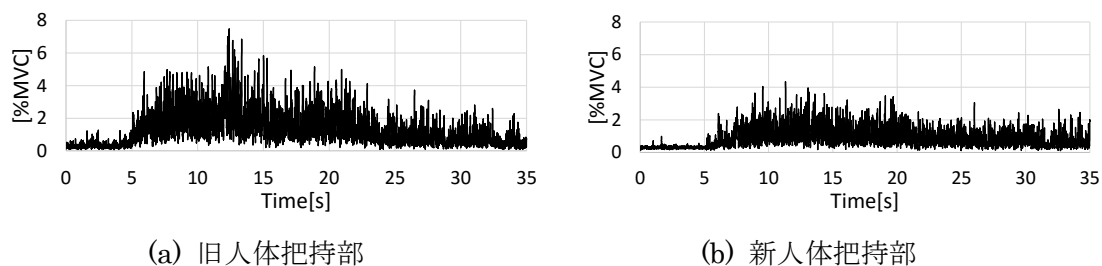


図3 表面筋電位計測実験結果

(3) 接触圧計測実験

人体把持部にもたれかかった時接触圧を住友理工製のSR ソフトビジョン(数値版)を用いて計測しました。計測箇所は胸部、横腹部、臀部の3か所であり、角度は臀部が浮いた状態(0°)から20°まで5°刻みで計測しました。表1に実験結果の一例を示しました。実験結果の評価方法として、最大値、平均値、面積(0mmHG以上の圧力)を求め、最大値、平均値は小さい方から1, 2, 3, 4, 5点とつけ、面積は大きい方から点数をつけ、その点数の合計が一番少なかったものが一番負担の少ない角度と決定しました。この方法を複数人に実施し、その実験結果を適用したところ、27°が一番負担の少ない角度であることが分かりました。

表1 接触圧計測実験結果

角度 [°]	胸部	横腹部	臀部
10			
15			
20			

(4) 成果報告

図4のように介護ロボット“ひびき”を、2016年10月26日(水)から28日(金)東京ビッグサイトで開催された『HOSPEX2016』に出展しました。そして、多くの来場者に対し、開発した介護ロボット“ひびき”の説明を行い、興味を持って頂きました。

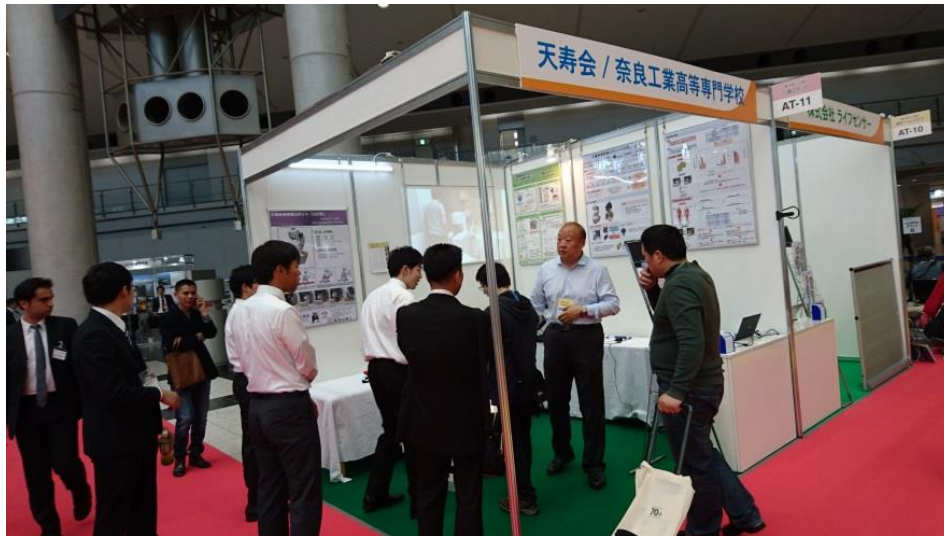


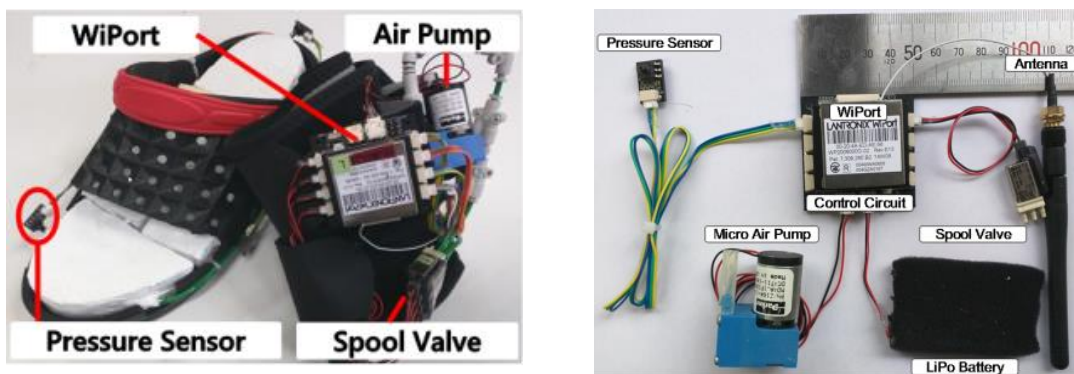
図4 HOSPEX2016 展示会場の様子

[2] 歩行訓練用高機能靴

歩行状態のリアルタイムでの視覚表示、歩行中に中敷き部の剛性変化による歩行の教示および歩行中の転倒を抑制することが可能な高機能靴を開発するために、今年度は、試作装置として高機能靴及び制御回路を製作しました（基板製作）。特に、制御基板は、介護ロボット“ひびき”の人体サポート部にも使用することができ、福祉機器への応用が可能となります。

(1) 高機能靴及び制御回路

本研究で用いる高機能靴を図5(a)に、制御回路基板を図5(b)に示します。高機能靴の機能として、足裏荷重分布の検出、空気圧を用いた歩行アシスト提示、中敷きの剛性変化による触覚的提示があげられます。開発する提示システムは、本靴に搭載されている圧力センサーから中敷き部にかかる圧力を測定します。また、測定回路に搭載されている無線通信モジュールより通信を行い、パソコンなど提示機器に圧力分布を色相変化により提示します。さらに、中敷部は空気圧を用いて剛性変化可能な特徴を有しており、剛性変化による触覚提示や歩行アシスト提示を行います。そのため、空気圧源としてマイクロポンプ、ON・OFF制御用のスプール弁を搭載しています。ここで、制御基板は奈良県内企業のテクノス株式会社に製作依頼し、産学連携の活動と同時に進めています。



(a) 高機能靴

(b) 制御回路

図5 試作した歩行訓練用高機能靴及び回路

(2) システム構成

安定歩行の実現を目的とした本高機能靴を用いた歩行訓練システムを図6に示します。本システムを用いた歩行訓練の流れは以下の通りです。歩行状態の視覚的提示部としてAndroid OS搭載のタブレットやHMDまたはパソコンを 사용합니다。まず、被験者に高機能靴とHMDを装着し歩行を行います。高機能靴の中敷部で圧力を測定し、回路部に搭載されている無線通信モジュールで通信を行います。そして、足裏荷重分布を提示部のデバイスに表示します。この際、理学療法士はタブレット端末で歩行状態を確認し、タブレット側から操作することにより任意の中敷き部の剛性を変化させます。これにより、患者にどこに力を入れて歩くべきかを足裏の感覚として提示し、正しい歩行を意識して訓練します。このように、歩行の矯正を行うことにより、普段使わない筋肉が使われることで筋力の回復が期待できます。

開発した歩行訓練システムは今後、展示会に出展する計画である。



図6 歩行訓練システム

A-2. 農工連携クラスターの活動

奈良県は農業が盛んで、農作物の安定した供給確保が農業ビジネスの支えとなります。本クラスターでは台風や積雪にも耐えるビニールハウスの開発や、センサー技術を活用したビニールハウス内での環境管理など工業的側面から県内農業を支えていく技術開発に取り組んでいます。本クラスターでは下記の3つの研究テーマを実施しています。

[1] 農業環境センシングシステムの開発

図7のように移動しながら観測が可能な環境センシングモバイルロボットを開発し、少ないセ

ンサーで多くの観測データの取得を目指しています。今年度は実際の農業現場での実地試験を行い、今後の検討課題を明らかにしました。

[2]災害に強いパイプハウスの開発

図8のように材料コストや施工性が同等となるようなトラス構造を基本とした新構造パイプハウスを提案しています。数値解析を行った結果、トラス構造はパイプハウスにおいても台風や積雪による倒壊対策として有効な構造であることがわかりました。

[3]農作物の樹液流測定システムの開発

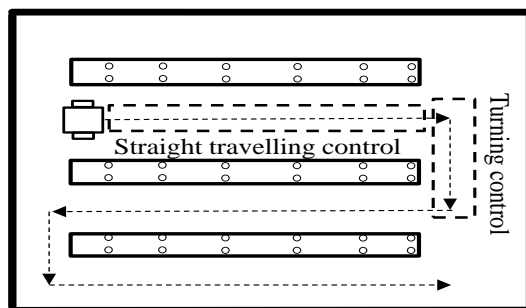
図9のように植物の育成状況を扱いやすく、安価に測定できるセンサーの開発を目指しています。これまでに試作機の製作を行い植物の樹液流の測定が可能になりました。



(a) ビニールハウス内風景

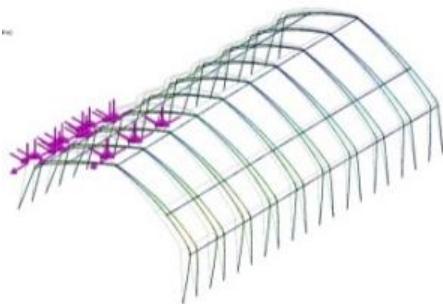


(b)環境センシングモバイルロボット



(c)ビニールハウス内移動図

図7 農業環境センシングシステムの開発



(a)ビニールハウス構造図



(b)ビニールハウス

図8 災害に強いパイプハウスの開発

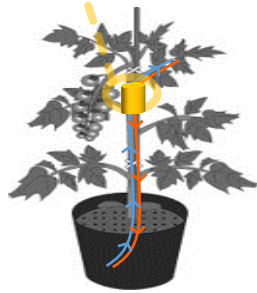
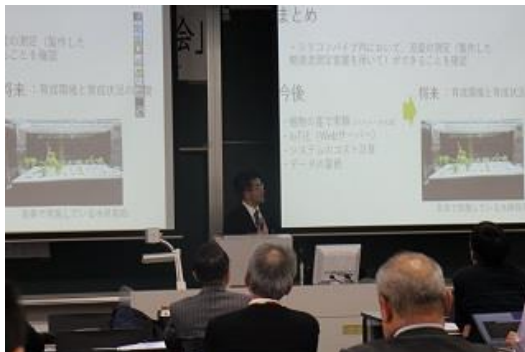


図9 樹液流測定システム設置イメージ図

[4]成果報告と今後の展開

研究成果は、第1回ならイノベーション産学官金連携報告会（開催地：帝塚山大学、2016年11月14日）、第3回TAC（営農販売専任・営農販売）担当者研修会（開催地：奈良県農業協同組合（JAならけん）農協会館、2016年11月29日）、アグリビジネス創出フェア2016（開催地：東京ビッグサイト、2016年12月14～16日）において報告を行いました。特にアグリビジネス創出フェアにおいてセンシングロボットなど奈良高専の取組みは、多くの来場者に興味を持っていただきました。

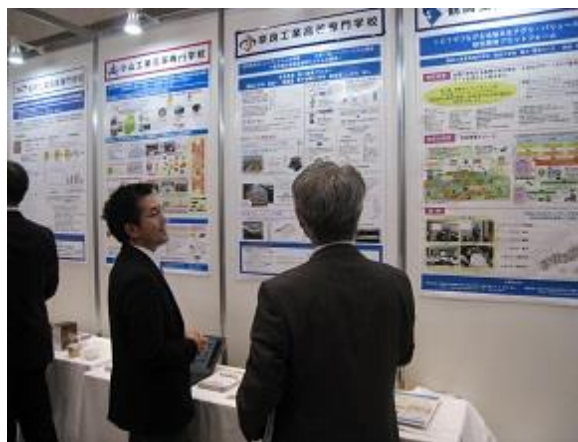
それぞれのテーマにおいて奈良県農業研究開発センターをはじめとして県内企業、研究機関との連携の強化を目指します。特に樹液流測定システムを用いた研究においては次のステップとしてセンサーの測定精度を向上し、実際の農業で使用できるシステムの構築を目指します。



(a)ならイノベーション産学官金連携報告会



(b)TAC研修会



(c)アグリビジネス創出フェア

図10 農工連携クラスターの対外発表の様子

A-3. 医工連携クラスターの活動

本クラスターは10年後の高齢化率が30%を超えると予測されている奈良県の医療現場における負担軽減を目的にしています。具体的にはガン治療の身体的・精神的負担軽減のための温熱療法（ハイパーサーミア）装置の開発と、要介護者の増加に伴う介護現場の負担を軽減するための遠隔見守りシステムの開発を行っています。

[1] 温熱療法装置の開発

インプラントの試作のために、昨年度導入した粒状材料解析コードを用いた工具設計システム（絞り加工解析）を開発構築しました。構築したシステムを用いて磁気温熱治療用インプラントの絞り加工用工具を設計し、インプラントの加工試験および試作品の作成を行いました。また、試作品の性能を評価するために発熱特性調査実験を行いました。今後、性能評価実験の結果を基に磁気温熱治療法の装置を試作していく予定です。

[2] 遠隔見守りシステムの開発

センサーモジュールと制御モジュールを設計、試作し、試作システムのハードウェア部を開発しました。ハードウェア部の試作に当たっては本校の学生にシステムに対する要求を伝え、学生が回路の設計、実装を行っています。また、済生会奈良病院様に協力していただき、介護対象者が入院する病室の環境をセンサーで試験計測しました。今後、試作した回路と病室での試験計測結果を基に、要介護者の行動から危険につながる動作を予測するシステムを試作していく予定です。

本クラスターでは今後、地域課題の解決に寄与するシステム開発を継続すると共に、問題解決型開発のプロセスを記録し、「地域創生特別研究」や他の講義における事例演習として活用する予定です。

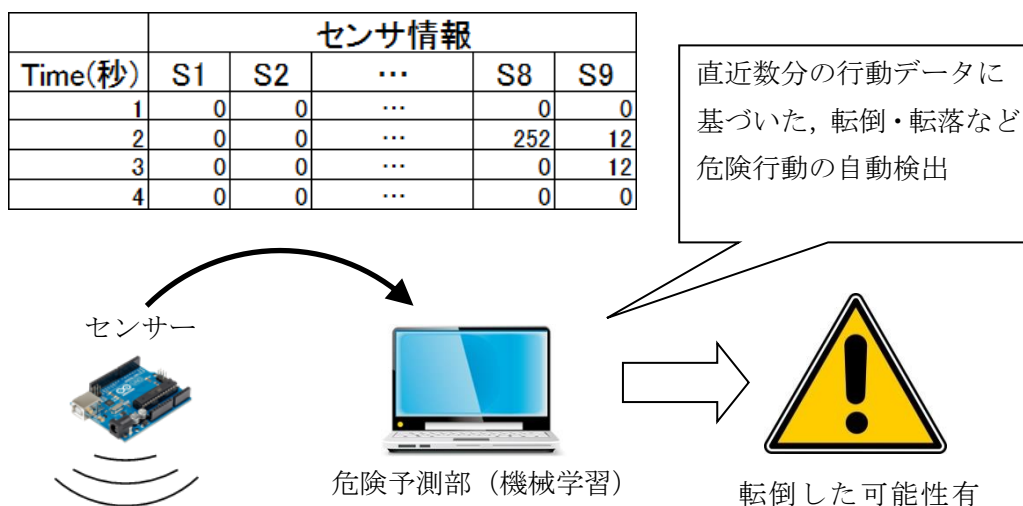


図 11 遠隔見守りシステム概念図

A-4. スマートシティクラスターの活動

山間部の多い奈良県では、分散型エネルギー社会への対応、情報通信網の充実、山間部での電力供給問題等が大きな課題となっており、それら課題に取り組むべく、下記のテーマに取り組んでおります。

[1]革新二次電池用新規電解質の開発

我が国が進める新エネルギー構想の中にある革新二次電池として金属空気二次電池に注目し、新規電解質の開発を進めています。新規電解質としては、粘土鉱物の一種であるハイドロタルサイト様化合物（層状複水酸化物、LDH）に注目し、そのイオン伝導率と伝導機構について明らかにすることで高イオン伝導率を有する新規電解質材料を開発しています。H28年度はLDHの組成に対するイオンの電気伝導度測定を行いました。

[2]小水力発電機の開発

奈良県が抱える課題の一つに山間部におけるエネルギー問題があります。吉野町や山添村では、電力の地産地消による地域活性化を目指し、水車を利用した小水力発電に取り組んでおられます。蓄えた電力は防犯灯などに利用し地域の安全に役立てる方向で検討されています。本校では、吉野小水力利用推進協議会と連携し、吉野町三茶屋地区や山添村的野地区での本取り組みに技術的支援の立場で参画し、課題解決と共に地域の皆様との交流を深め、地地域貢献を果たしてまいります。

具体的には、H28年3月に奈良県吉野郡の小水力発電機の現地視察に始まり、H28年4月には奈良市山添村的野地区において、自転車の前照灯用の発電機（ハブダイナモ）を使った小水力発電システムの構築に動き出し、設置場所の自治体および吉野小水力推進協議会と連携しながら小水力発電による電力確保に取り組んできました。H28年10月下旬には、試作機を現地に設置できました。地域の方々の間では小水力利用による再生可能エネルギー利用への関心は高まりつつあり、現在は試作機の性能向上と回収したエネルギーの利用方法の検討のために、現地の方々により発電データの記録を続けています。

本取り組みは、KCN（近鉄ケーブルネットワーク）様から取材を受け、番組で取り上げられました。（平成28年9月6日（火）AM11:00～11:30 「CATCH UP#10 電気の地産地消～小水力発電～」）



(a)水車の組立



(b)水車の設置



(c)テスト中の水車

(d)バッテリーの充電状況測定

図12 水車を利用した小水力発電の取り組みの様子

[3]交通インフラ情報の共有・統合方式の開発

奈良交通との協力のもと、奈良県内のすべてのバス停の位置情報と時刻表のデータを提供いただき、提供データをデータベース化し、今後、地域住民や観光客が簡単にバスでの移動方法を調べられるようなシステムを開発していく予定です。また、開発にあたって、学生を対象としたアイデアコンテストなどを開催し、多様な意見の収集を行う予定です。

A-5. 環境クラスターの活動

奈良県では、大学・高専・研究機関等や産業界の優れた研究開発資源を最大限に活用し、より効率的な既存産業の競争力強化や新たな産業の創出、地域における社会的課題の解決のために、重点的に研究開発を行うべき分野を設定しています。環境分野では、奈良県の住みよい環境を維持・改善するため、環境負荷を低減する技術開発を推進する必要があります。限られた資源を活用するためには、バイオマスと副産物・廃棄物の有効利用や省エネルギー化と自然エネルギー資源の利活用を推進し、併せて地域産業の活性化に寄与することが地域創生に繋がると考えられます。そこで、奈良県科学技術基本計画の重点研究テーマの一つである「廃棄物リサイクル技術の開発」に関して、奈良県産業振興総合センター、㈱タカトリと協議を行い、推進体制、取り組みスケジュール等を協議し、「環境クラスター」の基本方針を、以下のように決定しました。

- a. 亜臨界・超臨界処理（高温・高圧による処理）（奈良高専）
- b. 熱分解処理（高温による処理）（奈良県産業振興センター）
- c. 粉碎処理（機械的処理）（株式会社タカトリ）

上記の3つについて未硬化と硬化処理したCFRPの分解を検討し、分解物であるCFRPフィラーの作製を試みます。さらに、ウレタン樹脂、ポリプロピレン等の新しいプラスチックにCFRPフィラーを混ぜることで耐久性を向上させた強化プラスチックの開発を目指します。

H28 年度研究テーマ

「炭素繊維強化樹脂（CFRP）のリサイクルによる高耐久性樹脂の開発」
近年、鉄よりも強くても軽く消費が増加しているが、廃棄物リサイクルが困難な材料の一つであるCFRPについて分解方法および再利用方法を検討する。

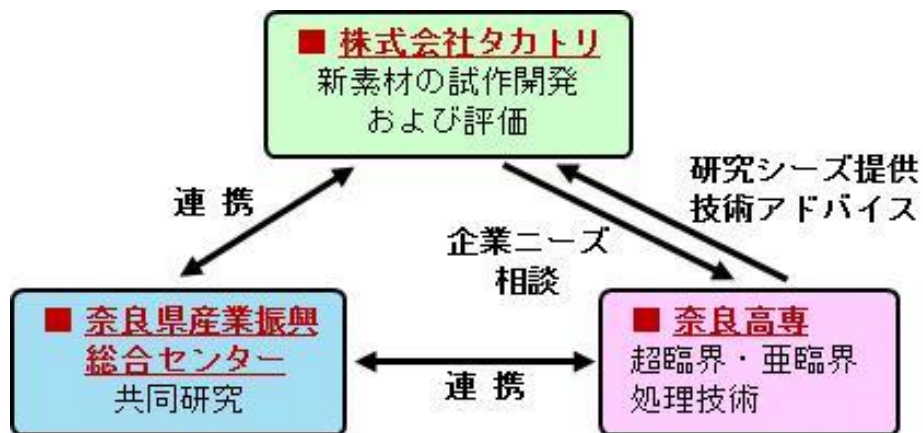
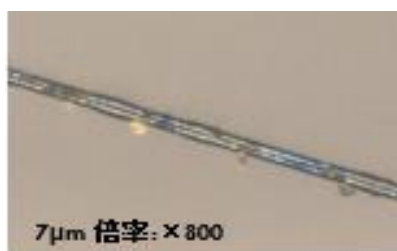


図 13 環境クラスターの関連相関図

脆性材料の高精度切断加工装置（ワイヤーソー）は、プーリーの偏摩耗によるワイヤー断線が課題であるため、リサイクルCFRPと配合して高耐久性樹脂を開発し、プーリー素材に利用することで装置の安定稼動を実現します。H28年度は超・亜臨界アルコールを用いてCFRPを処理し、溶媒種、処理温度等の操作条件がエポキシ樹脂分解に及ぼす影響について明らかにするとともに、複合強化プラスチックの最適な作製条件を検討しました。超・亜臨界流体として炭素数および構造の異なるメタノール、エタノール、1-プロパノール、2-プロパノール、1-ブタノール、ベンジルアルコールを用いた場合のエポキシ樹脂除去率は、ベンジルアルコールを除いて250℃、反応開始10minで50～80%であることが分かりました。また、処理温度を上げること、KOHを添加することで大幅に除去率が増加しました。特にベンジルアルコールは無触媒においてもほぼ100%分解が可能であり、加溶媒分解能力は十分にCFRPに応用できることが分かりました。



CFRPフィラー



ウレタン樹脂製
プーリー

図 14 CFRPフィラー

図 15 ウレタン樹脂製プーリー

B. 各種イベント等を通じた地域への奈良高専及びその研究内容のPR

本校では、県内を中心とした各種イベントや会合等へCOC+事業の一環として積極的に参画し、研究内容やCOC+事業を広く周知頂くためのPR活動に取り組んでおります。

B-1. 第3回 TAC（営農販売専任・営農販売）担当者研修会での発表

平成28年11月29日（火）、奈良県農業協同組合（JAならけん）農協会館5階大会議室で行われた『第3回 TAC（営農販売専任・営農販売）担当者研修会 第2部』において、「国立奈良工業高等専門学校での農業分野への取り組みについて」と題して、本校 機械工学科 榎 真一准教授と専攻科 機械制御工学専攻2年 揉井雅紀君（指導教員 電子制御工学科 飯田賢一教授）が発表いたしました。

地方創生推進（COC+）事業の事業協働機関である奈良県農業協同組合（JAならけん）様から、奈良県下に設置されている19箇所の経済センターに所属する「地域農業の担い手に出向くJA担当者」（TAC）の方々を対象とした研修会において、現在、本校が学内横断的に組織化した「農工連携クラスター」で取り組んでいるテーマを発表しました。

専攻科2年の揉井雅紀君より「農業の圃場環境センシングシステムの開発」についての発表がありました。日本の就農者人口の減少・就農者の高齢化問題や新規参入者が抱える問題を農作業の軽労化・生産性の向上や技術支援の面から研究アプローチし、「農作物自動運搬ロボット」・「環境センシングロボット（屋内）」・「環境センシングロボット（屋外）」の3つを柱に解決策の提案を行い、実際の評価実験等の映像を用いてわかりやすく説明しました。

続いて榎 真一准教授より「災害に強い高剛性パイプハウス」についての発表がありました。パイプハウスの簡易的な構造の二面性（農業従事者自身で施工できる点と強度が十分でない点）を挙げ、災害の少ない奈良県において、実際の台風と積雪によるパイプハウスの倒壊被害の写真を用いて、片側に偏った荷重がかかり倒壊している現状を伝えました。そのうえで、材料コストや組立性を保持した新構造パイプハウスを提案し、3次元構造解析を行うことで、台風や積雪による倒壊対策に有効な構造であることを確認した結果を説明しました。



(a) 農業の圃場環境センシングシステムの開発



(b) 災害に強い高剛性パイプハウスの開発

図1 TAC（営農販売専任・営農販売）担当者研修会での発表風景

B-2. 第1回 ならイノベーション 産学官金連携報告会での発表

奈良地域の企業と帝塚山大学、奈良県産業振興総合センター及び工業系高等教育機関がそれぞれの資源を有効活用し実用化することで奈良の産業活性化を目指す「第1回 ならイノベーション産学官金連携報告会」が、平成28年11月14日(月) 帝塚山大学 奈良・学園前キャンパスにて開催されました。この報告会に本校から機械工学科 福岡准教授が出席し、「農業環境センシングシステムの開発」と題し、研究シーズ発表を行いました。

農業用ビニールハウス（パイプハウス）のより詳細な環境情報を取得するためのモバイルロボットを使った環境センシングシステムの開発、災害に強い新構造のパイプハウスの提案、水耕ガーデン植物の土壌の温度変化を用いた植物の樹液の質量流量の測定など、現在取り組んでいる具体的なテーマについて発表を行いました。



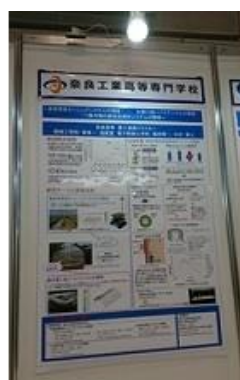
図2 第1回 ならイノベーション 産学官金連携報告会発表風景

B-3. アグリビジネス創出フェア2016への出展

全国の産学の機関が有する農林水産・食品分野などの最新の研究成果を紹介する『アグリビジネス創出フェア2016』が2016年12月14日(水)～12月16日(金)にわたり東京ビッグサイトで開催され、本校から機械工学科 福岡准教授が出展し「農工連携」の研究内容を本校ブースにて発表致しました。パネル展示を交えわかりやすくPRし、奈良県における農業の重要性に熱い思いを注ぐ本校の取り組みに対し、来場者の高い関心を集めました。



(a) 奈良高専ブースでの対応風景



(b) パネル展示

図3 アグリビジネス創出フェア2016

B-4. 超高齢社会における生活支援に向けた地域産業創出を考える研究会への参加

平成 27 年度、奈良県の補助金を活用して「超高齢社会における生活支援に向けた地域産業創出を考える会」が設立されました。今年度最初の講演会（第 4 回：平成 28 年 6 月 30 日（木）於、奈良学園大学）に本校の後藤景子校長が出席し、講演に先立つ挨拶で、現在、本校が奈良女子大学、奈良県立大学と協働で地方創生事業（COC+）に取り組んでおり、奈良県が抱える大きな課題の一つである高齢化社会問題に向けて、介護ロボットや医工連携をテーマに本校内研究シーズを結集した校内横断的な研究チーム（研究クラスター）を組織し、県内企業・団体・自治体と連携して課題解決に向けて取り組んでいる旨を紹介しました。



図 4 超高齢社会における生活支援に向けた地域産業創出を考える研究会での後藤校長の挨拶

B-5. エコフェスタ 2016 in まほろばへの出展

平成 28 年 10 月 22 日（土）に、奈良県立橿原文化会館前広場で行われた「エコフェスタ 2016 in まほろば～環境と音楽の祭典～」(主催：橿原市地球温暖化対策地域協議会)に地域イベント活性化への貢献、地域との交流深化を目的に COC+事業の一環として出展しました。この催しは、工作やゲームなどの体験コーナーや、フリーマーケット、野外ステージ、パネル展示などを通して地域住民の方々に環境を楽しみながら学んでいただく場として毎年開催されています。本校は、吉野町・山添村と連携して取り組んでいる「水車を利用した小水力発電」についてのパネル展示とともに、自転車発電の展示・実演を行いました。



図5 エコフェスタ 2016 in まほろばの会場風景

B-6. ハロウィーンパレード 2016 への参加

平成 28 年 10 月 29 日～30 日、イオンモール大和郡山にて「ハロウィーンパレード 2016」が開催され、奈良高専学生が参加しました。当日は、学生たちがそれぞれに仮装し、大勢の来店客を前に本校と「第 50 回高専祭」の P R を行いました。



図6 ハロウィーンパレード 2016 に参加した奈良高専学生

C. 『奈良高専 地域イノベーション コンソーシアム』の設立

奈良高専を地域イノベーション拠点とした活動を通じて、産学官金協働による知的創造と地域経済の活性化を目指す会員制の『奈良高専 地域イノベーション コンソーシアム』を設立しました。今後、本コンソーシアムのより実効性の高い運営を目指し、まずは会員様を拡大すべく会員募集に注力し、奈良のイノベーション拠点としての役割を本校が果たしてまいります。

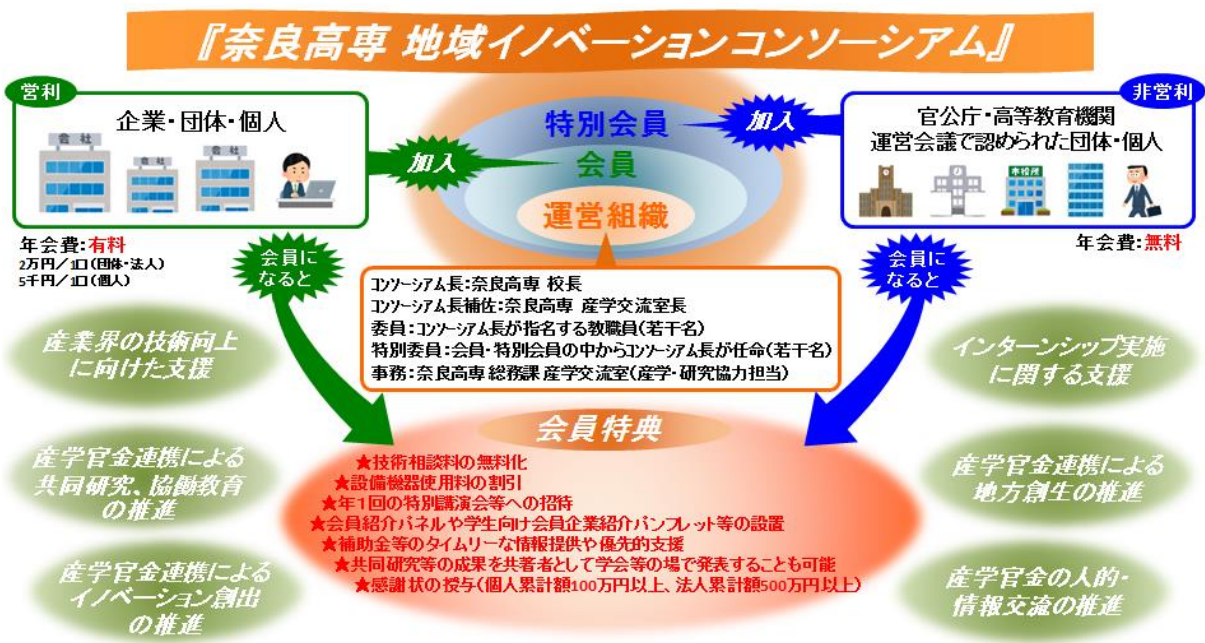


図1 奈良高専 地域イノベーション コンソーシアム概念図

奈良高専 地域イノベーションコンソーシアム新設 入会のご案内

未来を光らせる...それが思いです。



会員への特典

- (1) 技術相談料が無料となります。
- (2) 設備機器使用料が割引価格となります。
- (3) 年1回の特別講演会等へご招待いたします。
- (4) 会員紹介パネルや学生向け会員企業紹介パンフレットで貴社をPRいただけます。
- (5) 補助金等のタイムリーな情報提供(助成金など)や優先的の支援が受けられます。
- (6) 共同研究等の成果を共著者として学会等の場で発表することも可能です。
- (7) 感謝状を授与いたします。(個人 累計額100万円以上・法人 累計額500万円以上)

奈良高専 National Institute of Technology, Nara College

地(知)の拠点

奈良高専 地域イノベーションコンソーシアム 概要

●目的...本コンソーシアムは、本校を地域イノベーション拠点とした活動を通じて、産学官金協働による知的資源の創造と地域経済の活性化に資することを目的とする。

●次の事業を行う。

1. 産業界の技術向上に資する支援
2. 産学官金連携による共同研究、協働教育の推進
3. 産学官金連携によるイノベーション創出の推進
4. 産学官金連携による地方創生の推進
5. インターネット実用に関する支援
6. 産学官金の人的、情報交流の推進
7. その他本コンソーシアムの目的を達成するために必要な事項

●組織...本コンソーシアムは、次に掲げる者をもって組織する。

1. 校長(コンソーシアム長)
2. 産学交流室長
3. 教職員のうち校長が指名する者
4. 会員及び特別会員


●会費...会費は、法人10万円、個人10千円とし、入会時及び毎年度(入会年度を除く)の7月末日までに寄附金として納入するものとする。また、特別会員は、本コンソーシアムの事業に賛同する官公庁等とし、会費は免除する。

●入会のお申込み方法:

①ホームページよりお申込み
 次のwebページの申込フォームに必要事項をご記入の上、お申込みください。
<http://www.nara-k.ac.jp/contribution/innovation/info/>

②FAXにてお申込み(下の入会申込書にご記入を)

奈良工業高等専門学校 産学交流室(総務課 産学・研究協力担当)
 FAX:0743-55-6019



入会申込書

団体・法人名			
代表者氏名		職名	
会員種別	<input type="checkbox"/> 口にチェックしてください <input type="checkbox"/> 会員企業・個人 <input type="checkbox"/> 特別会員..... 官公庁、高等教育機関等 (会費は免除)		
年会費	団体・法人の場合	口数	()口 ※10万円です
	個人の場合	口数	()口 ※10千円です
連絡先住所	〒 -		
連絡(担当)責任者	氏名		所属
	TEL		FAX
	E-mail		
	※奈良工業高等専門学校地域イノベーションコンソーシアム関係の連絡以外には用いることとはございません。 こちからは同時送信を行う際にはアドレスを非表示にて送信いたします。 御担当者氏名はフルネーム若しくはOO担当(例:広報担当)をお願いします。 メールアドレスは、代表アドレス等でも構いません。		

図2 奈良高専 地域イノベーション コンソーシアム チラシ

D-2. 各種メディアへのCOC+活動のPR

COC+の活動は、表1のように各種メディアに取り上げられました。

●『文教速報』へのCOC+関連掲載

題目	掲載日
奈良高専、IoTセミナーを開催	平成28年6月10日
奈良高専の地方創生の取り組みがケーブルテレビで紹介	平成28年10月7日
地域創生授業で奈良高専「社会技術特論」を開講	平成28年11月11日
県内企業による講義を地元紙で紹介（奈良高専）	平成28年11月25日
奈良高専が地域理解教育の一環で信金と協力し「COC+政治・経済」を開講	平成28年11月30日
奈良高専教員と学生が県農協研修会で講演	平成28年12月12日
奈良高専でキャリアデザインセミナー	平成29年1月13日
地域理解教育の一環で奈良高専「COC+政治・経済」が終了	平成29年1月16日
奈良高専、県と協働で再雇用の仕組み構築	平成29年2月1日
吉野郡下市町と協力し奈良高専が社会技術特論の最終提案発表会	平成29年2月6日
奈良高専「地域イノベーションコンソーシアム」を新設	平成29年3月6日

●新聞に取り上げられたCOC+関連記事

題目	掲載日
地域に有用な人材養成へ 奈良高専と奈良中信連携 県内企業が特別講義 【奈良新聞】	平成28年11月9日
「JANAならけん」の第3回TAC研修会で奈良高専が農業分野の研究紹介 【日本農業新聞】	平成28年12月13日

●ケーブルTV局に取り上げられたCOC+取り組み

題目	放映日
吉野町、山添村と連携した水車による小水力発電の取り組み 【近鉄ケーブルネットワーク】	平成28年9月6日

表1 COC+活動の各種メディア掲載一覧

D. COC+活動の積極的な情報発信

本校が取り組んでいる様々なCOC+事業活動を広く告知していくため、ホームページを活用し随時情報発信していくと共に、各種メディアに向けた積極的な広報活動に努めております。

D-1. 本校COC+ホームページの充実

COC+専用のホームページを立ち上げています。図1のような形でホームページを公開しています。



(a) COC+関連イベント



(b) 県内自治体との交流



(c) 県内企業からの技術相談



(d) 研究クラスターの紹介



(e) 地元企業の工場見学



(f) 事業協働機関との対談

図1 COC+のホームページ

D-2. 各種メディアへのCOC+活動のPR

COC+の活動は、表1のように各種メディアに取り上げられました。

●『文教速報』へのCOC+関連掲載

題目	掲載日
奈良高专、IoTセミナーを開催	平成28年5月31日
奈良高专、地方創生の取り組みがケーブルテレビで紹介される	平成28年10月7日
奈良高专 地域創生授業として「社会技術特論を開講」	平成28年11月11日
奈良高专が地域理解教育の一環として信金と協力し「COC+政治・経済」を開講	平成28年11月30日
奈良高专 COC+政治・経済「第五回 奈良県企業による特別講義」が新聞掲載されました	平成28年11月25日
奈良高专 奈良県農業協同組合で機械工学科 榎 准教授と専攻科二年生の学生が講演	平成28年12月12日
奈良高专 「情報工学科特別講義（キャリアデザインセミナー）」を実施	平成29年1月13日
奈良高专 地域理解教育の一環としての「COC+政治・経済」を無事終了	平成29年1月16日
奈良高专 奈良県と協働で再雇用のしくみを作る	平成29年2月1日
奈良県吉野郡下市町と協力して『社会技術特論 最終提案発表会』	平成29年2月6日

●新聞に取り上げられたCOC+関連記事

題目	掲載日
「COC+政治経済」授業で奈良高专と奈良中央信用金庫が連携、県内企業が特別講義 【奈良新聞】	平成28年11月9日
「J A ならけん」の第3回T A C研修会で奈良高专が農業分野の研究紹介 【日本農業新聞】	平成28年12月13日

●ケーブルTV局に取り上げられたCOC+取り組み

題目	放映日
吉野町、山添村と連携した水車による小水力発電の取り組み 【近鉄ケーブルネットワーク】	平成28年9月6日

表1 COC+活動の各種メディア掲載一覧

③ 今後の取り組みについて

来年度以降、以下の項目について取り組み COC+事業を推進していきたいと思っております。

(1) 『地域創生マインド教育プログラム』の本格的な実施

平成29年度の専攻科改組に伴い、地域に対する友愛・地方創生への使命感を醸成する『地域創生理解科目』（地域政策入門、地域と世界の文化論）、確かな工学知識に基づく課題探究・解決能

力を養う『地域創生演習科目』（地域社会技術特論）、国際的・実践的イノベーション能力を育成する『地域創生実践科目』（地域創生工学研究）を順次実施し、地域活性化を担い、「ベンチャーマインド人材」と地域と世界を結ぶ「イノベーション創出人材」の育成を目指します。

(2) 『地域創生研究クラスター』の着実な研究成果と新たな取り組みテーマの発掘

現在、各研究クラスターで取り組んでいる研究内容の着実な進展と奈良県の課題に対応する新たな研究テーマの発掘に引き続き取り組んでまいります。

(3) 実効性ある県内雇用促進策の計画・実施

県内雇用促進に向け、引き続き奈良県企業立地推進課と連携し、新たな奈良県への誘致候補企業の発掘に向け、奈良県の雇用人材PR活動に取り組んでまいります。また、奈良県や県内企業、金融機関等とも連携し、県内企業へのインターンシップの促進、県内企業への見学ツアー企画、県内企業の魅力をPRする場の創出などに取り組んでまいります。また、奈良高専卒業生の県内再就職支援については、支援賛同企業を募り、それら企業一覧を奈良県と情報共有し、支援の実効性を高めてまいります。

(4) 『奈良高専 地域イノベーション コンソーシアム』の本格的な始動

会員拡大に取り組むと共に、組織として強固な体制づくりと会員同士がWin-Winの関係を築いていける仕組みづくりに引き続き取り組み、実効性のある組織につくり上げていきます。

(5) 県内地域産業・企業との交流深化

地元企業や自治体、金融機関、ショッピングモールなどとコラボしたイベントなどへの積極的な参画を通じ地域貢献、奈良高専のPRに取り組んでまいります。

(6) 地方創生教育の更なる環境整備

現在29年度設置に向け検討を進めている多目的利用を前提とした『地域理解資料室（仮称）』を『地域創生大講義室（仮称）』と共に地域創生授業を実践していくための基幹教室とすべく実現に向け取り組んでまいります。

(7) COC+事業の積極的なPR・情報発信

本年度、COC+関連の本校ホームページを改修しCOC+事業のPR効果拡大に取り組んできました。来年度も引き続き、ホームページでの情報発信充実を図ると共に、COC+活動の各メディアへの積極的な広報活動に取り組んでまいります。

奈良県立大学編

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)

「共創郷育：「やまと」再構築プロジェクト」において奈良県立大学の果たす役割

執筆者：奈良県立大学特任准教授 増本 貴士

本学の COC/COC+推進室のホームページに記載されている通り、文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)「共創郷育：『やまと』再構築プロジェクト」」において、本学が果たす役割は大別して下記の3点（本学 COC/COC+推進室のホームページから引用する）であり、COC+事業での本学の役割の概念図を示す。

本学は、これらの事業を実施するために、地域交流センター内に COC/COC+推進室を新たに組成した。

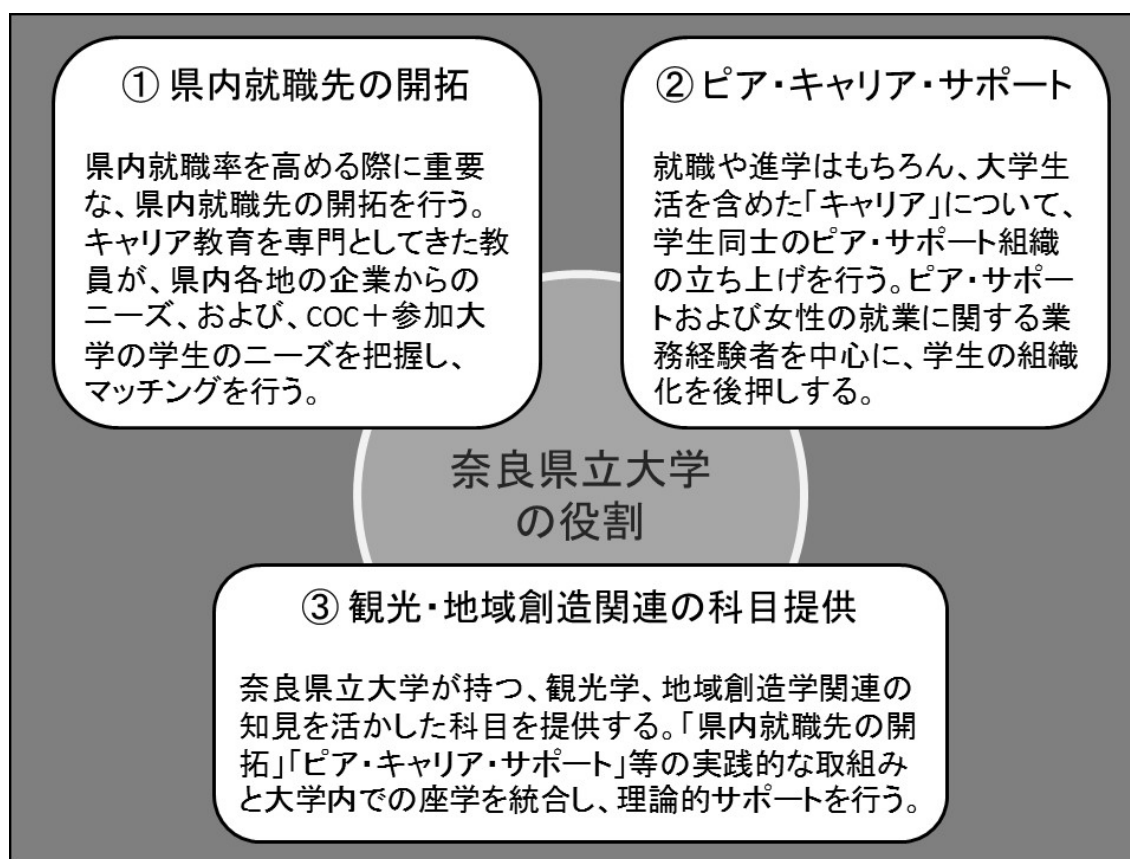


図 COC+事業での本学が果たす役割の概念図

① 県内就職先の開拓

卒業生の進路の多様性を確保するため、県内の就職先を開拓するとともに、その情報を的確に届ける仕組みを構築します。その際には、企業と学生、両者のニーズをくみ取った上での適切なマッチングが重要です。本事業は、大学における教育とキャリア支援との有機的な接続によってなされる必要があり、各大学と密に連携しながら実施していく予定です。

② ピア・キャリア・サポート

学生たちにとって、先輩や同級生の持つ体験や知識は、学生生活および進路決定にあたって重要な情報源となっています。各大学の既存のキャリア・サポートとも連携しつつ、学生同士で相談し合える場を作ります。専門のスタッフが、就職や進学はもちろん、大学生活の様々な事柄を学生同士で相談し合える相互扶助システムの構築を進めます。ピア・キャリア・サポートは、①で集めた情報の実質的な伝達を担保する機能も持っています。

③観光・地域創造関連の科目提供

奈良県立大学が持つ地域創造学、観光学、情報学などの知見を活かした科目を提供します。これは、①および②等の実践的な取組みと、大学内での座学の内容を学生が有機的に連結させるための理論的なサポートの役割を果たします。

上記の3点とその説明は本学COC/COC+推進室のホームページから引用した。これらの3本柱を担当するのが本学准教授でCOC/COC+推進室長の岡本健、以上の専任教員1名、本学特任准教授の増本貴士、本学特任講師の須川まり、本学特任講師の平侑子、以上の特任教員3名である。

後述する『やまといろプロジェクト』は本学のCOC+事業での教育(地方創生を担う人材育成)であり、特任教員3名が各プロジェクトを担当し、3つのプロジェクトが完了した。

教育（地方創生を担う人材育成）について ～『やまといろプロジェクト』で行う PBL 型教育～

執筆者：奈良県立大学特任准教授 増本 貴士

1. 本学における COC+事業での教育（地方創生を担う人材育成）

本学は、奈良県大和郡山市に本拠を置く奈良信用金庫と連携して『やまといろプロジェクト』に取り組み、その位置付けを COC+事業での教育の「地方創生を担う人材育成」とした。これには、担当教員（増本、須川、平）がゼミを持っておらず、本学での“授業”を担当していないことがあった。そのため、学生の自主的な学びを支援し、かつ、地域の連携や活性化もできることから、やまといろプロジェクトを担当することで「地方創生を担う人材育成」に合致する教育を行った。

そもそも、『やまといろプロジェクト』は、平成 23 年 10 月に本学と奈良信用金庫が締結した「地域振興についての連携協定」に基づき、学生がチームを組んで各プロジェクト主体的に取り組むことを支援するプロジェクトである。そのため、プロジェクト型学習（Project-Based Learning）でもあり、各プロジェクトの目的達成のために課題を発見・解決するので、課題解決型学習（Problem-Based Learning）ともいえる。

今年度は、やまといろプロジェクトに①砂糖傳増尾商店プロジェクト、②TV アニメ『境界の彼方』聖地巡礼プロジェクト、③奈良市ガイドブック制作プロジェクト、④奈良市観光調査プロジェクト——の 4 つのプロジェクトで取り組み、①③④のプロジェクトが今年度で完了した。各プロジェクトの具体的な内容は後述する。

なお、昨年度までは「奈良市観光振興プロジェクト」や「なら観光シンポジウム」等を共同で取り組み、本学の地域創造学部と関連の深い“観光”について、地元奈良の持つ価値の再確認や奈良のブランドの再確立を行ってきた。

2. やまといろプロジェクトの時系列的整理

平成 28 年 4 月 21 日に、本学 COC/COC+推進室長の岡本健准教授より、やまといろプロジェクトについてのブリーフィングが担当教員 3 名にあった。さらに、今年度の第 1 回やまといろプロジェクト会議において、これまで通り、奈良信用金庫のやまといろプロジェクト担当者で地域創生室の平山豊氏と日本総合研究所リサーチ・コンサルティング部門マネジャーの山本大介氏と一緒にやまといろプロジェクトを推進することとなった。この中で、前述の 4 つのプロジェクトが正式に始動し、各チームの取り組みの内容等を随時、担当教員に相談して進めるとなった。

全体的な進捗の報告では、4 月 21 日のような会議をして情報共有や担当教員以外の方からのアドバイスも必要であるため、平山氏、山本氏、本学の伊藤忠通学長に参加頂き、2 カ月に 1 回開催を目途とする「やまといろプロジェクト会議」が発足した。今年度の開催日は 6 月 15 日、8 月 8 日、9 月 27 日、11 月 8 日、12 月 19 日、1 月 19 日（平成 29 年）で、計 6 回開催された。



写真1 やまといろプロジェクト会議の様子

奈良信用金庫が地元のケーブルテレビ局 KCN（近鉄ケーブルネットワーク）に放送枠を持っていることから、8月2日と11月22日に砂糖傳増尾商店プロジェクトを採り上げた特集番組が放送された。8月2日放送分は6月30日に打ち合わせを行い、7月13日に撮影を行った。11月22日放送分は10月31日に打ち合わせを行い、11月10日に撮影を行った。さらに、奈良信用金庫が12月14日に開催した「第10回なら観光シンポジウム」で奈良市観光調査プロジェクトの中間報告をそのプロジェクトメンバーがする機会を得た。

最終的なやまといろプロジェクトの成果報告は、本学で平成29年2月11日に「産学連携『やまといろプロジェクト』成果報告シンポジウム」を開催し、完了した3つのプロジェクトの成果報告と学生パネルディスカッションで行った。



写真2 産学連携『やまといろプロジェクト』成果報告シンポジウムの様子

3. PBL で COC+事業での教育（地方創生を担う人材育成）を行う狙い

地方創生を担う人材を育成するには、最低限のこととして、①地方や地域のことを知る、②学んだことを活かして正解のないことにチャレンジする、③チームを組んで皆で最後までやり遂げる——の3点が非常に重要となる。

この3点について、指導する教員は、地元根差したPBLで教育することで「地方や地域のことを知る」ことで“現状を認識”し、これまで“学んできたことを活用”しつつ“正解のないことにチャレンジ”し、“チームで最後までやり遂げる”という社会人に求められる基礎力を学生達に身に付けてもらえると考え。すなわち、学生の内からこれらのことを育成・涵養すれば、一般的な社会人として日本の現代社会で羽ばたくことができる。さらに、地方や地域という大学を中心とした学びの場で得た知識や人的ネットワークは、その地方や地域に貢献できる人材になることができる。

一方で、学生達は課題の解決策を考え・実行する際、自分の考えを論理的かつ分かり易く相手に伝える文章にして書くことで、自分の意見・知識を定着させることができる。また、訪問先企業の担当者の話をメモしながら丁寧に聴き、相槌や質問等で話を引き出すことで傾聴力を養える。さらに、街頭調査で外国人に話しかける際に必要な語学力や踏み出す力も養える。そして、チームでプレゼンテーションを行う際や発表資料を作成する際には、チームワークやリーダーシップ、意思疎通、調整力を育成し、かつ、大学生として相応しい新たな知識の獲得もできる。

これらの狙いで、PBL で COC+事業での教育を行った。

平成 28 年度の教育（地方創生を担う人材育成）について ～砂糖傳増尾商店プロジェクト～

執筆者：奈良県立大学特任准教授 増本貴士

1. 株式会社砂糖傳増尾商店と本学学生の共同プロジェクト

5月20日、株式会社砂糖傳増尾商店紀寺支店にて、本学学生2名が「砂糖傳増尾商店様との共同プロジェクト草案」のプレゼンテーションを行い、担当者の評価を頂いた。今後、共同プロジェクトに積極的かつ迅速に取り組み、成功するように推進することで一致した。

増尾商店は、安政元年（1854年）より甘味を取扱う奈良の伝統的老舗で、学生2名によるプレゼンテーションは、“状況分析”、“新商品の顧客のターゲティング”、“新商品のコンセプト設定”等、大学の授業で学んだことを活用したものであった。学生達の提案は担当の方々に「ぜひ、この提案で取り組みを進めたい。若い女子学生さんの考えや感性で、新商品の開発に取り組みたい」と評価され、提案内容を増尾商店の協力のもと、共同プロジェクトの実現、成功を目指して取り組むこととなった。

特に、女性スタッフと「若い女性が喜ぶ商品」「女性ならではの商品」をコンセプトに、“自然かつ有機で高品質な商品”の企画会議を開催する準備を進め、増尾商店の商品「こんふえいとう」の組み合わせ商品（奈良こんふえいとうセット）、アイシングクッキーを販売することになった。各商品は“奈良らしさ”、“季節感を意識”、“可愛らしいデザイン”、“幅広い年齢層に合わせた味”、“味の組み合わせ”を意識した。

奈良こんふえいとうセットでは、包材の選定、包材メーカーとの交渉、セット内容（味）の検討、販売期間・価格の確定等を女性スタッフと打ち合わせた。販売価格は648円（税込）で、「黒糖/煎茶/もみじ」「ブルーベリー/梅/もみじ」「米飴/ほうじ茶/もみじ」をそれぞれセットにして販売した。



写真1 奈良こんふえいとうセット

アイシングクッキーでは、デザインの考案・選定、セット内容の検討、販売期間や価格の確定、

包材の確定と発注、外注先の決定と依頼等を女性スタッフと打ち合わせた。販売価格は 918 円（税込）で、アイシングクッキー1 枚、マドレーヌ 1 個、ごまサブレ 2 枚をセットとして販売した。なお、アイシングクッキー、マドレーヌ、ごまサブレの製造は奈良市のパティスリー・ママロール社が行った。



写真2 アイシングクッキー詰め合わせ



写真3 アイシングクッキーのセット内容

下記に、おおまかな実施スケジュールを示す。

4月12日：砂糖傳増尾商店様との初めての打ち合わせ

5月20日：本プロジェクトについてのプレゼンテーション

6月～7月：1週間に1回程度、紀寺支店にて打ち合わせや店舗販売の準備
やまといろプロジェクト会議に出席し、進捗状況を報告

8月～9月8日：アイシングクッキー、“奈良こんふえいと”の詰め作業

9月9日～10月16日：販売期間、学生は土日祝を中心に本店にて店頭販売を行う

学生達は、販売促進活動を行い、KCNのTV取材（7月13日、11月10日）、本学オープンキャンパスでの告知（8月6日）、TwitterやInstagramによる情報発信（8月～）を行った。

株式会社砂糖傳増尾商店様×奈良県立大学

商品開発プロジェクト



◆プロジェクトの目的

産学連携で、奈良市の女性を主なターゲットとして砂糖傳増尾商店様の商品の販売促進を行うことを目的に活動しています。

◆プロジェクト概要

砂糖傳増尾商店様で9月に売り出す新商品として、奈良県立大学の学生2人が、アイシングクッキーのデザインの考案、並びに人気商品である“奈良こんふえいと”のセット販売、宣伝方法の企画をしています。

◆販売期間

平成28年9月9日～10月中旬までを予定

◆アイシングクッキーのデザイン(製作:ママロール様)

鹿柄

ハロウィン猫柄

大仏柄



◆これまでの取り組み

6月以降、週に1回砂糖傳増尾商店紀寺支店様に赴き、打ち合わせを行っています。
デザインに関する話し合いだけでなく、パッケージの選定、“奈良こんふえいと”の味の組み合わせ等の話し合いにも参加させていただいています！



◆今後の取り組み

- ・SNS(Twitter, Instagram)等での広報
- ・アイシングクッキーと“奈良こんふえいと”の袋詰め作業の手伝い
- ・商品を店頭で並べる際のレイアウトの考案やPOPの作成
- ・発売後は、週に2回ほど店頭販売に立ち合わせていただく予定です！

写真4 オープンキャンパスでのポスター

販売期間終了後、増尾商店から「2商品とも利益がきちんと出ていた」との連絡があり、“赤字を出さない”という最低限の目標はクリアできた。学生達は販売終了後に振り返りを行い、下記の4点を問題点として列挙し、その解決を模索した。

- ①他の商品の売上は、コラボ商品の販売期間中と期間外とで大きな差はなかった
→普段販売している商品+コラボ商品 で販売する

- ②アイシングクッキーや奈良こんふえいとセットのデザインは好評だった
→しかし、購買にはつながりにくかったので、原価や販売価格等を見直す
- ③アイシングクッキーのセットの購買層は主に年配の方であった
→プレゼント用に購入？若い層には価格が高すぎた？
- ④奈良こんふえいとセットに関して、「味は選べないのか」という声があった
→店内で試食して好みを見つけることができるので、安さだけでなく気に入った味を選べる自由度も必要と考える

また、大きな課題設定もあり、その解決方法を模索した。

- ⑤目的(若年層の顧客獲得)に合わせた広報活動と価格設定
→SNSにおいて商品をピックアップしすぎたので、店舗そのものの紹介をすることで知名度を上げるなど、方法を考えるべき
→価格(特にアイシングクッキー)が若年層にとっては高すぎたので、セットではなく単品にして単価を下げるなどすれば手に取りやすいのではないか
- ⑥売り場に合った商品の提案
→アイシングクッキーのセットは、年配の方が多いのであれば、プレゼント用としてオススメする
→奈良こんふえいとセットは、好みの味を選べるようにする

平成 29 年 2 月 11 日に開催した「産学連携『やまといろプロジェクト』成果報告シンポジウム」では、砂糖傳増尾商店プロジェクトも今年度終了ということで成果報告を行った。



写真5 学生の報告の様子

2. 砂糖傳増尾商店プロジェクトの目的とその評価

砂糖傳増尾商店プロジェクトは、奈良県下の企業様と連携することで、学生が企業や業種・職種を知り、かつ、学生の「主体性」「実行力」「課題発見力」「課題解決力」等の社会で必要とされる力を育成・涵養することを目的としている。やまといろプロジェクト内のひとつのプロジェクトであるので、奈良信用金庫の平山豊氏から講評を頂き、「このプロジェクトで学んだことは社会人になってからも大いに役立つものであり、社会から求められる力が身に付いているので、自信を持って今後の人生を歩んで欲しい」との評価を得た。

奈良市ガイドブック制作プロジェクト活動報告

－平成28年度やまといろプロジェクト－

執筆者：奈良県立大学特任講師 須川 まり

I. 本プロジェクト概要

学生主体で、奈良市の魅力を伝えるためのガイドブックを企画・制作・配布まで実施した。平成26-27年度には、冊子「やまといろ」を年度ごとに3種類制作されたが、平成28年度は、新たにテーマを設定し、1冊の折り込み形式のマップ付きガイドブックを完成させた。以下、活動内容をまとめている。

II. 参加メンバー

奈良県立大学 2年次生3名、3年次生1名

III. 制作物

A5サイズの冊子(38ページ)、B4サイズのマップ(折り込み形式)

IV. 活動スケジュール

5月下旬～ ガイドブック全体のテーマ設定のための会議を数回実施。
様々なタイプのガイドブックを比較分析。

7月～ おおよそのコンセプトが決定。
各自で特集を組み、特集のテーマに沿った取材先選定。

8月～ 取材可能か営業・交渉。取材活動開始。
記事作成・編集作業を開始。

11月下旬 入校・印刷

12月～ ガイドブック完成。配布先選定。

1月～ ガイドブック配布開始。

2月末 コラボ企画の応募締め切り。

V. 本プロジェクトの概要～途中経過報告

(ポスター発表：8月6日奈良県立大学オープンキャンパスにて)

奈良市ガイドブック制作プロジェクト

COC/COC+推進室 特任講師 須川 まり

1. 奈良市ガイドブック制作プロジェクトの概要

本学の学生(2-3年生4人)が、様々なガイドブックを研究した上で、学生目線から奈良市の魅力を発見できるようなガイドブックを制作します。どのような情報をどのような観点から提示すべきか比較分析し、企画からデザインまでガイドブック制作の一連の作業を行います。完成したガイドブックは、学内外に配布します。

2. ガイドブックの目的とは？

奈良市ガイドブック制作プロジェクトは、若い学生の目線から、奈良市の魅力に気づくことができるようなガイドブックを目指しています。奈良市には、少し視点を変えるだけで、若者が楽しめる名所やお店がいくつも存在しますが、その存在は多くの学生にあまり知られていません。ガイドブックでは、奈良県立大学からそれほど遠くないエリア(ならまち等)を中心に、有名名所の意外な楽しみ方や穴場を紹介する予定です。参加学生は、奈良市をもっと好きになってほしいという思いで取り組んでいます。

3. ガイドブックのターゲットとは？

＜対象＞奈良市を少し知っている人。奈良市の魅力をもっと知りたい人。放課後、奈良で過ごさずにすぐ他府県に帰ってしまう本学の学生。

一般的なガイドブックのように、初めて奈良市を訪れる観光客を想定したものではありません。もっと奈良市を知りたい、あるいは知ってもらいたい人々に向けたものです。

4. ガイドブックのテーマ「ベタ&マニアック」

他府県から来た知人・友人に対して、奈良市の有名名所を楽しく案内するための「ベタ」編と、それぞれのマニアックなテーマに沿って奈良市を楽しむ「マニアック」編という、2つの要素を融合させたガイドブックを企画中です。

★マニアック編:各自で「マニアック」編の数ページを担当し、自分自身も楽しめる「マニアックな特集」を企画しています。現在、他の学生と意見を交わしながら、企画・取材内容を深めています。
例. 古墳、放課後の女子会

★ベタ編:有名名所を少し変わった角度から楽しんでもらえる情報やルートを提示する予定です。

5. 活動内容

参加学生は、様々なガイドブックを分析した上で、各自で企画書や取材方法、誌面の扱いに至るまでを企画立案し、実際に現地調査やインタビュー調査に赴きます。収集した情報をもとに、ガイドブックの編集デザイン作業に取りかかります。



写真①②③ 活動の様子

※ホワイトボードやノートに意見を書き込みながら、ディスカッション形式で進めています

図④ 議事録

※レジュメ作成の練習のために学生が会議内容を記録しています

VI. ガイドブックの内容

1. ガイドブックのタイトル

「奈良にいるなら知っときたい！ベタな奈良。マニアックな奈良。－奈良市内」

2. ガイドブックのターゲット層

奈良を少し知っている人（奈良に通勤/通学している人、関西圏に暮らす人）

3. ガイドブックのコンセプト

ベタ企画とマニアック企画の両方を設け、奈良の魅力を様々な角度から楽しむように構成されている。

- ・ベタ企画：奈良のベタな場所をより楽しむための特集を設けている。
- ・マニアック企画：各参加学生が関心のあるテーマから奈良の魅力を探るために、5つの特集を設けている。（詳細は後述する）。

4. ガイドブックの表紙（おもて左・うら右）



5つの特集を5つのカラー（緑、黄、朱、ピンク、青）に色分けした。詳細は次ページで紹介する。

VII. ガイドブックの体裁

1. 平成 26-27 年度：店舗紹介の冊子「やまといろ」

サイズ：正方形（約 15×15cm）

種類：3 種類ずつ

※平成 26 年度：赤、青、黄 平成 27 年度：橙、緑、紫



2. 平成 28 年度：ガイドブック「奈良にいるなら知っときたい！ベタな奈良。マニアックな奈良。－奈良市内」

サイズ：本体冊子 A5 サイズ（14.8×21cm）

折り込み形式のマップ B4 サイズ（25.7×36.4cm）

種類：1 種類



VIII. ガイドブックの構成

ベタ企画（1 特集）とマニアック企画（5 特集）を 6-8 ページずつ紹介している。5 つの特集に統一感を持たせるために、各特集に該当する時代を設定し、時代の流れに沿って奈良市に関する様々なテーマを楽しめる構成にしている。

1. ベタ企画

「鹿+奈良公園」特集～奈良時代：奈良のベタなイメージである鹿と奈良市の歴史、鹿との遊び方などを紹介。

2. マニアック企画

- ①「古墳」特集～古墳時代：奈良市の古墳と古墳関連グッズを扱う店舗を紹介。
- ②「外食」特集～明治時代：明治時代に誕生した富雄地区周辺に焦点を当て、富雄がラーメン街であることからラーメン店と、そして、氷の聖地と呼ばれる奈良市の歴史を踏まえてかき氷店を紹介している。
- ③「女子会」特集～現代①：放課後や休日に女子会で利用しやすい店舗を取材し、利用者（女子大生）の目線から、奈良での遊び方を紹介。
- ④「アイドル」特集～現代②：奈良のご当地アイドル Le Siana（ルシヤナ）を通して、新たな奈良の魅力を発掘し、アイドルの目線から奈良の楽しみ方を紹介。

※右図は目次ページである。

ベタ企画とマニアック企画で区切り、時代を現代まで追っていくような流れにしている。

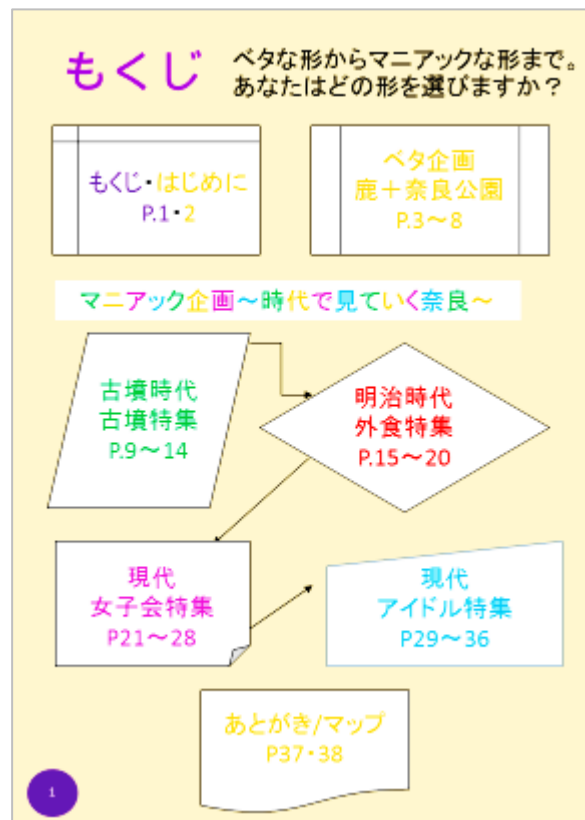
⇒ 各特集を黄、緑、赤、ピンク、青に色分けしている。

<ベタ企画>

- ・鹿+奈良公園：奈良時代、黄色

<マニアック企画>

- ・古墳：古墳時代、緑
- ・外食：明治時代、赤
- ・女子会：現代①、ピンク
- ・アイドル：現代②、青



IX. 各特集の内容について

1. 「鹿+奈良公園」特集 (3-8 ページ) : 奈良時代、テーマカラー黄色

<構成>

- ・鹿の歴史 (右図※半ページ)
- ・鹿との遊び方
- ・鹿の居場所と性格

ベタ企画『鹿+奈良公園』特集

鹿の歴史

奈良の鹿の歴史は奈良時代にまで遡ります！鹿さんたちの生い立ちに注目☆

①奈良時代 神様同様の動物

- ・奈城の鹿嶋神社よりタケミカヅチの大神様が御園山に來られた。→その神にお召し越された乗り物が鹿だった！
- ・また、春日様と鹿は深い縁で結ばれている。→古くより「神鹿」として尊ばれてきた。

<奈良時代の人々にとっての鹿とは>

- ・鹿は神様同様の存在であった！
- ・春日様・春日大社との交流が深い！！

②平安・鎌倉時代 神鹿の誕生

- ・春日詣りとき、鹿と遭遇することは減りませんでした。鹿と遭遇することはめでたいことであり、下乗して拝礼を行っていた。
- ・鹿の数は現代よりも少なかったため、なかなか遭遇できなかった。

当時の人々にとって
私は、
神聖化されていたの！
そして、春日大社とも
交流が深かったの！



2. 「古墳」特集 (9-14 ページ) : 古墳時代、テーマカラー緑

<構成>

- ・古墳マップ
- ・古墳に行く前に。(右図)
- ・おすすめ!!奈良市の古墳
- ・古墳をもっと楽しむ！お店

古墳に行く前に。

奈良市の古墳って？

・古墳時代前期～中期の巨大古墳群
佐紀郡列古墳群(または佐紀古墳群)と呼ばれる古墳群が平城宮跡北側にあります。全長200mを超える大きな古墳もあります！基本的に大きい古墳ほど位が深いとされており、この形に王権があったと考えられています。

・穴場スポット！？
多くの古墳が人通りの少ない住宅街にあるため、静かな環境でじっくりと回ることができます。自然に癒される人もいます。また、暗い道もあるので夜は要注意です。

古墳の楽しみ方

・築造された古墳の形を想像
古墳は緑色のイメージがありますが、元は一面に石が積まれており、灰色でした。周溝にも水が溜まっていなかった。昔はどんな風景だったのか想像してみてください。

・墳丘の高さで築造時期を見分ける
前方部が円形部と同じくらいの高さであれば、古墳時代中期に築造されたものです。奈良市の古墳は中期のものが多く比べることは難しいかもしれませんが、ぜひじっくりと観察してみてください。

・古墳はお墓です。マナーは忘れずに！

古墳の構造を知ろう

ここでは、一番多く登場する前方後円墳について紹介します。

- 前方部: 遺出し、中期前半から造られたもの
- 後円部: 墓石、墳丘の斜面に敷き詰められた石
- 外堤: 周溝の外側に盛り土された部分
- 周溝: 古墳の周囲を巡る壕、元は空堀であったが、後世貯水に利用された
- 内方外円区画: 埴輪や土器などを並べ、祭祀を行った場所

※参考文献: 奈良県国史館『国史館から見た奈良市史(2005)』

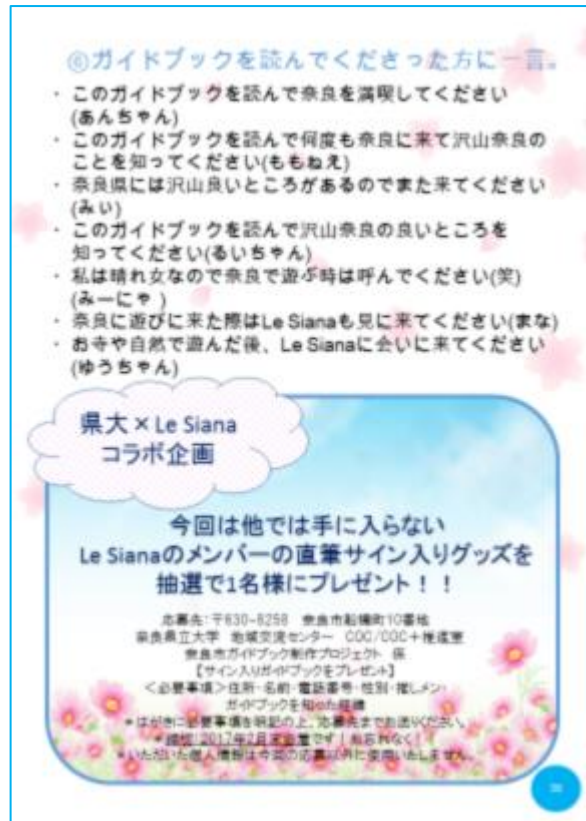
3. 「外食」特集 (15-20 ページ) ~富雄き氷と中華そば: 明治時代、テーマカラ

の か
一 赤

<構成>

- ・歴史
- ・かき氷にまつわる行事
- ・かき氷の店舗紹介
- ・中華そば激戦区 富雄 簡易 MAP
- ・中華そばの店舗紹介
- ・明治時代食事処 MAP

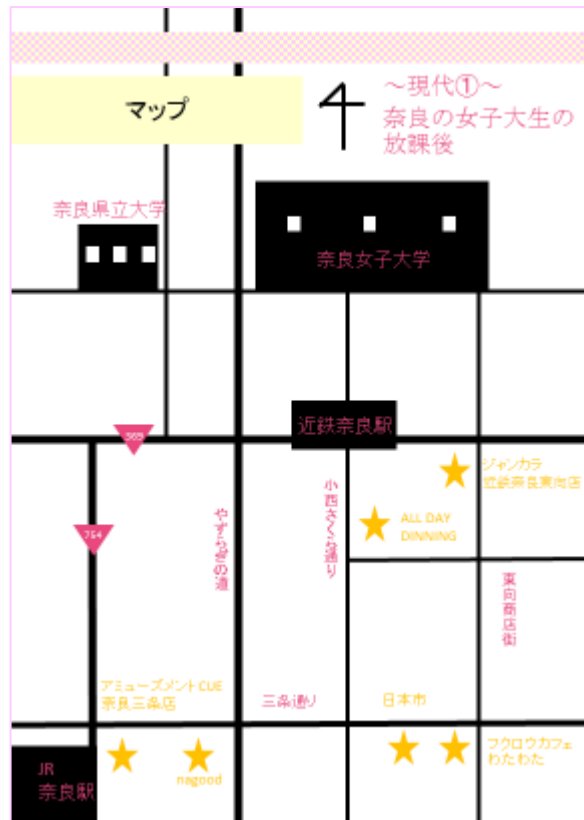
4. 「女子会」特集 (21-8 ページ) ~奈良女子大生の放課後：現代①、テーマカランク



良の
一ピ

<構成>

- ・女子会マップ (右図)
- ・基本情報
- ・店舗紹介



Le
ラー

5. 「アイドル」特集 (29-36 ページ) ~Siana に会いに行こう：現代②、テーマカ青

<構成>

- ・Le Siana のプロフィール

- Le Siana マップ
- Le Siana おすすめスポット
- Le Siana のイベントレポ
- Le Siana に教えてもらう奈良市の魅力（インタビュー）

6. B4 サイズのマップ（折り込み形式）

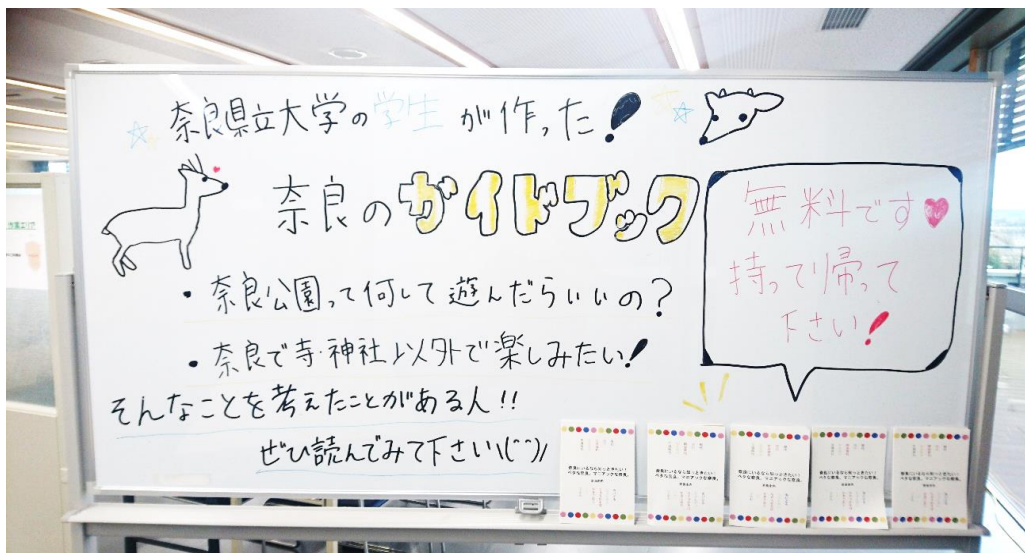
5つの特集をマークで表示し、ガイドブック全体のオリジナルマップ「奈良市 マニアックなマップ」にまとめた。



X. ガイドブック配布活動の様子

1. 主な配布場所：なら観光シンポジウム（平成 28 年 12 月 14 日開催）、産学連携『やまといろプロジェクト』成果報告シンポジウム（平成 29 年 2 月 11 日開催）、奈良県立大学、取材店舗、観光案内所（奈良市観光協会）など。

地域交流棟 3 階（耐震工事による、一時的な生協の食堂スペース※平成 28 年 10 月から 2 月末頃まで）、仮設食堂と COC/COC+推進室作業スペースとの間の仕切りを利用。



2. POP の例

配布の際に、手にとってもらいやすくするための工夫として、手書きで各配布場所に合わせて、POPを作成。

XI. 2月11日開催された、産学連携『やまといろプロジェクト』シンポジウムにて成果報告発表

- ・学生がパワーポイントを使って発表。
- ・パネルディスカッションに登壇。



写真 学生発表中の様子

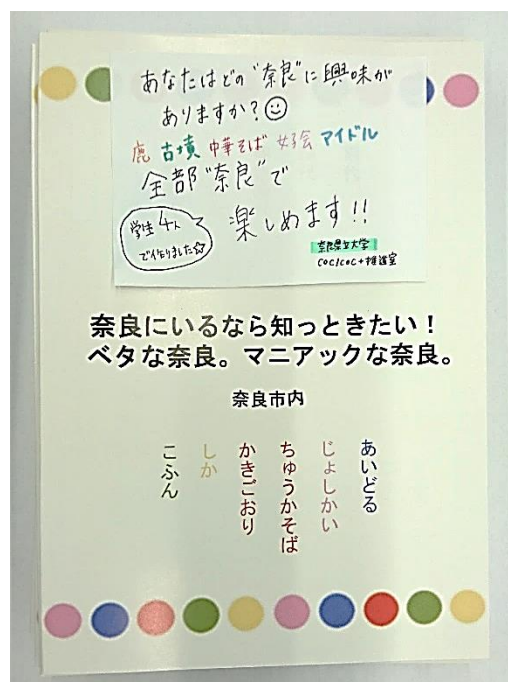
奈良市観光調査プロジェクト実施報告

執筆者：奈良県立大学特任講師 平 侑子

1. 概要

本プロジェクトは、学生が自らの興味をもとに奈良市の観光に関する質問紙調査を実施し、明らかになった調査結果をもとに、政策提言をするものである。

本プロジェクトには、ポスター掲示（資料1）や専任教員による呼びかけをきっかけに、1年次生から4年次生まで計16名の学生が参加した。各々の興味をもとに、5グループに分けてグループ単位での活動を行った。観光の観点から奈良に関する知見を深めるとともに、資料の作り方やグループでの取り組みの仕方、発表の仕方を学び、今後の学生・社会人生活に役立てる能力を養うことを活動の目的とした。



2. スケジュール

本プロジェクトは、平成28年7月から平成29年2月まで8ヶ月間にわたって実施された。実施の流れを表1に示す。基本的に1~2ヶ月に1回行われる奈良信用金庫との会議にて進捗状況を発表し、アドバイスを受けながら次の活動へ繋げている。

プロジェクトを開始したのは7月上旬である。参加者の顔合わせを含めたオリエンテーション

を実施し、参加学生が奈良市の観光に抱いている印象や、自分が観光をする時のこだわり等を話した。その後、興味の近い者同士で5つのグループ（「土産物」「情報収集」「移動・ルート」「観光目的」「魅力・イメージ」）に分かれ、8月中旬までにグループごとに先行研究や既存のデータを収集した。各グループから1〜2問ずつ質問を用意し、それを持ち寄って共通の質問紙を完成させた（資料2）。なお、下調べの段階で7月27日には、奈良市観光協会の鷺見哲男専務理事に大学内で講演（「奈良の観光の現状と課題について」）をお願いし、活発な質疑応答を行った。

調査は、8月24〜26日、29〜31日の計6日間実施した。9月には日本総合研究所に打ち込みと簡易集計を依頼し、10月より考察・発表準備を進めた。12月14日には、情報収集グループが「なら観光シンポジウム」にて調査結果の発表をし、翌年2月11日には「産学連携『やまといろプロジェクト』成果報告シンポジウム」にて、他の4グループが成果を発表した。

表1. 奈良市観光調査プロジェクト実施の流れ

日時	内容
6月15日(水) 16時半～	奈良信用金庫との会議①
7月6日(水) 1限	初回顔合わせ・オリエンテーション(8名)
7月6日(水) 5限	初回顔合わせ・オリエンテーション(2名)
7月7日(木) 1限	初回顔合わせ・オリエンテーション(1名)
7月7日(木) 5限	初回顔合わせ・オリエンテーション(5名)
7月12日(火) 16時半～	奈良信用金庫との会議②
7月13日(水) 9時～	グループ分け発表・テレビ取材
7月19日(火) 2限	グループ会議(移動・ルート①)
7月19日(火) 5限	グループ会議(情報収集①)
7月20日(水) 昼休み	グループ会議(観光目的①)
7月21日(木) 4限	グループ会議(土産物①)
7月25日(火) 昼休み	グループ会議(魅力・イメージ①)
7月26日(水) 2限	グループ会議(移動・ルート②)
7月26日(水) 昼休み	グループ会議(観光目的②)
7月26日(水) 5限	グループ会議(土産物②)
7月27日(水) 1限	観光協会鷺見専務理事による講演
7月27日(木) 2限	グループ会議(情報収集②)
8月2日(火) 5限	グループ会議(土産物③)
8月4日(木) 2限	グループ会議(移動・ルート③)
8月6日(土)	オープンキャンパスにて経過報告(※資料3)
8月8日(月) 15時～	奈良信用金庫との会議③
8月10日(水) 4限	グループ会議(情報収集③)
8月22日(月) 1限	調査前説明会①
8月22日(月) 3限	調査前説明会②
8月23日(火) 3限	調査前説明会③
8月24日～26日 9時～17時	調査実施
8月29日～31日 9時～17時	調査実施
9月27日(火) 9時～	奈良信用金庫との会議④
10月17日(月) 3限	グループ会議(観光目的③)
10月18日(火) 2限	グループ会議(情報収集④)
10月19日(水) 1限	グループ会議(土産物④)
10月20日(木) 昼休み	グループ会議(魅力・イメージ②)
10月26日(水) 昼休み	グループ会議(魅力・イメージ③)
10月27日(木) 1限	グループ会議(土産物⑤)
10月27日(木) 2限	グループ会議(移動・ルート④)

10月27日(木) 5限	グループ会議(観光目的④)
11月8日(火) 16時半～	奈良信用金庫との会議⑤
11月10日(木) 2限	テレビ取材
11月22日(火) 2限	グループ会議(情報収集⑤)
11月28日(月) 3限	グループ会議(観光目的⑤)
11月29日(火) 1限	グループ会議(土産物⑥)
12月1日(木) 2限	グループ会議(移動・ルート⑤)
12月6日(火) 2限	グループ会議(情報収集⑥)
12月6日(火) 昼休み	グループ会議(魅力・イメージ④)
12月12日(月) 3限	グループ会議(観光目的⑥)
12月13日(火) 2限	グループ会議(情報収集⑦)
12月14日(水) 1限	グループ会議(土産物⑦)
12月14日(水) 昼休み	グループ会議(魅力・イメージ⑤)
12月14日(水) 13時半～	なら観光シンポジウムで発表
12月15日(水) 2限	グループ会議(移動・ルート⑥)
12月20日(火) 昼休み	グループ会議(魅力・イメージ⑥)
12月22日(木) 2限	グループ会議(移動・ルート⑦)
12月26日(月) 3限	グループ会議(観光目的⑦)
1月19日(木) 16時半～	奈良信用金庫との会議⑥
1月25日(水) 1限	グループ会議(土産物⑧)
1月26日(木) 2限	グループ会議(移動・ルート⑧)
1月31日(火) 3限	グループ会議(移動・ルート⑨)
2月2日(木) 2限	グループ会議(移動・ルート⑩)
2月2日(木) 2限～4限	グループ会議(観光目的⑧)
2月7日(火) 2限	グループ会議(観光目的⑨)
2月8日(水) 2限	グループ会議(魅力・イメージ⑦)
2月8日(水) 2限	グループ会議(観光目的⑩)
2月9日(木) 1限	グループ会議(土産物⑨)
2月11日(土) 13時～17時	産学連携「やまといろプロジェクト」成果報告シンポジウムにて発表

3. 調査の様子

調査は8月24～26日、29～31日の平日6日間、各日10時～17時まで実施した。調査中はグループに関係なく、学生が各々都合の良い日時に参加した。実施場所は、JR奈良駅前の奈良市総合案内所周辺と近鉄奈良駅前の行基広場の2カ所である。

学生が自ら駅前を歩く観光客に声をかけ、回答を依頼した（写真1）。参加学生は初日は緊張している様子だったが、次第に一人で次々と外国人観光客にも声をかけるようになり、合計で500枚以上の質問紙を回収した。



写真1. 調査の様子①

4. 成果発表

5グループのうち、情報収集グループは12月14日に開催された「なら観光シンポジウム」（奈良信用金庫・奈良県立大学主催）において、観光客の情報収集におけるSNS利用の可能性について発表した（写真2）。また、土産物グループが購買意欲をそそる奈良土産に関して鹿と鹿のキャラクターについて、移動・ルートグループは奈良市を訪れる観光客の宿泊動向と奈良の滞在型観光の可能性について、観光目的グループは奈良市における体験型観光への期待と実情について、魅力・イメージグループは奈良市を訪れる観光客の食事への期待・満足度の関係について、2月11日に開催された「産学連携『やまといろプロジェクト』成果報告シンポジウム」にて発表した（写真3）。



写真2. なら観光シンポジウムでの発表



写真3. 産学連携「やまといろプロジェクト」成果報告シンポジウムでの発表

資料1：プロジェクト参加者募集ポスター

君は奈良をどれほど知っているか

奈良市観光調査プロジェクト

このプロジェクトは、奈良市観光協会へヒアリング調査をしたり、奈良を訪れる観光客に向けて質問紙調査(アンケート)をすることで、奈良の観光の実態や観光満足度を知ろうというプロジェクトです。

奈良で働く社会人や奈良を訪れる観光客など、多くの人とふれあいながら、奈良について調べてみよう。

興味がある方は、下記の連絡先へお気軽にメールをお送り下さい。

奈良信用金庫・奈良市観光協会との共同プロジェクト！



卒業研究で質問紙調査(アンケート)を実施する予定の人、アンケートに興味がある人、この機会に経験を積んでおこう！

調査のテーマ決定から集計結果の考察まで、ピア・キャリア・サポートの担当教員がしっかりレクチャーしますので、はじめの一歩として最適です。安心してご参加ください。

このプロジェクトはフィールドワークとしての参加も可能です。
一風変わったフィールドワークを体験しませんか？

COC/COC+推進室 ピア・キャリア・サポート担当		<利用時間>
		毎週月～金曜 9:00～17:00
<連絡先>	須川まり(すがわ・まり) sugawa@narapu.ac.jp	(場所)
	平橋子(たいら・ゆうこ) tara@narapu.ac.jp	地域交流センター

10-1. 今回の旅行で購入した土産品の中で気に入ったものを1つ教えてください。購入しなかった場合は選択肢を買わなかったに☑を入れてください。

記入例) クッキー、キーホルダー、タオル等

土産品() ⇒問10-2へ

買わなかった ⇒問11へ

10-2. 問10-1で答えた土産品には、イラストや写真などで下記のものがかかれていましたか? 当てはまるものをすべてにチェックしてください。

- 鹿
- 奈良絵
- 奈良漬
- 奈良漬
- 社寺仏閣
- 古墳
- まんとくん
- 葛
- その他()
- 特になし

- 大仏
- 柁の葉寿司
- 柁
- 阿修羅像
- せんとくん
- しまろくん
- 大和茶

11-1. 下記の中で、今回の奈良観光で満足したこと、不満に思ったことは何ですか? (それぞれ複数回答可)

- a. 歴史的建造物・社寺仏閣
- b. 博物館・美術館
- c. 奈良公園の鹿
- d. 食事
- e. 登山・ハイキング
- f. イベント()
- g. 交通網
- h. 独特の町並み・雰囲気
- i. 奈良らしい体験・記憶に残る経験
- j. バリアフリー環境の整備度
- k. その他()
- l. 特になし

- 満足した点
- (不満だった点)

地方にお聞きし市の旅行情報中で、役に立つ情報(複数回答可)

11-2. 奈良での観光について、観光を始める前ほどの程度期待されましたか。また観光を終えた今どの程度満足されていますか。問11-1の内容を全体的に考慮し、4段階評価でお答えください。

期待: 非常に強い やや強い やや弱い 非常に弱い

満足度: 4 3 2 1

12. 今回の奈良観光で印象に残ったエピソードや不満点等がありましたら、下記にご自由にご記入ください。

◎以下、あなたご自身についてお尋ねします。◎

I. あなたの年齢を教えてください。 II. あなたの性別を教えてください。(当てはまるものに☑を入れて下さい。)

- 10代
- 20代
- 30代
- 40代
- 50代
- 60代
- 70代
- 80代以上

男性 女性

ご協力、ありがとうございます。

- 若草山
- 平城宮跡
- その他()

9-1. 「奈良市」と聞いたときにイメージするものを選んでください。(複数回答可)

- 鹿
- 奈良絵
- 奈良漬
- 社寺仏閣
- 古墳
- まんとくん
- 葛
- その他()
- 特になし

- 大仏
- 柁の葉寿司
- 柁
- 阿修羅像
- せんとくん
- しまろくん
- 大和茶

9-2. 今回の旅行で何がデザインされている土産品を購入したいと思いますか? (複数回答可)

- 鹿
- 奈良絵
- 奈良漬
- 社寺仏閣
- 古墳
- まんとくん
- 葛
- その他()
- 特にこだわらない

- 大仏
- 柁の葉寿司
- 柁
- 阿修羅像
- せんとくん
- しまろくん
- 大和茶

10-1. 奈良市観光において、以下の要素についてあなたほどの程度期待していますか? 各項目、あなたの期待の強さとして当てはまる数字に○を付けて下さい。

	非常に強い	やや強い	やや弱い	非常に弱い
歴史的建造物・社寺仏閣	4	3	2	1
博物館・美術館	4	3	2	1
奈良公園の鹿	4	3	2	1
食事	4	3	2	1
登山・ハイキング	4	3	2	1
イベント・行事	4	3	2	1
交通網	4	3	2	1
独特の町並み・雰囲気	4	3	2	1
奈良らしい体験・記憶に残る経験	4	3	2	1
バリアフリー環境の整備度	4	3	2	1

10-2. 問10-1の選択肢にはないもので、他にあなたが奈良観光に期待しているものをお答え下さい。

◎以下、あなたご自身についてお尋ねします。◎
I. あなたの年齢を教えてください。 II. あなたの性別を教えてください。(当てはまるものに☑を入れて下さい。)

- 10代
- 20代
- 30代
- 40代
- 50代
- 60代
- 70代
- 80代以上

男性 女性

ご協力、ありがとうございます。

3. オープンキャンパスで使用したポスター

奈良市観光調査プロジェクト


COC/COC+推進室 特任講師 平 侑子



このプロジェクトでは、学生達が自ら作成したアンケートを奈良市を訪れた観光客の方々に答えていただき、奈良市観光の新たな一面を明らかにします。奈良信用金庫さん、奈良市観光協会さんといった地元の企業・組織の方々と連携し、プロジェクトを進めています。


奈良市観光調査プロジェクトには、1年生から4年生まで16人が参加しています。参加メンバーが奈良市の観光に関するそれぞれの興味を持ち寄り、「土産物」、「移動・ルート」、「訪問目的」、「イメージ・魅力」、「情報収集」の5つのグループに分かれて設問を作成中です。8月下旬にJR奈良駅前では観光客に声をかけて回答を集め、11月には、回収したデータをもとに、奈良市の観光に関して学生目線で政策提案を行います。

これまでの取り組み



7月6・7日：初顔合わせ
└ オリエンテーションを開き、和気あいあいとした雰囲気でご挨拶をいたしました。


7月12日：奈良信用金庫さんとの会議
└ グループ分けを行い、各自の興味について信用金庫のご担当者さまに発表しました。



7月13日：KCNのテレビ取材
└ KCNさんの取材を受けました。自分たちの取り組みや調査への意気込みを発表し、8月2日にテレビ放送されました。

7月中旬～下旬：資料集め&グループ会議
└ 各グループで先行研究や過去のデータを探し、どのような設問を作るか会議を重ねました。

7月27日：奈良市観光協会によるご講演
└ 奈良市観光協会の専務理事 鷺見 哲男様をお招きして、奈良市の観光の現状について教えて頂きました。学生達からは多くの質問が飛び交い、各自設問を作る上で非常に有意義な機会となりました。



8月8日：発表(予定)
└ 奈良信用金庫の担当者さんに各自で作った設問を発表し、コメントをいただく予定です。手直したアンケートを持って8月下旬、調査実施！

平成28年度の就職(企業との関わり)について

～県内就職先の開拓：位置付けと、企業・学生向けアンケートの準備と実施～

1. 位置付け

8月6日に本学がオープンキャンパスを行い、「県内就職先の開拓」の業務とアンケートの位置付けをポスターで発表した。

奈良県立大学 COC/COC+推進室の「県内就職先の開拓」のご紹介

COC/COC+推進室 特任准教授 増本貴士

★現在、奈良女子大学・奈良工業高等専門学校・本学(奈良県立大学)の2大学1高専で、共同の「企業様と学生達への就活に関するアンケート」を準備しています

※奈良女子大学と奈良工業高等専門学校とは、文部科学省の「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の“共創郷育:「やまと」再構築プロジェクト”(幹事大学は奈良女子大学)で連携しています

<概要>
 卒業生の進路の多様性を確保するため、県内の就職先を開拓しその情報を的確に届ける仕組みを構築します。その際に、企業様と学生のニーズをくみ取った上で適切なマッチングが重要となります。
 すなわち、「**企業が求める人材像**」と「**就職希望がある**」「**学生達が望む企業像**」と「**内定獲得の条件**」を連携して調査し、各大学や高専で独自でもしくは共同で行う教育とキャリア支援の有機的な接続によって取り組みます

<具体的には？>

- ①企業様と学生達にアンケートを実施(今年度)
- ②上記①の結果から、企業様の人事ご担当者様にインタビュー
- ③上記①の結果と、求人票や就職実績による「内定を獲得した学生」と「採用した企業」を分析し、マクロ的な情報分析を行う

⇒県内就職先の企業様の分析と、上記①②③のデータで、マイクロ・マクロなデータを元に開拓の準備を行います

例:アンケートで調査する必要とされる“能力”とは？

社会性 基本的なマナーや態度を身に付けている。 企業や公営庁のルール、社内のルール、約束等を自らが行ったこと思ったに責任を持ち、果たそうとする ストレスを耐える状況(環境)に、自らを動かすことができる 卒業心をもち、自分の居場所をコントロールできる	読解力 意見や立場、バックグラウンド等の違いを理解できる ゲームワークを重視し、協調的に行動する 相手の意思を丁寧に察知 自分の考えを分かり易く説明し伝える ゲームをとおして、共に生きていく	知識力 幅広い知識・教養を身に付けている 外国語の運用能力を身に付けている 専門的な知識・技能を身に付けている 基本的なPC操作、インターネットの使用ができる プレゼンテーション、記録の基本的な取扱いを身に付けている
就業姿勢 仕事に対するやる気、意欲、使命感を持って働くことができる 任せられたことは黙ってでも最後までやり通す 目標を立てて計画的・積極的・自主的に取り組む 自らの権限内で、進められる前に自ら考え実行する 空気感に敏感	課題解決力 新しい課題や困難な課題にチャレンジする 困難な課題に基づき、物事を論理的にとらえようとする 決まった手順や方法を守り、着実に実行する 適切な条件を(ラフ)よく考慮し、調整できる 物事に縛られず、独自のアイデアや方法で問題解決できる	※ 就職に関する「就活」等の文章で選択し、企業様と学生の回答の集計から、その専(キャリア)を明らかにする。それと併せての就職希望等のキャリア教育の結果。 ※ 早期の就活支援、早期の就職の内定獲得、奈良での就職。

写真 オープンキャンパスでのポスター

2. 平成 28 年度に準備したアンケート

「県内就職先の開拓」には、企業と学生のニーズを調査し、その調査結果を用いてマッチングする必要がある。そのため、今年度前半にアンケート項目を作成し、同時に、どう EXCEL で数値化して分析を行うかについて準備を進めた。今年度は、企業向けアンケートしか行うことがで

きず、学生向けは本学では来年度に行うことを予定している。

アンケートでは、各質問項目で判断・選択する回答をパーセントとその基準を簡単に説明した文を記載することで、回答者が回答しやすいようにした。すなわち、「非常に重視（70%以上）」「やや重視（40%以上～70%未満）」「少し重視（10%以上～40%未満）」「どちらでもない（0%以上～10%未満）」「あまり重視せず（-10%以上～-40%未満）」「やや重視せず（-40%以上～-70%未満）」「ほとんど重視せず（-70%以上）」とし、「非常に重視」等の各程度は各項目のカッコ書きを“目安的な”重視度の数字として考えるように注意を促した。さらに「あまり重視せず」「やや重視せず」「ほとんど重視せず」は、数値の前にマイナス（-）がついており、こちらも注意を促した。これらを読んで、当てはまる各欄に○印をつけて回答するようになっている。次ページに実物を示す。

3. アンケートの分析手法

各アンケートに記載された（○印をつけられた）ものを集計し、「非常に重視（70%以上）」は3点、「やや重視（40%以上～70%未満）」は2点、「少し重視（10%以上～40%未満）」は1点、「どちらでもない（0%以上～10%未満）」は0点、「あまり重視せず（-10%以上～-40%未満）」は-1点、「やや重視せず（-40%以上～-70%未満）」は-2点、「ほとんど重視せず（-70%以上）」は-3点に読み替えて、EXCELに打ち込んで集計・処理を行う。

集計で、各項目の点数を足していけば、企業が求める人材像は「合計点数の高い項目の順位（ベスト）で、高い順位の項目を多く持つ学生」であることが分かる。逆に、企業が求めない人材像は「合計点数の低い項目の順位（ワースト）で、低い順位の項目を多く持ってしまった人材」であることも分かる。

アンケートでは、企業名が記載され、企業のデータもある程度は分かることから、業種等によって求める人材像が変化するか等を回帰分析である程度チェックすることもできる。

4. 平成29年度に向けて

本学では平成29年度に学生向けアンケートを行い、企業向けアンケートとのギャップを調査・分析する予定である

- ①下記の各アンケート項目について、右横に伸びた「非常に重視」から「ほとんど重視せず」までに該当する枠に「○」印をお付け下さい。
 ②「非常に重視」等の各程度は、各項目のカッコ書きを“目安的な”重視度の数字としてお考えください。
 ③「あまり重視せず」「やや重視せず」「ほとんど重視せず」は、数値の前にマイナス(-)がついておりますので、ご注意ください。

各アンケート項目の重視度(%)	非常に重視 (70%以上)	やや重視 (40%以上～70%未満)	少し重視 (10%以上～40%未満)	どちらでもない (0%以上～10%未満)	あまり重視せず (-10%以上～-40%未満)	やや重視せず (-40%以上～-70%未満)	ほとんど重視せず (-70%以上)
基本的なマナーや態度を身に付けている							
企業や公官庁のルール、社会のルール、約束等を守る							
自分が行ったこと・言ったに責任を持ち、果たそうとする							
ストレスを受ける状況・環境等に、少しは耐えることができる							
平常心を持ち、自分の感情をコントロールできる							
仕事に対するやる気・意欲・使命感を持って働くことができる							
任されたことは難しくても最後までやり遂げる							
目標を立てて計画的・積極的・自主的に取り組む							
自分の権限下で、言われる前に自ら考えて行動する							
奈良県内で就職したい							
意見や立場、バックグラウンド等の違いを理解できる							
チームワークを重視し、協調的に行動する							
相手の意見を丁寧に聞く							
自分の考えを分かり易く説明し伝える							
チームをまとめ、引っ張っていく							
新しい課題や困難な課題にチャレンジする							
客観的な事実に基づき、物事を論理的にとらえようとする							
決まった手順や方法を守り、着実に実行する							
複数の条件をバランスよく考慮し、調整できる							
前例に縛られず、独自のアイデアや方法で問題解決できる							
幅広い知識・教養を身に付けている							
外国語の運用能力を実用レベルで身に付けている							
専門的な知識・技能を身に付けている							
基本的なPC操作、インターネットの使用ができる							
プレゼンテーション、討論の基本的な技術を身に付けている							

5. アンケート結果から、学生に伝えたいこと

これまでの打ち合わせから、下記の3点を学生に伝える。

- ①学生が低く評価したもの（-1、-2が多い項目で、「知識・技能」だろう）に対して、企業は現段階でも十分に高く評価しているので、過度に卑下する必要はない
- ②企業は「知識・技能」よりも、「社会規範」や「就業姿勢」を重視しており、「一緒に働けるか」「社会人として通用するか」を考えている
- ③学生は「知識・技能」を学ぶために進学しているが、企業が求める「社会規範」や「就業姿勢」を育てる授業はキャリア教育になる。ゆえに、PBL型等の学生がチームで行い、企業や社会人の方と一緒にする・プレゼンする等の関わりを持って学ぶ機会があれば、「社会規範」や「就業姿勢」を涵養することになる

これらの3点は、3校のCOC+コーディネータ会議で共通の認識となっており、平成29年度の連携授業等で学生達に指導していく。

今後の取り組み

～『やまといろプロジェクト』での官産学金連携「企業研究プロジェクト」～

執筆者：奈良県立大学特任准教授 増本貴士

1. 平成 29 年度に行う『やまといろプロジェクト』内の「企業研究プロジェクト」

平成 29 年度（来年度）に行う『やまといろプロジェクト』も、今年度と同様、奈良信用金庫と連携して、COC+事業での教育の「地方創生を担う人材育成」に取り組む。具体的には、財務省近畿財務局と奈良県下の企業の支援を得て、「企業研究プロジェクト」を立ち上げる。

「企業研究プロジェクト」は、①官産学金連携で行う、②就職活動に必須の“企業研究”の力を養成する、③理論と実践を融合させる——の 3 本柱で内容を充実させ、2～3 年次の学生をメイン（1 年次と 4 年次の学生の参加は可能）に取り組む。参加想定人数は 15 人であり、本学の地域経済コモンズを中心に学生募集を行う。

下記に、現時点での準備内容を述べる。

①官産学金連携で行う

平成 29 年 2 月 11 日に開催された「産学連携『やまといろプロジェクト』成果報告シンポジウム」にて、奈良信用金庫の川井喜樹理事長が「奈良の活性化には、個別の努力だけではなく、地域として力を合わせた取り組みが重要である。そのためには、官産学金連携の強化が求められる」と開会挨拶で言及があった。さらに、近畿財務局の支援をやまといろプロジェクトで受け、奈良信用金庫と関係の深い奈良県内の企業を知り、インターンシップにも行くことで、官（近畿財務局）・産（奈良県内の企業）・学（本学）・金（奈良信用金庫）が連携して COC+事業での教育の「地方創生を担う人材育成」ができる。

②就職活動に必須の“企業研究”の力を養成する

就職活動では、学生達がしなければならないことのひとつに“企業研究”があり、企業の概要や事業内容等を知ることはもちろんのこと、IR 情報（Investor Relations：投資家向けの広報）や BS（Balance Sheet：貸借対照表）等の数値情報を理解することまで求められる。さらに、学生達が学んだ知識・理論を用いて EXCEL で実際にシミュレーションすれば、学んだ知識・理論の理解度合いを自ずと知ることができ、これをカバーすることができる。幸いなことに、近畿財務局には公認会計士の資格を保有する職員が勤務し、企業研究プロジェクトで企業のデータ分析（例えば、BS シートからの企業の財務状況を把握する）やマネーの面から考えるライフプラン等を講義する予定なので、学生達に企業分析の仕方やライフプランを立てる・シミュレーションする力を身に付けさせることができる。

③理論と実践を融合させる

座学で学んだ知識・理論を、実際に EXCEL で実習してみることは知識・理解の確認になることは上述した。しかし、企業研究プロジェクトではこれだけでは不十分と考え、学生達が近畿財務局や大阪市内の公官庁等を見学・訪問し、かつ、夏季休暇中に奈良県下の企業にインターンシップに行くことを計画している。すなわち、これらは、知識・理論を実習だけでなく、インターンシップに活用することで、学生達の就職活動に必要な諸能力やキャリア意識の向上につながる事ができる。

よって、学生達は、“知識・理論”と“実習・インターンシップ”が融合することが自分自身の力になり、自己肯定感も持てる。

2. 「企業研究プロジェクト」のスケジュール案

企業研究プロジェクトは、本学のフィールドワーク科目で単位認定を受けるため、単位認定必要時間数の 22.5 時間 (1.5h×15 回) を確保できるスケジュールを立案した。基本的に学生が各自自由に企画・立案・実行して申請し、自宅と大学以外で活動することが条件で、大学に外部の方が来て活動すれば学内活動として扱われ、単位認定の対象となる。

下記に、スケジュール案を示す。

	実施日時 (仮)	講義内容	講師	時間
第 1 回	5/9 と 5/16 の 5・6 限	奈良県内企業の紹介 講師のご講演	観光関係企業	1.5
			女性経営者	1.5
第 2 回	5/23 と 5/30 の 5・6 限	奈良県内企業の紹介 講師のご講演	奈良信用金庫自体の紹介	1.5
			特産品 (食品) 関係企業	1.5
第 3 回	6/13 の 5 限	ライフプラン講座 PC での EXCEL 実習	近畿財務局職員 金融調整官	1.5
第 4 回	7/11 の 5・6 限	企業のデータの分析・ 収集・整理 PC での EXCEL 実習	近畿財務局職員かつ公認 会計士資格取得者	1.5
			審査業務課	1.5
第 5 回	夏季休暇中 (8・9 月に 1 週間)	インターンシップ	奈良県下の企業の担当者	40
第 6 回	夏季休暇中 (9 月後半) 10 時から終日	近畿管内の経済情勢 近畿財務局・公官庁の 見学と訪問	午前：人事課、若手職員	2
			午後：経済調査課、財務局	5
その他	平成 29 年 10 月以降	奈良県庁主催の就職 フェア	奈良県庁のフェアに参加	
	学外での調査活動	インターンシップの 成果報告書類、年度末 報告・発表準備		5

このように、学外の方からの授業、学外での活動 (見学・訪問)、インターンシップを組み合わせることで、フィールドワーク科目 1 単位 (22.5 時間) とインターンシップ 2 単位を取得できる。

平成 29 年度のピア・キャリア・サポート活動
～働くナラ・プロジェクト～

執筆者：奈良県立大学特任講師 須川 まり、平 侑子

1. 働くナラ・プロジェクト

今後は、ピア・キャリア・サポート団体を立ち上げ、そのメンバーによる「働くナラ・プロジェクト」を実施予定である。「働くナラ・プロジェクト」の活動内容は、学生が様々な業界の社会人（主に奈良で働く人）に、仕事観や地域についての思い、地域で働くことのメリット・デメリット、ワークライフ等をインタビュー調査し、小さなカードにまとめていくものを想定している。

2. 現在、以下のポスターを使って、広報中。

3. COC+事業に関わる参加協働機関（企業）から見た本事業の取り組みに対する評価

《奈良女子大学》

奈良経済同友会

奈良県の人口は平成 28 年 10 月 1 日現在で約 136 万人、17 年連続で減少。社会減（転入人口－転出人口）は平成 12 年から、自然減（出生人口－死亡人口）は平成 17 年からで、毎年の減少幅は徐々に拡大が進んでいる。

人口減少傾向の大きな要因のひとつとして、若者の県外流出が挙げられている。県内で生まれ育った若者、あるいは県内で学んだ学生たちが県外へ就職・移住していることがその背景にあると考えられている。そのような中、県内の主要大学である 3 校が、知(地)の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）に取り組み、卒業生の県内事業所への就職推進をはじめ、奈良県の地域活性化に貢献しようとしていることは、地元の企業経営者集団である奈良経済同友会にとって注目すべきことであると感じている。

奈良経済同友会では、奈良県経済の活性化を活動目標の大きな柱のひとつとしており、同事業の推進に賛同するとともに、今後の展開を大いに期待して、同事業の参加企業の一員として加わらせていただいた次第である。

平成 28 年度に当会として関わらせていただいたことの一つに、「県内企業の求める学生像に関するアンケート」がある。県内企業が求める学生像を明らかにし、今後のキャリア教育に活用するため、当会会員企業 169 社にアンケートを実施し、半数を上回る 85 社から回答を得ることができた。アンケートの結果としては、学生を持つ知識や技能も大切だが、それ以上に基本的なマナーや責任感、意欲、使命感などを重視する傾向が見られ、就職活動に際しては学生の社会人としての素養や熱意、仕事に対する意欲などがより問われていることがわかった。

また、1 月には奈良女子大学と当会共催で、「グローバル化」「国際交流」をテーマに交流・懇談会を開催し、COC+事業の推進、今後の更なる発展に向けて基盤固めをおこなった。

奈良経済同友会では、COC+事業への参加は、単に社会的貢献事業としてのみならず、人手不足が懸念されるなか一人でも多くの優秀な若者の獲得に向けて、県内大学卒業生の受け皿としての役割も果たしていきたいと考えている。COC+事業の事業目標の一つである、卒業生の県内就職者数倍増を達成するためには、何よりも学生の県内企業認知度を向上させることである。まずは、県内には目立たないけれどときらりと光る企業がたくさんあることを学生に知ってもらうことである。当会が年初に発表した「平成 29 年年頭所感」においても、「インターンシップの積極的活用」「経営トップの出張講座実施」の 2 点を取り組み事業の最初に掲げ、学生が県内企業への関心を高めてもらうための活動を展開する予定である。

今後、大学関係者の方々と緊密な連携を図り、奈良県の地域活性化、とりわけ卒業生の県内就職者数の倍増をめざし、COC+事業に積極的に関わっていききたいと考えている。

《奈良工業高等専門学校》

平成 28 年度の本校 COC+事業の取り組みに対し 13 事業協働機関・部署にアンケート調査を行い、11 機関・部署から回答を得ました。(回答率 85%)

① 平成 28 年度 奈良高専 COC+事業の総合評価

- [A] 大変評価する ⇒ 9 機関
- [B] 評価する ⇒ 2 機関
- [C] あまり評価しない ⇒ 0 機関
- [D] 評価しない ⇒ 0 機関

※回答協働機関における好評価（〔A〕 + 〔B〕）率：100%

回答を得た全ての協働機関・部署から高評価を得ることができ、平成 28 年度の本校 COC+事業が奈良県において着実に認知・評価されてきました。

② 県内雇用促進、県内就職促進に関し頂いた主なご意見・ご要望等

- ・県内企業と本校学生とのマッチングを目的とした企業紹介イベントやインターンシップ、企業訪問などの積極的な推進。
- ・県内企業が抱える課題等をテーマとしたアイデアワークショップや体験型ワークなど、教育を通じ企業との触れ合いを高めていく施策の推進。
- ・ものづくり企業の技術者と学生が共同で行うグループワークなどの実施。
- ・企業幹部による特別講義等を通じた地方創生授業の継続実施。
- ・企業との共同研究に取り組む学生が当該企業へ就職していくスキームづくり。
- ・協働機関との連携講座、共同研究講座の開設。
- ・企業紹介イベント等では、各企業ブースでの対話だけでなく、全参加学生に一斉に PR できるよう各企業からのプレゼンの機会があると企業の魅力を広く伝えることができる。

③ COC+事業全般を通じての主なご意見等

- ・今後も COC+活動に事業協働機関として協力していく。
- ・色々な施策を講じられており、ありがたい。
- ・地域課題に向き合い、地域の抱える課題を技術者の立場から考え、専門性を生かした方法で解決しようとする奈良高専の取り組みに賛同する。今後も協力して本事業を推進していきたい。
- ・奈良高専の若手教員と地域企業との交流の場を増やして頂きたい。
- ・奈良高専と協働で地元での農業体験事業を進めていきたい。
- ・奈良高専と地元企業との産学連携の取り組みを後押ししていきたい。

※今回のアンケートを通じ、奈良高専への高い評価と共に、今後の COC+活動へ高い期待が寄せられております。それら期待に応えられるよう平成 29 年度以降も引き続き、教育・研究両面から更なる地域貢献に取り組んでまいります。

COC+参加協働機関（自治体）から見た本事業の取り組みに対する評価

《奈良女子大学》

1. 奈良県

奈良県の女性の就業率は全国最下位であり、全国と比べて、30代の子育て期に大きく落ち込み、40代では全国では20代後半と同程度に大きく回復しますが、本件では十分に回復していません。

また、本県では、「男性は仕事、女性は家庭」といった固定的性別役割分担意識が、全国と比べ強く、特に30～50代男性で強くなっています。本県の女性の県外就業率は全国2位ですが、就職・転職希望の約8割が県内就業を希望している状況です。

このような状況を踏まえ、奈良県では「女性活躍に関するマインド改革」や「女性の県内就職の促進」等に力を入れて取り組んでいます。

このため、地域を志向した教育と地域活性化、地域が求める課題解決等奈良県の地方創生に大学として取り組むやまと共創郷育センターのCOC+事業の事業協働機関として、奈良県では以下の取り組みを実施しました。

1. 講師派遣

「奈良で働く」ことを考えるセミナー第1回、第2回に県から講師を派遣しました。

日時：平成28年6月28日（火）

テーマ：「奈良で輝く女性たち」

講師：奈良県こども・女性局女性活躍推進課長 金剛 真紀
奈良県女性センター所長 上中 三恵

県の女性活躍の現状及び平成28年3月に策定した「奈良県女性の輝き・活躍促進計画」の基本的な考え方や、地域で活躍できる女性の育成を目的としたセミナー等、奈良県の取り組みを紹介しました。

2. フォーラムの共催

女性が個性と能力を十分に発揮し、活躍することができる社会の実現に向けて、男女がどのような意識を培い、どのような行動をとるべきかを考えていただくため、社会の第一線で活躍している女性ロールモデルや有識者による「奈良県女性の活躍促進フォーラム」を奈良県と奈良女子大学との共催により開催しました。

平成28年12月17日（土） 奈良女子大学記念館

第一部「女性の活躍～あなたに贈るメッセージ～」

講演 前厚生労働事務次官 村木厚子氏

第二部「『男女がともに支える暮らしやすい奈良県』をめざして」

パネルディスカッション

奈良県男女共同参画県民会議会長 音田昌子氏

奈良のママが仕事をつくる会代表 井上京子氏

同志社大学教授 川口章氏

産業カウンセラー 舟橋正枝氏

3. 協働の取り組み

(1) 「女性の活躍応援ジャーナル」インタビュー

奈良県が発行した女性の活躍応援ジャーナル「Compass」への掲載記事として、結婚・出産・育児を経て働き続けてこられた先輩である前厚生労働事務次官村木厚子氏に対し、奈良女子大大学院の学生2人がインタビューを行いました。

日時：平成28年12月17日（土）

女性の活躍応援ジャーナル「Compass」

結婚、妊娠・出産、子育てを意識する年代の女性が、子育てと仕事を両立しながら活躍している女性の姿などを通して、働き続ける意識を持つことができるよう、女性の活躍応援ジャーナルを創刊

①創刊号の内容

- ・奈良県内企業で活躍するワーキングマザーへのインタビュー
- ・村木厚子氏（前厚生労働事務次官）への奈良女子大学大学院生によるインタビュー
- ・女性が元気な企業紹介
- ・女性起業家の紹介

②仕様 A4版、12ページ、フルカラー、20,000部

③主な配布先

- ・県内企業（出向いて直接配布）
- ・県民お役立ちコーナー、県内市町村、公立図書館など
- ・企業合同説明会などのイベントに出向いて配布
- ・コンビニ（ファミリーマート）、書店（啓林堂）など



(2)県内大学生が創る奈良の未来事業

平成28年度「県内大学生が創る奈良の未来事業提案事業」の一つとして、「女子大学生のためのキャリア形成プロジェクト」の事業化を検討するため、提案メンバーである奈良女子大学学生・大学院生のほか、やまと共創郷育センター及び県によるプロジェクトチームを立ち上げ、平成29年度事業実施に向け準備を進めました。

以上のように、やまと共創郷育センターと奈良県が連携・協力しながら事業を実施することにより、県の女性就労支援の取り組みの対象の一つである若年層のニーズ把握や効果的な事業企画に効果が見られました。

引き続き、相互の事業について協力して推進していきます。

2. 野迫川村

■奈良女塾の実施について

まず、村内には塾がないということで、この事業を実施した。

野迫川小・中学校の児童生徒数は、合わせて15名である。(平成29年2月28日現在)

身近に高校や大学がない地域であるため、村内の子どもたちにとって大学生と触れあうことは大変貴重な機会となった。特に、塾の中で「未来講座」という大学生の暮らしの話をする機会を設けたことで、子どもたちに刺激を与えることができ、大人の世界に夢を膨らませている児童生徒が多くいた。

図 1 勉強の様子



図 2 スポーツの様子
図 3 調理実習

しかし、住環境学科の学生のみが塾に参加されていると、得意分野に偏りが出ているように見える。塾の様子を拝見すると、難解な問題を解決できていない場面が時折見受けられた。勉強を教えるせつかくの場なので、大学で教職課程を取得する学生や、日頃から児童生徒の学習科目に触れている学生に来て教えていただいた方が有効的ではないかと思う。そしてこの事業に参加することで大学の単位取得に反映することができれば、よりいっそうの効果が見込まれることが期待される。

■中山研究室の授業について

11月19日（土）、11月20日（日）に大学2回生40名が村を訪問した。

平成23年9月に起きた紀伊半島大水害について、被害に遭った集落の区長が当時の状況について説明した。山村地域ならではの自然の険しさもあるが、村民同士の助け合いやつながりの濃さなど田舎らしいコミュニティ力を伝えることができた。

その後、村内にあるアマゴの養殖場やその他の集落の見学などを行い、野迫川村らしさを体感してもらった。

■まとめ

人口が少なく少子高齢化が進む本村では、若者の存在はとてもありがたく、村民のエネルギーとなる。したがって、大学生に対する期待はとて大きい。現段階では小・中学生を対象とした事業のみであるが、それに限らず、村民向けのパソコン教室やスポーツを通じた交流など、村民全体を巻き込んでいくように事業を展開していただきたい。大学生にとっても、村民との交流を通じて得た経験を今後活かしていただければ幸いである。

<下市町>

■コミュニティ・リサーチ

下市町の地域コミュニティの課題について知識を深め、コミュニケーションやプレゼンテーションスキルの向上を図る目的で、数回にわたり下市町の各所を訪問し地域住民と交流しながら地域状況等のインタビュー（集落点検等）を実施。

◆5月22日（日）

○下市町栃原区直売所「道しるべ」訪問、柿の間引き作業

地域住民が運営する直売所「道しるべ」を訪問し、運営に対する思いや今までの取り組みを住民から直接説明を受ける。その後、柿農家の指導により柿の間引き作業を行う。作業をしながら柿農家と様々な話をする事ができ、農業の楽しさ、しんどさを体感する事ができたと思う。

○下市町西山区での女性グループ・インタビュー及び下市町南部エリア見学

西山区出身の町職員から地域の沿革、学校の変遷、人口推移について説明を受ける。その後、西山区の女性グループを集めてインタビューを実施。インタビューは、教員と学生が数グループに分かれて聞き取り調査を行うといった実践的な手法で実施。



◆6月11日(土)

○下市町平原区のピザハウス Erba、寺、神社での説明等

教員と学生を3グループに分け、地域住民が運営するピザハウス Erba、寺、神社を順に訪問。それぞれの場所で地域住民から取り組みや習慣について説明を受ける。本地域の取り組みは人口減少の中で元気な地域づくりを行い、次の世代に地域を繋げる(バトンタッチする)ことを目指しており、その思いを直接聞くことができたと思う。

○下市町内での徒歩によるフィールドワーク

教員と学生、町職員等を5つのグループに分け、地域資源発掘、観光資源発掘、買い物マップ、農林塾とテーマを決め、フィールドワークを実施。学生自らが事前周知なく地域住民にインタビュー等を行い、地域の資源を見つける取り組みを通して地域の事を深く知ることができたと思う。

■7月16日(土) 奈良女子大学 下市アクティビティセンターがオープン

下市町内でフィールドワークを行う学生らの活動拠点となる施設がオープン。また、地域住民との交流の場や町の移住定住相談コーナーとしても活用し、地方創生にも繋げる。

■コミュニティ・アクション

下市町の地域コミュニティの課題について知識を深め、コミュニケーションやプレゼンテーションスキルの向上を図る目的で、2つのグループに分かれて、観光ビデオクリップの作成、ご当地ソフトクリームの開発を行う。下市町としては成果品は本気で継続的に活用する事としている。

◆観光ビデオクリップ グループ

グループを3班に分けて、班ごとに取材先のアポイントや取材スケジュールを組み観光ビデオクリップを作成。班ごとに下市町を訪れ、下市アクティビティセンターを拠点に取材等を実施。作成したビデオクリップは、町営CATV、町ホームページ、町SNS、観光イベント等で活用する。



◆ご当地ソフトクリーム グループ

県内を中心としたソフトクリームの市場調査を行った後、ソフトクリームの原料となる下市町の地域資源の掘り起しを行い、柿・梅・トウキなどを使ったソフトクリーム開発を行う。学生からは吉野杉のスプーンを使う提案等もあり現在製作中。開発したソフトクリームは3月12日に広橋梅林で行われる「梅の里山まつり」で試験販売した後、町内の直売所や温泉で継続的に販売する。



■感想

下市町としては、学生が地域で自ら学ぶと共に、地域も元気になる取り組みを目指しています。集落点検、地域資源発掘、観光ビデオクリップ、ご当地ソフトクリーム等の授業の成果を下市町が継続的に本気で活用することにより、地方創生の推進にも繋がると考えています。またその過程を学生が見て学ぶことにより地域での仕事に興味を持ち県内で働き活躍する人材の育成にも寄与したい。

<十津川村>

COC+事業の取組に対する評価

■奈良の木造形演習

十津川村での実地演習として、10月22日、23日に奈良女子大学の1、2回生を中心に学生等23名が十津川村を訪れ、木造公共施設の建設現場の視察や間伐体験、木工体験を行った。

◆10月22日(土)

○十津川第二小学校建設現場、高齢者向け住宅「高森のいえ」建設現場の見学

十津川村南部の3小学校の統合に伴い、来年度4月開校に向けて建設工事中の十津川第二小学校の建設現場を見学した。

工事受注者の現場管理人の方から小学校の構造や配置について説明を受け、各部屋の構成、構造や木材の使い方、集成材や無垢材の違い等について、丁寧にご説明いただいた。「木造公共施設の建設現場を直接見る機会が少ないため、基礎や下地が出ている状態での見学は勉強になった」と学生から感想をいただき、木材のもつ特性や木の良さを体感していただけたと思う。

◆10月23日(日)

○間伐体験及び皆伐作業現場の見学

十津川村林業研究会及び奈良県南部農林振興事務所林業普及第二課の協力により、5人4班体制となり、間伐体験を行った。また、架線集材(集材機)と高性能林業機械(グラブプル、プロセッサ)による集材と玉切りの様子を見学した。

間伐体験では、時間の都合上1人1本のみの体験となったが、急傾斜の道を10分以上かけて現場まで歩く大変さや立木が大きな音をたてて倒れる姿への感動など、木の管理の大変さや必要性を感じていただけたと思う。あわせて、山から木を出す方法を直接見ることができ、林業への関心が深まったようであった。



○木工体験

十津川木工家具協議会事務局の指導により、イーゼルの写真立てを作成した。指導者から丁寧な作業が良い作品につながるなどの指導を受け、学生は熱心にヤスリ掛け、ビス止めを行い、作品を完成させた。木工体験は、十津川村の木材を使った提案を今後授業でも行っていくとのことで、女性・若者の視点を生かした提案をもらいたいと指導者から話があった。



◆1月14日（土）

○作品発表及び講評

奈良の木造形演習の最終日程として、学生が授業を通して作成・提案していただいた作品の発表及び講評を行い、本村から十津川木工家具協議会の事務局長と役場職員が参加した。

女性らしい作品が多く見られ、細かい部分（木目、手触り等）にまでこだわって作られていることが伝わってきた、との講評であった。今後村で作られるカフェで女子大学専用のスペースを設けて、作品を展示することができたら

という、今後の連携に向けての新しい提案が出た。

また、女性らしい視点（サイズ、ニーズ）が今後の村の木工作品に生かしていけるヒントになると感じた。女子大生の感性や女子大生のもつネットワークを通じて、このような作品の提案や林業の必要性をどんどん発信してもらいたい。



○感想

今回参加した学生は、熱心に話を聞き、作業を行っていただいた。来年度以降も引き続きこのような体験プログラムを実施していただく予定であるため、この取組から十津川村への愛着につながり、定住につながればと思う。

資料集

奈良女子大学編

文部科学省
地(知)の拠点

やまと共創郷育センター第1回セミナー 『奈良で輝く女性たち』

日時 平成28年6月28日(火)
9・10時限(16:20-17:50)

場所 S228(文学系S棟2階)

定員:70名
申込不要
参加無料

◆スケジュール◆

16:20-16:30 開講挨拶

16:30-17:00 「女性の輝き・活躍の促進に向けて」
奈良県こども・女性局女性活躍推進課長 金剛 真紀 氏
女性センター所長 上中 三恵 氏

17:00-17:30 「奈良発!『女を楽しくする新聞』の発行20年
～女性の感性を生かせるフリーペーパー作り～」
(株)ウーマンライフ新聞社
取締役編集長 河本 敏江 氏

17:30-17:50 質疑応答



『地域の第一線で働く女性の生の声を聞いてみませんか』

当センターでは、地域で活躍できる女性に育ててほしいとの願いを込めてセミナーを開催することになりました。
将来に向け、視野が広がります。ぜひお気軽にご参加下さい!

主催:やまと共創郷育センター
共催:男女共同参画推進機構
学生支援室就職支援部門

お問合せ先:0742-20-3411
coc-yamato@cc.nara-wu.ac.jp

『奈良で輝く女性たち』(2016.6.28.開催)

文部科学省
地(知)の拠点

奈良県下市町・奈良女子大学連携公開講座 『地域の将来を考えるために-人口と経済-』

日時: 2016年7月16日(土) 10:30~12:00

場所: 下市町農村環境改善センター 2階 大会議室

定員
25名

昨年5月の公開ワークショップ「地域を知らう-下市町の今とこれから-」では、下市町各区の人口の現状や、明後で暮らしているお子さんの意識、地域を知るための「集落点検法」などについてお話しし、ワークショップの形でみなさんと意見交換をしました。今年度は、下市町にご協力いただき、地域の将来をみつめながら学生の教育を行う「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」を展開しています。本講座では、この事業の一端をご紹介するとともに、時間軸に沿った人口の変化から見る各区分の特徴、県や大都市圏など地域外との人と経済のつながり、とくに移住の問題を考えます。それらをふまえて、地域の将来をお考えいただくためのポイントなどもご紹介したいと思います。

奈良女子大学 人文科学系人文社会学領域 教授 水垣 源太郎

【お問い合わせ】

■奈良県下市町役場地域づくり推進課
■電話番号 0747-52-0001/FP 0747-68-9070
(平日 9:00~17:00)

参加ご希望の方は、お名前のご連絡先(可能な限り当日連絡のとれる携帯番号、または電話番号)を上記地域づくり推進課までお願いたします。荒天による開催等は当日御知らせし、申込はいております連絡先へお電話いたします。

【下市町農村環境改善センター】

■住所: 〒638-8510
奈良県吉野郡下市町大字下市1960
■電話番号: 0747-52-0001
■交通アクセス: 下市町駅から直線距離で2585m



【お問い合わせ】

■奈良県下市町役場地域づくり推進課
■電話番号 0747-52-0001/FP 0747-68-9070
(平日 9:00~17:00)

参加ご希望の方は、お名前のご連絡先(可能な限り当日連絡のとれる携帯番号、または電話番号)を上記地域づくり推進課までお願いたします。荒天による開催等は当日御知らせし、申込はいております連絡先へお電話いたします。

下市町
・マスコットキャラクター
・観光大使
ごんたくん

主催:奈良県下市町・奈良女子大学やまと共創郷育センター
共催:奈良女子大学社会連携センター

『地域の将来を考えるために-人口と経済-』(2016.7.1開催)

文部科学省
地(知)の拠点

やまと共創郷育センター第2回セミナー 『奈良の世界遺産』

日時 平成28年7月26日(火)
9・10時限(16:20-17:50)

場所 S228(文学系S棟2階)

定員:70名
申込不要
参加無料

◆スケジュール◆

16:20-16:30 開講挨拶

16:30-17:00 「奈良の世界遺産について」
奈良県地域振興部文化資源活用課
調整員 小池 香津江 氏

17:00-17:30 「モノの観光からコト・ヒトの観光へ」
奈良市観光協会
専務理事 鷺見 哲男 氏

17:30-17:50 質疑応答



『人々を魅了する奈良の世界遺産について考えてみよう』

今回は、奈良の魅力を新発見できるセミナーを開催します。
将来に向け、また1つ視野が広がります。ぜひお気軽にご参加下さい!

主催:やまと共創郷育センター
共催:男女共同参画推進機構
学生支援室就職支援部門

お問合せ先:0742-20-3411
coc-yamato@cc.nara-wu.ac.jp

『奈良の世界遺産』(2016.7.26.開催)

文部科学省
地(知)の拠点

地域を学ぶ 地域で学ぶ 地域を生かす 紀伊半島地域連携シンポジウム去2016

日時: 2016年8月6日(土) 13~15時

場所: 奈良女子大学文学系N棟202教室

定員
120名
参加無料
申込不要

国立大学の役割のひとつは、地方・地域と結びつき、現代社会に資することです。このシンポジウムを、紀伊半島の3県にある国立の3大学が主催し、地方・地域の活性化に知恵を出し合い、地方・地域に学習知を還元する場にしたいと思っております。

プログラム

ご挨拶 藤原素子(奈良女子大学副学長、やまと共創郷育センター長)
司会進行 内田忠賢(奈良女子大学学長補佐、社会連携センター長)

【報告1】「参加型地域活性化のためのホールシステムアプローチ」
中川正(三福大学人文学部・教授)

【報告2】「地元学・地域学の承襲」
内田忠賢(奈良女子大学研究院人文科学系・教授)

【報告3】「オーストラリア・インドネシアにおけるLGBTツーリズムの推進-自治体の役割に焦点を当てて-」
吉田道代(和歌山大学観光学部・教授)

総合討論



主催:奈良女子大学やまと共創郷育センター
共催:奈良女子大学社会連携センター
奈良女子大学共生科学研究センター

■お問合せ先
0742-20-3411
coc-yamato@cc.nara-wu.ac.jp
やまと共創郷育センター支援室

『地域を学ぶ 地域で学ぶ 地域を生かす』(2016.8.6.開催)

奈良女子大学やまと共創郷育センター第3回セミナー

未来の働くスタイル

第一部
今、女性の働くスタイルが大きく変わろうとしています。企業の中でもテレワークや再雇用が制度化され、国は女性起業家支援に大きな予算をつけています。専業主婦率全国1位の奈良県で、柔軟に働ける仕組みと環境作りを模索しているWomen's Future Centerの事例を紹介しながら、5年先、10年先の女性の働き方をお伝えします。

第二部
Future session というワークショップを通して、参加者一人一人が未来思考で働き方を含めます。自分では気づかなかった発見、自分の深層に気づき明日の一步が変わるかも？

講師・ファシリテーター 栗本恭子(くりもときょうこ)

1970年奈良生まれ。父親の職転で幼少は福岡で育ち、短大入学後に京都で就職。卒業後、結婚し2児を育てながら主婦として生活。専業主婦に、再発進を志す。子育てワークの重要性に気づき、奈良市内の子育てワークスペース「なら子育てネットワーク」立ち上げメンバーとしてワーク復帰。同時にフューチャーとして在学中のワークを再考。リマジンワークショップ、仕事は好きになり働く学校に入り直す。奈良県Webデザイナーとして活動始める。2014年から女性起業家支援「子育て女性支援実行委員会 Women's Future Center」を設立。JRI 奈良県選出 2 分の1 ところでキッズスペース付コワーキングスペースを運営。女性ネットワークを作り現在 300 人の会員を擁す。2016 年女性起業家支援プロジェクト LED 関西ファイナリスト、3 月の年。

10月5日(水) 14:40~16:10
 場所: N101 教室 (N棟の一番西)
 参加費: 無料
 事前申込み不要
 問合先: やまと共創郷育センター支援室
 Tel 0742-20-3989
 主催: 奈良女子大学やまと共創郷育センター
 共催: 奈良女子大学男女共同参画推進機構
 奈良女子大学学生支援室就職支援部門
 協力: 女性起業家応援プロジェクトLED 関西事務局



『未来の働くスタイル』(2016.10.5.開催)

やまと共創郷育センター第4回セミナー

「奈良クラブの活動とその歩み」 — 奈良にJリーグクラブを —

主催: 奈良女子大学やまと共創郷育センター
 共催: 奈良女子大学男女共同参画推進機構、奈良女子大学学生支援室就職支援部門
 協力: NPO法人奈良クラブ

講師 矢部次郎 奈良クラブ理事長兼GM

奈良県初のJリーグを目指すサッカークラブ「奈良クラブ」。来年にはクラブ発足10年目を迎えます。奈良クラブ理事長兼GMを務める矢部次郎氏がクラブ発足当初から今日までの歩みを振り返り、奈良にJリーグクラブを作るに志した経緯や、奈良県全域を拠点にサッカーを通じて人材育成、社会貢献、総合型スポーツクラブとして行っている様々な活動など、奈良クラブが描くクラブづくりについてお話しします。

なぜ今、奈良でJリーグを目指すのか、Jリーグクラブがもたらす効果、必要性、それには今何をすべきか。奈良の地で「勝ち負けより大切なものがある。」をコンセプトに、町の誇り、子どもたちの憧れとなるクラブづくり、地域創造に懸ける熱い思いを語ります。

矢部次郎(やべつじろう)
 奈良市出身。1978年生。奈良育英高校を卒業後、名古屋グランパスに入団。10年のプロサッカー選手を経て、奈良県奈良でJリーグクラブ創設を志し、日々奮闘中。

日時 10月27日(木)14:40~16:10
 授業科目「健康・スポーツ科学」内

会場 S235教室(総合研究棟文学系S棟2階)
 ※事前申込み不要

【問合先】 奈良女子大学やまと共創郷育センター支援室
 Tel 0742-20-3989

NPO法人 奈良クラブ
 630-8144 奈良県奈良市東九条町1112-1 中川院七商店内
 Tel 0742-93-3810 <http://naraku.jp>

『奈良クラブの活動とその歩み』(2016.10.27開催)

奈良県内企業魅力発見セミナー

平成28年
11月19日(土) 13:00~17:00
会場: 奈良女子大学 第1体育館
(集合: 12:00 N202教室 ガイダンス実施)

奈良県内の優良企業を知るチャンス!
 将来の働き方、生き方を考えてみよう!

友達と一緒に気軽に参加OK

- 本学学生を中心とする奈良県立大学、奈良工業高等専門学校との合同セミナーです。
- 参加企業別のブース(1企業1テーブル)を設けます。各企業の担当者として少人数で接することができるチャンスです!OGが来てくれる企業もたくさんあります。
- 奈良県は医療・福祉に従事する人の割合が高く、製造業では、繊維・プラスチック・食品加工が盛ん。高い技術をもつオーソライティング企業も多く、業界の動向、方向性、仕事内容、求める人間像等について直接聞くことができ、業界研究と仕事理解の重要な材料となります。

OGの話が聞ける

参加優良企業約20社

服装自由

「奈良しごとセンター」の相談窓口あり

■奈良女子大学 やまと共創郷育センター
 ■奈良女子大学 学生支援室 就職支援部門

※資料の準備の関係上、就職係カウンター受付でお申込みください。

『奈良県内企業魅力発見セミナー』(2016.11.19.開催)

奈良女子大生と学ぶ!消費生活講座

主催 奈良女子大学 消費者問題研究会 (BEACS)

何でも高く買いますよ 無料ですよ! 絶対もうかりますよ

今より安くなりますよ 今日だけの特別サービスあなただけに

奈良女子大学生の消費生活啓発サークルメンバーが、寸劇や景品付きクイズで、下市町の皆さんと楽しく消費者問題を学びます。

NO!

- ご挨拶とお話 大塚 浩(奈良女子大学 生活文化学科 准教授)
- 寸劇で学ぶ消費生活トラブル 学生メンバーと消費生活センター相談員による寸劇で生活上のトラブルについて学びます。
- 消費者カウイズに挑戦! 景品付きクイズで楽しく消費者問題について学びます。
- 質疑・相談コーナー 奈良大生と消費者トラブルについて相談していただきます

イラスト: 奈良女子大学消費者問題研究会 (BEACS)

12月3日(土) 13:30-15:30
下市観光文化センター 2階 研修室

定員50名 参加無料 申し込み不要 お問い合わせのうせげご参加を!
 共催 下市町 協賛 奈良女子大学やまと共創郷育センター
 協力 奈良県消費生活センター

お問い合わせ先
 下市町役場
 住民保険課 Tel:0747-52-0001 IP電話: 0747-68-9063

『奈良女子大生と学ぶ!消費生活講座』(2016.12.3.開催)

自分を 活かす 生き方・ 働き方

女性も男性も
元気になる！

平成28年12月17日(土)
13:30～16:00(13:00開場)

会場 奈良女子大学記念館講堂
(奈良市北魚屋西町)

定員 250名(先着順)

1
基調講演

女性の活躍 ～あなたに贈るメッセージ～

入場無料
託児あり

講師 村木 厚子 氏
(前厚生労働事務次官)



プロフィール
1955年高知県生まれ。1978年高知大学卒業。同年
労働会(現厚生労働会)入会。女性政策、障がい者政
策などに携わり、2008年雇用均等・児童家庭局長、
2012年社会・援護局長などを歴任。2013年7月か
ら2015年10月まで厚生労働事務次官。

2
パネル
ディス
カッション

『男女がともに支える暮らしやすい奈良県』を目指して
～男女の意識を変えるため、何が必要か～

コーディネーター

パネリスト

(50 音順)



青田 昌子 氏
(奈良県男女共同参画員会議会員)



井上 京子 氏
(奈良県のママが仕事を つくる会代表)



川口 章 氏
(同志社大学教授)



舟橋 正枝 氏
(産業カウンセラー)

参加申し込み▶詳しくは裏面をご覧ください。【主催】奈良県 【共催】国立大学法人 奈良女子大学

『自分を活かす生き方・働き方』(2016.12.17.開催)

地域を学び未来展望

奈女大、三重大、和歌山大連携シンポ

活性化への研究報告

奈良女子大学やまど共創郷育センター（藤原素子センター長）の紀伊半島地域連携シンポジウム2016「地域を学ぶ 地域で学ぶ 地域を生かす」が6日、奈良市北魚屋東町の同大で開かれた。

同半島地域の奈良女子大学、三重大、和歌山大学の3国立大学の地理学研究者が、地域活性化につながる研究、実践を報告。研究者や市民ら約50人が熱心に聞いた。

三重大大学人文学部の

中川正教授は「良いもの探し」と呼ばれる肯定的分析を計画立案、実践に結び付けるグループワーク「アプリー・イアリー（AIE）」と

の吉田道代教授は同性カップルなどセクシュアル・マイノリティーの観光客を誘致する「LGBTツーリズム」についてオーストラリアの公的取り組み事例を紹介した。

やまど共創郷育センターは同大が文部科学省「地（知）の拠点大学」による地方創生推進事業（COC+）に採択されたことを受け平成27年度に設立。県の地方創生に寄与する人材の育成と活躍環境の整備に取り組んでいる。



「アプリー・イアリー（AIE）」の実践を報告する中川教授（6日、奈良市北魚屋東町の奈良女子大学）

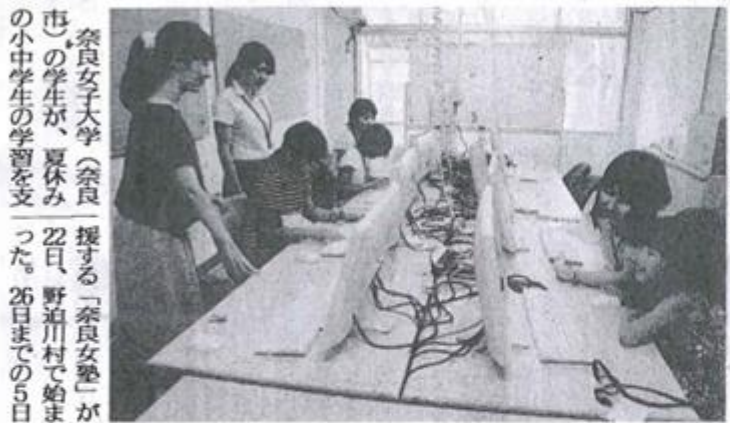
奈良女子大学研究院人文科学系の内田忠賢教授は「地元学・地域の系譜」と題し、70年代以降、各地で展開した自らの地域の歴史や魅力を見直す学問の系譜の整理から未来を展望。

和歌山大学観光学部

平成 28 年（2016 年）8 月 8 日『奈良新聞』掲載

小中学生の勉強お助け

野迫川 奈良女子大生が滞在



大学生のサポートで、パソコンを使った学習に取り組み小中学生22日、野迫川村北魚の奈良女子大学野迫川村交流センター

奈良女子大学（奈良）の学生が、夏休み22日、野迫川村で始めた。26日までの5日

間、学生が村内に滞在し、交流する。

同村の小中学生は計21人で村内に学習塾はない。文部科学省「地（知）の拠点大学」による地方創生推進事業（COC+）を進める同大学が今年3月に初めて実施し、子どもや村民に好評だった。今回が2回目で、住環境学部の3、4年生7人が参加する。

旧野迫川中学校の校舎を活用した交流センターで、村営バスの時間に合わせて午前8時から午後5時ごろまで開塾。学生が選んだドリルを解いたり、スポーツや音楽、料理などで交流したりする。

小学6年松越あゆか

さん（12）は「4日間来るつもり。夏休みの宿題でわからないところも大学生に教えてもらおうと思います」と話し、家ではあまり使わないというパソコンも楽しんだ。

奈良女子大4年の原友里恵さん（22）は「私たちにとっても、地域活性化などについて考えを深める貴重な機会。少子化社会での学びのあり方など、都市部でも遠くない未来の課題になるのでは」と話した。

平成 28 年（2016 年）8 月 23 日『奈良新聞』掲載

学生と住民交流の拠点

下市 奈良女子大が開設



学生や住民らの拠点となった下市ア
クティビティセンター（下市町で）

下市町の住民と共同でま
ちづくりを進めている奈良
女子大（奈良市）は、交流
やフィールドワーク研究の
拠点となる「下市アクティ
ビティセンター」を、町役
場そばの町農村環境改善セ
ンター一階に開設した。
約50平方メートルの元事務室
を、町の協力で改装。特産の
吉野杉を使ったテーブルや
いすなどを置き、学生や住
民らが集えるようにした。
7月に行われた開所式
で、奈良女子大の藤原素子
副学長は「地域の課題解決
に向けて、学生や地元住民
の交流拠点として幅広く活
用していきたい」とあいさ
つ。杉本龍昭町長は「大学
との距離を縮め、町の発展
に役立てたい」と期待を寄
せた。

究仲間と立ち寄りたり、住
民から話を聞いたりする場
として活用したい」と喜ん
でいた。
奈良女子大の過疎・高齢
化対策への取り組みは、昨
年度、県と下市町、十津川、
野迫川両村とともに、地域
創生を進める文部科学省の
事業に選ばれており、活動
拠点を置くのは野迫川村に
続いて2か所目。

平成 28 年（2016 年）8 月 23 日『読売新聞』掲載



現在の経営理念が生まれた理由などを語る
鴻池代表＝3日、奈良市北魚屋西町の奈良
女子大

「奈良の日本一」学ぶ

奈良女子大キャリアデザイン講座

鴻池スケーター代表が講義

学生者の県内就職率
向上に取り組み、奈良
女子大やま共創総
育センター（センター
長・藤原素子副学長）
は3日、新講義「キャ
リアデザインゼミナ
ール・日本一の奈良を知
る」を、奈良市北魚屋
西町の同大で開講し
た。約100人の学生
が受講した。
日本一の実績を誇

る県内の企業、産業界
から講師を招き、仕事
の魅力や事業、奈良へ
の思いなどを語って
もらい、業界研究とど
もに奈良再評価のきっ
かけとする目的で企
画。
第1回はスケーター
（奈良市）の鴻池良一
代表が「キャリアクワ
柄弁当箱シェア日本
一」で講義した。
鴻池代表は「万年筆
專業メーカーだったこ
ろ、消らかに書けるよ
うにと命名した」との
社名の由来や、キャラ
クター雑貨を扱うよ
うになった経緯などを
説明。その後、市場の
変化に乗り遅れたこ
とを契機に生まれた、

失敗を恐れず変化を続
けるとの経営理念や、
他社にはない発想と
デザインで独自の高
い商品を作るオンリー
ワン経営に転換してい
った過程などを語っ
た。

平成 28 年（2016 年）10 月 4 日『奈良新聞』掲載

県内企業22社の参加を得て行われた「県内企業魅力発見セミナー」＝19日、奈良市北魚屋東町の奈良女子大学



県内企業への就職率向上を目指し、奈良女子大学（今両春樹学長）は19日、県内企業22社が参加し初の「県内企業魅力発見セミナー」を奈良市北魚屋東町の同大で開いた。

県内企業で働いて

奈女大で魅力発見セミナー

22社が参加

学生120人熱心に

社風や環境 情報を収集

同大は文科省の「地域（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に奈良工業高等専門学校、県立大学とともに採択。セミナーには来年度以降に就職活動を始めることになる3校の学生ら約120人が参加した。

奈良女子大学では毎年約500人の卒業生を送り出す中で、就職希望者300人のうち地元に残るのは1割程度といいい、県内就職率向上が一つの課題。セミナーにはCOC+の参加企業11社のほか、大学OBが就職した企業を合わせ22社が参加。県・県警など官公庁や、医療・福祉・金融・保険業などさまざまな分野の企業が集まった。

会場は体育館では企業側のブースを学生らが回り、人事担当者らと企業の取り組みや社風、職場環境などを直接聞き、各社のイメージをつかんでいた。持ち時間は1回45分で説明を聞き、質疑応答できる。4社まで受けることができ、企業側も自社製品を持ち込んだり、映像を使うなどして積極的にPRしていた。

セミナーに来た奈良女大（19）の矢口佳奈さん（19）は「思っていた以上に収穫があり、情報を整理してこれからのことを考えた」と話していた。一方企業側からは「積極性と協調性のある人材が必要。学生さ

んからはいろいろ積極的に関わろうという熱意が感じられた」との声が聞かれた。

今岡学長は「時代も不安定になり、大企業に入ったからと言って必ずしも順風満帆とはいかない」とし、「学生らは真剣に人生を見つめようとしており、人材を望む企業などと学生とのマッチングにセミナーが役立て

ば」と来年度以降も継続していく考えを示した。

奈良工業高等専門学校編